

演劇会議

□ 第7回「演劇大学」を終えて……………	萩坂桃彦…1
ふじた演出の2日間……………	梅津幸三…10
演技分科会に参加して……………	汲田正子…11
舞台美術の分科会より……………	佐藤張二…14
7つの鍋の火加減……………	林陽子…17
■ 劇団通信……………	21
関西における戦前プロレタリア演劇の研究(40)……………	大岡欽治…37
□ 四国ブロックゼミナールと四国の演劇状況……………	畑野稔…45
嬉しい出逢い、哀しい出逢い……………	可能あらた…47
■ 劇評……………	
「閃光の遺産」(月曜会)……………	藤沢薫…51
「肉でもなく魚でもなく」(京芸)……………	菊川徳之助…53
本邦初演大阪弁ドイツ演劇(京芸)……………	丸子礼二…57
「おおつごもり」(阿波っ子)……………	三宅修…59
奥羽B観劇報告……………	藤村歩…60
中部B82年11月～83年3月の上演から……………	丸子礼二…63
観劇雑感……………	萩坂桃彦…66
□ 戯曲……………	
「手紙」……………	瓜生正美…72

53

1983年4月 ¥500

労働者演劇から生活者の演劇へ
不屈50年の業績——ここに全1冊として登場

黒沢参吉劇作集

好評発売中 ¥4,000(〒350)

◆収録作品

雷神長者	歌えわかもの	真土村一揆
ふかい疵	生まれた家	夜
日鋼室蘭	巣ばなれ	金魚修羅記
光江帰る	告 発	ただ海燕だけが
教育を!	俺たちの夜	とろいめらい
炉あかり	傷だらけの天使	海の墓
サチの暦	〈回想的解説〉萩坂桃彦	

黒沢参吉劇作集刊行委員会

団のぼる／萩坂桃彦／中沢研郎
関 昭三／須田輪太郎／和田能久

〒210 川崎市川崎区渡田4-11-3
はぎ書房内

「演劇会議」発行所

TEL 044 (333) 0775
振替 横浜0-17227

演劇会議

□ 第7回「演劇大学」を終えて……………	萩 坂 桃 彦…	1
ふじた演出の2日間……………	梅 津 幸 三…	10
演技分科会に参加して……………	汲 田 正 子…	11
舞台美術の分科会より……………	佐 藤 張 二…	14
7つの鍋の火加減……………	林 陽 子…	17
■ 劇 団 通 信……………		21
関西における戦前プロレタリア演劇の研究(40)……………	大 岡 欽 冶…	37
□ 四国ブロックゼミナールと四国の演劇状況……………	畑 野 稔…	45
嬉しい出逢い、哀しい出逢い……………	可 能 あらた…	47
■ 劇 評……………		
「閃光の遺産」(月曜会)……………	藤 沢 薫…	51
「肉でもなく魚でもなく」(京芸)……………	菊 川 徳之助…	53
本邦初演大阪 弁ドイツ演劇(京芸)……………	丸 子 礼 二…	57
「おおつごもり」(阿波っ子)……………	三 宅 修…	59
奥羽B観劇報告……………	藤 村 歩…	60
中部B82年11月～83年3月の上演から……………	丸 子 礼 二…	63
観劇雑感……………	萩 坂 桃 彦…	66
□ 戯 曲……………		
「手 紙」……………	瓜 生 正 美…	72

第2回・全リ演・演劇フェスティバル開催

- 期 日 1984年2月10日(金)11日(祝)12日(日)
会 場 岐阜・劇団はぐるま・御浪町ホール
内 容 ●東・西会議より3劇団づつ、6劇団上演
●記念講演
●上演にてらして、集団の強化、教育、学び合
いを主眼とした合評会
●装置・照明などの特別講習会
●大交流会
取 組 み 83年8月の総会までに参加(上演)集団の詮衡を
終えて、早期準備で成功をかちとろう

富山国際アマチュア演劇祭に 全リ演代表出演劇団決まる!

- 会 期 1983年9月23日～27日
会 場 富山県民会館ホール、砺波市文化会館ホール
早稲田小劇場利賀山房

全リ演代表 世仁下乃一座
岡安伸治・作「別れが辻」

世界11ヶ国から参加、覇をきそいます。
われらの“世仁下”に熱い声援を送りましょう!

富山演劇祭への問い合わせは、西会議・事務局
劇団大阪 (Tel 06-768-9957) 熊本一氏。



■劇団支木 「11人の教師と14人のエリートたち」 作/きしだみつお
演出/中野 健



■関西芸術座 「かくて新年は」 作/森本 薫 演出/富田悦史



■劇団生活舞台
「ほく生きたかった」
作/大橋喜一
演出/諸鹿芳英



■テアトル・ハカタ
「茶」
作/北条秀司
演出/野尻敏彦



■劇団同胞
「大阪城の虎」
作/かたおか・しろう
演出/沢田和彦



■演劇サークル麦の会
「偽原始人」
作／井上ひさし
脚色／爪生正美
演出／雪江 勇



■劇団大阪
「大枝の鬼」
作／かたおか・しろう
演出／堀江ひろゆき



■劇団螺線館
「楽 屋」
作／清水邦夫
演出／嶋田三郎



■劇団2月
「ぐうたら王とちよこまか王女」
作／村山亜土
演出／さねとう・あきら



■劇団どろ
「アンティゴーン」
作／ブレヒト
訳／八木 浩
演出／合田幸平



■黒石演劇研究会
「勲章の川」
作／本田英郎
演出／中込鉄雄



第7回・東会議「演劇大学」を終えて

第7回・東会議「演劇大学」を終えて

萩坂桃彦

(写真提供・埼玉・塚越松雄)

前回第六回の「演劇大学」は一九八一年二月七・八・九日であった。同じ年の八月には東・西が合同して「全日演」を結成したのだったのだから、いわばそれへの助走気味もあって準備にもいくらか活気があった。何よりも故黒沢議長が小康を得て健在だったし、大学にも参加して「あとがき」を書いてくれたりした。(「演劇会議」四七号)

ところが今年の第七回となると、正直事情が変わっている。変わったとは思えない。これはほくなどにも漸く訪れて来た老化のためもあるが、一つには、八二年二月の、岐阜御浪町ホールでの全日演「演劇フェスティバル」の成功がもたらした余瀾である。いっそ、毎年、この「フェスティバル」一本にしぼっていいのではないかという考え方が生じていた。ところが、それに待ったをかけるようにして、「大学」は続けて欲しいという声が少からずあがって来たのである。

その声は、どこから、誰からということではない。第一、毎回の大学では、大学も初めてなら劇団での経験も未熟な参加者が多い。来て欲しい幹部や中堅どころが、必ずしも来



■青年劇場
「フー・フー・殺人事件」
作／演出／飯沢 匡



■劇団やませ
「海村」
作／梶谷伸夫
演出／佐々木洋二



■劇団展望
「阿佐谷ひろば」文明の貧困」
集団創作／集団演出

てくれない。かれらは、若い劇団員を「演劇大学」に指示し派遣する側にまわっている。

だから、そうした人々からの要求もあったかもしれない。また、実際に「大学」を体験した人々からの希望——創作や美術の分科会で継続しているメンバー、或は演出、演技の分科会で、その都度目を見開かされた人たちの「止めないでほしい」の声も否定できない。運営委員会、とくにこばやし事務局長周辺はそうした声に動かされたわけである。しかし、それは重い腰であった。

「大学」の難関は、講師陣の調達である。今回も飯沢匡、久野収、鈴木光枝、古在由重、小田実、大江健三郎といったお歴々の名を挙げ、八方手をつくしたかたちで実現を見なかつたという事情でもそれは知れるだろう。第六回まで続いた「一般教養講座」は挫折とは言わないが、極めて隘路になったことは否めない。

窮余の一策の感で、発想の転換であった。演劇専門のジャンルにしばって、辛うじて可能になったのが、野村喬、中本信幸、田村恵、滝沢修各氏の陣容である。野村さんと滝沢先生は全くこばやさんの個人的作業に依るものであった。わけでも滝沢さんは今回の目玉

商品になった。

これを書いているばくの手許に、三十五枚のアンケートがある。帰り際の慌しいなかでの走り書きなので、それも参加者七十三名のうちの三十五枚は決して十分とは言えないが、それで見限る限りでも、参加者はほぼ満足だったと見る事ができる。

「色々な講座をおききして、根の深い芝居の思想が、現実の状況の中に現存していることを知りました。視野のひろさと、これからの自分のむかう姿勢を大事にしていきたいと思います。そんなことで刺激されてまた芝居の中へのめりこんでゆく自分が好きになりました。」（西井学・からっ風）
「劇団の在籍年数はあるけれど後輩に対して何も具体的には指導できずにいたのですが、今回学習したことの一つでも二つでも身につけて伝えたいと思います。」（無署名）

「野村さんの話にはじまり滝沢さんで終ったこの三日間、ぐっと真実のもの、真実に生きている人々にふれてうれしくなりました。」（水戸部真・静芸）
などが読める。もちろんこれで百パーセン

ト成功だったとするには無理があるが、これまでに不満のときはそういう反応ははっきり示されたのだったから、第一日目の講義が一寸難しかったとする声が二、三あるだけで、残りの殆んどは「来てよかった」の異口同音である。「来てよかった」というのは初回者にわく感想である。今後「大学」は懲りずに「初回者」を歓迎すべきことを教えている。

参加した劇団からの人員数は次の通り。
弘演（1）、支木（7）、黒石（2）、仙台小（5）、山形（2）、だいこん座（1）、おけら（1）、埼芸（4）、土の会（1）、世仁下（1）、京浜（3）、石るつ（2）、展望（5）、青年劇場（3）、やまなみ（4）、静芸（4）、からっかぜ（6）、演集（1）、岡崎（2）、四日市（2）、すがお（1）、はぐるま（7）、レオ（1）、火の鳥（2）、土くれ（4）、個人（1）計七十三名。

外に事務局（4）、講師（8）、総参加者数八十五名。通しの二泊三日の参加費は一万五千元であった。いうまでもなく会場は大宮市、国鉄・八重垣荘。

第一日 2月11日（祝）午後2時20分開校
あいさつ こばやしひろし

講演「新劇界の現状」 野村 喬 90分

「私の観劇」 中本信幸

パネルディスカッション

「今日の集団づくり」

パネラー 福島明夫（青年劇場）小島政

男（展望）中沢研郎（京浜）中野健

（劇団支木）深沢大助（からっかぜ）

司会 こばやしひろし

午後10時から交流会

第二日 2月12日（土）午前9時より

パネルディスカッション続行

講演「音響効果のはなし」 田村 恵 90分

分科会 午後一時より

演出（ふじたあさや）演技（田口精一）

美術（園良昭）創作（萩坂桃彦）

午後10時より交流会

第三日 2月13日（日）午前9時より

分科会続き

講演「無題」 滝沢 修 120分

閉校 午後2時

冒頭の開校の挨拶の中で、こばやし事務局長から、全り演の役員構成、議長団の発表があった。黒沢議長を継ぐ個人の議長の出は東・西審議をかさねたが頗る困難で、新劇人

会議の構成を見做って複数の議長になったというものであった。東会議は、後藤陽吉、中沢研郎、丸子礼二、こばやしひろし、西会議は、仲武司、藤沢薫、土屋清、猿渡公一。事務局長をこばやし、事務局次長藤沢。別に東・西各会議に事務局次長をおき、東は城谷護（京浜）、西は熊本一（劇団大阪）と決ったことも発表された。

2

話の順序として野村喬氏の話から入るわけであるが、誤らずその詳細を誌すには資料を欠くし、ばくの記憶も頗る怪しいものである。これは後のお三方の話も同様であって、どうした手筈でそうなったかはわからぬが、今回は一切録音どりはしていない。とくに滝沢さんからは、テープにとらないことを条件にされえした。

野村さんは大体こんな風に話をこぼれた。毎年、「テアトロ」の一月号で前年度の演劇界を概括する作業を通じての感想であるが、ここでのところでの年間の東京での演劇公演は七五〇から八〇〇を数えられそうである。今からざっと二十五年前、映画の黄金時代に、



劇大学
1983. 2.11-13 大宮

映画の製作本数は六五〇本位であったが現在では、それは加へども落ちこんで、一九八二年は五〇〇本にも満たないのであるから、それに比較すると演劇公演は異常な盛況ぶりと言えそうである。演劇上演都市で、東京は世界一ではないか。ニューヨークにも劇場はたくさんあるが、五割は休館している。

東京での、演劇評論家と言われる人たちの「観劇」も容易なことではない。小田島雄志氏は自称年間四〇〇本を言ってるらしいが、自分（野村）はせいぜいのところ、音楽関係の催物七〇位をいれて約二七〇位が精一杯。

これを外国の評論家に例をとると、八〇〜一四〇位で、用が足りるらしい。国際演劇評論家協会の、野村さんが日本でのただ一人の会員であるらしいことも、そこでわかった。

そのあたりから話は、こうした演劇公演の繁栄のルーツはどこにあったかに分析がすすみ、一九六〇年代の終り頃の、ミニシアター、アングラ劇の群生に話は及んだのだったと思う。このあたりが、なかなかにおもしろかった。文学座、俳優座、民芸の既成三大劇団が飽和状態に達し、そこからハミ出し、もしくは閉め出されたかたちの若い演劇人たちが脱出口を小劇場運動に求めた。地下の倉庫や喫茶店の二階が根城であった。大劇団が翻訳劇を上演し、小劇場運動の劇団がオリジナルを上演するという風潮になった。

問題は、このアングラ劇に対して新聞の、若い、文化部担当の記者たちが評価を誤ったことである。アングラ劇の実験劇、パフォーマンスを「前衛劇」と感ちがいた。

このあたりで唐十郎の話など出て来たのであるが、受け売りで良い加減な話になりそうなので、それは省くことにする。ただ、彼らの芝居を観る時には「知恵くらべ」だという比喻を、野村さんは使われたことを紹介して

おくにとどめる。つまり、彼らの技巧だけを見るとという観劇法である。

野村さんは「テアトロ」の編集長であると同時に、大学の教室で講義に立たれることは仄聞していたが、専攻が「近世浄瑠璃」とは初めて知った。そういう見地からでもあったのだらう、新劇と商業演劇の区分の問題、歌舞伎を単純に古典扱いにするなどは誤りであって、いまの歌舞伎は大体幕末時に完成されたものであり、現代から離れたものではない。「大体日本のように新劇と商業演劇の区分はほかの国にはない。イギリスでは同じ俳優がきょうはシェイクスピア、明日はピンターといったぐあいだ。一九六四年、テアトロの編集をひき受けたときに、ぼくは二〇年後の日本演劇の予測を立てた」、それは、新劇と旧劇の垣根はこわれるであらうし、こわすべきだというのが野村さんの見識のようである。いままでは民芸が三越という商業資本を拒否していない。「屋根の上のバイオリン弾き」の長期興業の成功は、一方で、質的に何をもちあわしているかは、踏み込んで考えてみるべきだ」とたしか言われた記憶がぼくにはある。話は、「演劇大学」の生徒である、リアリズム演劇研究生に向けて来た。

「リアリズム演劇会議」というのはいいと思う。もし、結成された六三年当時、「安保反対演劇会議」というような名前だったらどうであらうか。アジプロ演劇は、それはそれとして存在の意義はあるにしても、それはあくまでも演劇としての場合である。演劇以外のものが演劇の主人になることには賛成できない。皆さんの携っている地域での演劇、そこでは何ものからも、要求、拘束されない、芝居の持つオリジナルで見せてほしい。

芝居だからこそうち込む人間がいる。それがちからになる。そのちからの結果が、地域での、政治団体、市民団体と並んで、いい意味での変革のエネルギになるのだ。リアリズムを概念でとらえるのはあやまりである。

柔和だが、ややシニカルな野村さんの口許で言葉が閉じられたとき、時計をみたら、ピタリ、予定の時間であった。

3

中本信幸氏とはよく「プレヒトの会」の席でも顔を合せるし、劇場で隣り合せて坐ることもあったり、毎号「テアトロ」での健筆は愛読したりもしているので、うっかりぼくは

油断してしまった。「大学」での記録がまるでないのである。あの、ほのぼのとしたどこかトボけたような風貌を目にしたのしみがから聞き流してしまったようである。

中本さんは神奈川大学外国語学部の教授であり、ロシア・ソビエト演劇を専攻、訳書にトフストノーゴフの「演出の仕事」があり、チエホフの研究にも出色で、「チエホフのなかの日本」という好著もある。ふだんはそうした学究ぶりの片鱗も覗かせず、顔も言葉もおだやかなので、むしろこの人から何を掬うのかにとまどってしまう。それはこんどの「大学」にもあった。アンケートでも中本さんの話の印象は明瞭さを欠く。

閑話休題。ところで中本さんは何を話されたのだらう。

商業演劇と言われるものには作者も演出家も不在に近いので、いまは新劇畑からどんどん入りこんでいっている。それに伴って俳優もゆく。三越劇場のさいきんの演目が変わって来たのに気がつきませんか。水上勉や宮本研がやられるようになってきた。俳優たちも、たまらん、たまらんと言い乍らやっている。ギャラが魅力なんです。

観てまわったあれこれの芝居の話が次々と



出る。やっている本人だけがわかっていて、客席からはさっぱりハッキリしない芝居、俳優たちだけが自己陶酔にかかっている危険な芝居。

こういう状況があるということを見せるだけの芝居がある。それは、北村想の「寿歌」についてだったか、そこははつきりしなくなったが、中本氏は、そういうものはつまらぬという。人間がどう生きようとしているか見せなければ、意味がない。

またリアリズムの追求といっても、クソリアリズムの面白さでは、芝居以外のもの―た

とえば、スポーツやプロレスにはかなわないだらう。ロシア演劇というリアリズムの本家のように受けとめられているが、合理性から言えば、むしろイギリス人にその氣質が濃

い。ロシア人は愛のテーマについても遠まわしに表現する。ロシアの都市におけるアパングアルトは地方からの若者たちの演劇である。主として中本さんは、本来たのしかるべき芝居の本質について、軽妙に語ったようだった。ストリップを覗いた話も出れば、帰りたくなっても帰れないような芝居は良くないと皮肉る。演劇でなければたのしめないもの、それを見つめるのが観劇術であり、またつくるのが、これからの劇団の仕事であらうといった結論であった。

これでは、しかし最初におことわりしたようにまことに心許ない。ただ豊富に嗅ぎわける中本氏の嗅覚は、氏の中に瞭らかに蓄積されておき、それがチエホフの研究などで見事に開花するという秘密を宿しているということだ。

4

「パネルディスカッション」

パネラーによる問題提起というかたちの基調報告ではじまる。司会のこばやしさんは、なりふりかまわぬ素っ裸の報告を欲しがっている。

まず、劇団支木の中野健氏。創立二〇年を迎える劇団の歴史を手際よく語ってくれる。青森商業高校のOBで発足したサークル時代、東リ演加盟して劇団としての形態がととのい、十三年目で稽古場建設で第三の節目を迎えている。年令的にはトップでも四〇才未満で、平均年令は二十八才だという。組織の老化とは無縁のようである。

きしだみつおの一連の創作劇を上演、昨年は「一人の教師と十四人のエリートたち」で成果を上げ、さいきん上演した可能あらた作「空をとんだ鶏と銀色の松ボックリ」が意気軒高の舞台をつくった。とび抜けた指導者はなく、諸事相談づくでやっている。秋にはきしだみつおの「民次郎一揆」を、演出に劇団さつばろの飯田信之氏を招いての企画をしているが、それ以後の目途は立っていない。

つづいて、青年劇場の福島明夫氏。演劇大学ニュースNo.3のパネラー紹介に、「青年劇場をのつとるために入団して来た新進気鋭、はたしてのつとり可能か」と書かれ

た魅力的な青年である。

本意なくも制作部にまわされ、青年劇場路線逸脱と言われかねない大衆路線の「十五才の出発」「愛さずにはいられない」を制作した。泥まみれとでも言えそうな、青少年劇場全国公演の活動振りを紹介、出来上っていない本を制作部が懸命に売り込んでゆく話など満座の爆笑を呼ぶ。問題は、東京の都心及び周辺で、どう、青年劇場の固定観客をつくるかに当面していると苦渋の色を漂わす。観客増大はレパートリーだけにたよってはならぬというところに来た話を結んだ。

展望の小島政男氏は、集団創作「まひるのちようちん」を志に据えての「東京とは何だろう?」の解明を演劇実践の上で試みているこつこつした活動ぶりを訴えた。またさいきん劇団の居住地区でとりくみはじめた「阿佐谷ひろば」の話なども新しい試みとして披露された。

京浜協同劇団の中沢研郎氏は、十年前の、劇団内の文化大革命にも似た論争の傷痕をさらけ出し、洗われ洗われて、結局、何をしたいのか、ということだけが、集団の核であり、創造の芯なのだ力説する。故黒沢参吉の提唱した集団創作も「九〇二番船進水」で端

緒を得たが、その後の発展をかちとっていない。労働者の実態をいかに知らないかの繰返しである。しかし、芝居とは未知との遭遇のたのしさに尽きるのではないか。

さいごのからつかぜの深沢大助氏は、これもパネラー紹介欄によると「自らも挫折し、新しく入団した男」とある。からつかぜに期待できる焦点は、現在立直りつつあるかに見えるキイポイントは何かということである。昨秋からはじめた「演劇教室」が試行錯誤をかさねつつも、新しい成果を上げつつあるのもその一つであるが、大切なのはむしろ、その経過をとおしての入づくりにあるようだ。それが伺いしれる深沢氏の告白であった。

基調報告につづく討論は、問題点への対応というよりも、むしろ問題点の模索になるのは今回も同様であった。それは各劇団間にある格差と多様化のためである。甲が論じ乙が駁して問題の本質が逃げてゆく。

とは言っても収獲は皆無ではなかった。可成り歴然と「若者論」が抬頭し、若者自らの発言が目立ったことである。それはアンケートにもあった次のような興味深い発言にも見てとれる。

「若者論などは、パネラーの「一見キアリア組」の硬直した状況認識に、すでに現実で立ち枯れつつある姿を垣間見たようです。それぞれの状況認識には勿論客観的な誤解もあるでしょう、しかし、それを打ち出し乍ら互いに理解する姿勢こそ必要なのだと思います。パネラーの発言を聞きながら、キアリアがありそうだけれど本当に大丈夫かな、本当に若者をよびたいという気持ちがあって発言しておるのかなと疑問に思いました。」(作道信介・仙台小劇場)

つづいてパネラーの福島明夫氏が青年劇場の団内ニュースに寄せた感想も適切に思えるので、借用して、抜すいだがお目にかける。

「私流のまとめ方をするとすれば、二十年以上も運動を続けている人々が、若い世代に自分達の経験や運動の本質をいかに伝えるかというところでの苦汁というものが溢れていたところでしょうか。折角入って来た若い人達が、すぐに別なものに飛びついて集団を去って行ってしまいう問題、また今までやってきたやり方では若い人達がとらえきれないのではないかという問題は、単に組織の問題だけではなく観客層の問題でもあります。これに対し、若い世代

のミュージカルへの要求をいかして大きな

エネルギーが発揮された例が二集団から紹介されました。但し、これも歌や踊りのリズムへの参加の率の高さといわゆるリアリズム演劇の本の読みとりが反比例するのではないかという形で疑問符がついたのも事実です。また討論の中でも現代のとらえ方をめぐる認識の差のあることも報告され、現代の危機の質が若い世代にとらえられていないというような意見も出されました。しかし、それではいわゆる古い世代が現代をとらえているのか、という疑問も出され、勉強不足ということが全体共通の認識になったという感もします。そしてそこに演劇大学の開く意義の大きさがあられるのかもしれない。」

5

二日目の田村應氏(いまだ)の「音響効果の話」に、胸をわくわくさせて聞き入った効果マンも少からず居たにちがいない。或は、あの話をきいて、ひそかに、演技部から効果部に変ろうとさえ考えた人もあったのではなからうか。とそんなことさえ言ってみたくなる。

語りくちと表情、声そのものが大変魅力的

なので、字づらではつたえにくい。これはこの後の滝沢先生も同様であるが、さりとて、何とか「大学」に参加できなかった読者に伝えられぬものだろうかとなやむわけである。「軽度のアル中です」と開口一番、ドツと笑わせて、「音は一秒狂うとトチリです」とビタリとそれをおさえて見せる。「成功した音を、深夜ひとりできいていてニンマリする。お化みたいで」で、またドツとほぐすといったぐあいである。

田村さんが三十年一或はもつとであろうか一芝居の音とつきあって来た秘話、秘話の連続である。田中千禾夫の「マリヤの首」で、田中さんから「雪の音あるかい」と求められた話や、雪の音となれば、歌舞伎で使う「雪大鼓」の素晴らしい話は及び、仲代達也の主演する「四谷怪談」で「指の折れる音」(骨折者)を草の葉茎で考え出した話もあれば、浪の音を追って埠頭に坐り込んで待っている話、折角つかまえたと思ったら、そこへ釣人に話しかけられて、その声が入ってダメになった話、犬の遠吠えも、今の都会の、そこらの犬は役にたたず、これはもう、人間しかない等々。話は視覚効果、聴覚効果、嗅覚効



果の実例をあげて興味はつきない。足りない程の時間の終りに、平手打ちの擬音の、秘訣の公開があった。

なにか聞きたいことがありましたら誘いに、からっかぜの布施祐一郎君が、波の音、自動車の音を入れるのに、どうしてもうまくゆかぬ相談を持ちこんだところ、田村さんは「大へん高度な質問です」と質問者をよるこばせ、「機械はバカなのです」「バカだから何でも受け入れてしまいます」と明晰な解答。「音は、悩んで下さい、作ってみて下さい、必ず何かが出る、自分のものとして作る

ことです。」
芝居の音は、作られた、ウソの音ほど真実をつたえるものだということを言われたわけである。

日程では田村さんの話のあと、昼食となり、午後から分科会になった。ほくも「創作劇」の部屋に集もりになったので、各分科会の模様は、お願いしたそれぞれの報告でご推察ねがうことになる。分科会は第三日目の午前十時までであった。

滝沢さんは、すでに、そのあとの講演のために見えていて「演技分科会の終り頃に、静かに入ってこられたので校長先生を迎えたような喜びと緊張を感じた」と汲田さんの文章にも読める。

滝沢さんの話をここに克明に再録することは不可能だし、またその必要もない。たとえば円朝の話を、外題や中身を文字に写してみても始まらぬと一緒に、滝沢修という名優の丸ごとの魅力は、直接、その姿と声とにふれたもののみが味えたことなのである。それにテープへの収録は辞退された。またそれを必

要としない話の内容でもあった。

日本における現在の文化に対する国家予算（それは〇・〇八以下であるが）の貧しさ、ソ連、中国では、劇団が国家の援助によって立派な劇場を持っているなどのちがいが、また滝沢さんが出演を断られた映画の話、戦前囚えられて監房で「牢名主」におさまり、同様に偉い大学の学者先生が居たり、やくざの顔役がいたりして、そうした人たちの虚々の実々のやりとりを、いきいきとした対話の再現で、語られるおもしろさは、聞き入りながら息をのむ。ひそやかだが、一言一言、しっかりとしかも明瞭に伝わってくる言葉の魅力は無類である。

その声、その表情は、あの、「どん底」のルカ、あの「火山灰地」の雨宮駿、あの「夜明け前」の青山半蔵を、ほとくの記憶のなかに呼び起す。

二時間にわたって、たっぷりと、滝沢修の「ひとり芝居」を満喫した幸福感が場内を蔽うのである。

しかしそれは単なる芸談とは別であった。民衆のしあわせに根ざした真実の追求、そのために蒙った受難の歴史、そこをくぐり抜けた滝沢さんのきょうの姿は、それは人間とし

ほどの趣向であった。

7



てたかといれたひとつのちからの結晶である。それはゆたかで、そしてふかい。たとえばこんなかたちで出てくる。

「こどもにね、このチヨコレートおいしいよとすすめても、どうしてもたべないの。チヨコレートの包装の紙を剥してみるとネ、そこにはハリアリズムVと書いてあるの」

それはハリアリズムへの敵視などではなく、ハリアリズムをいかにゆたかに理解し、そして育くむかのための比喩であった。

ぼくたちは、その話のオチの寸前まで、滝沢さん父娘の話としてきいてしまう。心憎い

第七回「演劇大学」のイベントに合せて黒沢参吉劇作集が四十四冊だけ、印刷所秋巧社から大宮の八重垣荘に届いたことも、ぼくには忘れ難いこととなった。

前回には、この劇作集の作者が、元気に、三日間、ぼくらと行動を共にしていたのだ。「大学」をどうするか、どうなるかは黒沢議長もたえず心を須いていたことであった。その彼が、戯曲集に身を托して、「演劇大学」を見とどけに来たのだ。そんな感傷をぼくはさいごに洩らした。

第七回を終えてみて、「演劇大学」の定着をのぞむ声が、それこそ定着した感じである。それはまた、毎度ながら、あの馴染になった八重垣荘の建物、玄関先でニコリ笑って迎える埼玉の塚越さんの顔、それとこぼれやしさをトップにしたはぐるまの事務局のメンバーの顔たちがダブってくる定着度でもある。迷わず、いっそう充実したカリキュラムで、一来年の「演劇大学」をかちとりたいたいものだとつくづく思う。

■劇団未来創立20周年記念誌

「いの地に創る青春の歌」

〈内容〉 20年の歩み

- 第1期（わたしたちの観客の発見）
- 第2期（上演作品の間口ひろがる）
- 第3期（地域移動公演のとりやめ）
- 第4期（演技創造の向上をめざす）

座談会 「大阪の動くものの演劇」

尾崎信、熊本一、中谷稔、長谷川伸二の各氏と寺下保、森本景文、和田澄子祝辞とメッセージ

小松徹、嶋田邦雄、仲武司、藤沢薫氏ほか

演技者生活35年を迎えた波田久夫氏劇団未来を創る顔（撮影鈴木義之氏）

希望者には送料共一五〇〇円でお頒けします。申込は左記へ

大阪市西区江之子島一七七一

新うづばビル 劇団未来

電話〇六―四四七―三〇一

ふじた演出の二日間

— 演出分科会に参加して —

梅津幸三

(劇団やまなみ)

二月一、二、三、四と三日間の演劇大学。その二日目の午後から、ふじたあさやさんを迎えて演出分科会が開かれた。参加予定者が男性ばかりだったようで、はじめは演技分科会に参加する筈だった女性三人が急遽かり出されてきた。やまなみから同行した土井マチ子などは「始めて女性として認められて、ホクホク……」などといふ乍ら困惑の態。

小生もはじめは演出者としての立場からこの分科会に参加したが、役者として参加することになってしまつて少々途惑つたのだが、ふじたさんのやさしい眼と言葉にうながされると、もはやどうすることもできず「まな板の上の鯉」ということになってしまったのである。

テキストは、「演劇会議」50号所載のヴェンゼル作「家族」(小沢健昭氏訳)。演劇大

学出席三日前に「良く読んでくること」というニュースが届いて三度程読みかえた。

一つの工場の中で管理職らしい父親と現場の労働者である娘のいる一つの家庭を描いているのだが、その家庭生活の中に労働の現場の様子が浮び上ってくる。自分の毎日の仕事や生活の中で感じるつまづきやいらだたしさ、そんな自分の心の奥底でゆり動かされる何かがある。昔観たイタリヤ映画「自転車泥棒」、そのとき自分を襲った哀しさと怒りをダブらせている自分に気がついたたのである。

いさかい合い乍らも家族の暖かさを求める庶民の生活、求めても得られないいらだちの裏側を音を立て、動いてゆく社会の流れ、そんなことを感じて、これは何だろうと考えているうちに演劇大学の日が来てしまったのである。

さて、アンドレ(やまなみ・土井)、ルシアン(梅津)、マリアンヌ(演集・内田)、シャンタル(四日市・坂下)、クリスチャン(展望・小島)の配役がきまると、通しての読み合わせ。「ウン、判るネ」とふじたさん。「じゃ、どこか場をきめてやろう」で第七場を選んで再び読み合せ。「じゃ立ちましようか。」とふじたさんはいとも簡単におっしゃる。これがやまなみでのけいこなら、当然本を持ったまゝでということになるのだが、演劇大学ともなれば、何となく、持っていては具合が悪いような気持ちになって、みんな本を持ってずに動き出した。どうにかこうにか筋道を辿って終りまで来た。「全然判らなくなつたネ」。向う側に居並ぶ面々はドツと吹き出す。「この野郎ら、他人をダシにして笑いやがつて」。

内田さともは困つたような顔をしながらも何となく心得た感じ、坂下和代はフテくされ、土井マチ子はオロオロ、小生は誰に頼まれたわけでもないのに、途中で停めてはならじと無言の進行係みたい。

チクチクと針をさしながら何度かの繰り返し。役者の中にだんだん行動線が見えてくる

と小道具が増えてくる。(ふじたさんが云わ

自分が思うがまゝに時間があると思ひ、なりゆきまかせに時はどんどん過ぎてゆく。これではどうにもならないと気がついたときには、もうすでにおそし、兎も角格好をつけるというのが現状である。一日たかだか二時間足らずのけいこ、四〇日とっても八〇時間、一日二四時間とすれば、たつたの、三日と半日しかないということなのだ。それを埋めるのはそれに数十倍する役者の個人的な作業がなければ芝居は創り出されないということなのだ。

「ふじたさんは三日で芝居を創る」という話を聞いたが、この役者の自覚と努力があつて、ふじたさんの「三日で芝居を……」の本当の意味が生きてくるのだろう。

演出者と役者との、詰められた時間の中での格闘の意味の重さを痛感させられた二日間であつた。

◇

◇

特集・第七回「演劇大学」

演劇分科会に参加して

汲田正子

(劇団はぐるま)

自分の個人的な作業で貯えたものを、相手役との交流や演出者の前で検証する、つまり役者のもう一つの側面、統一的作業の場ではないのか。ふじたさんの詰めは、このことを私たちに要求しているように思えた。

私たち(やまなみ)のけいこには、この「限られた時間」という自覚がない。いつまでも

演劇大学には、例年のように演出分科会に参加するつもりでした。「三人姉妹」らしい、ふじた先生の明快で端正(という形容はへんですが、他に言葉が見当たらないのです)な講義は、まるで手品の種明しのように鮮やかで楽しいものでした。ゴチャゴチャした私の頭

の中が、整理棚のようにかたづいて、何とな

く自分の頭がよくなったかのように錯覚するという、危険なおマケもついていました。けれど、今年は大学に申しこむ少し前、劇団名芸の栗木さんからお電話がありました。「三月五日の中部ブロック交流会の翌朝、体操の講師を」と。

実をいうと私は、十何年前に、短い期間

ですが、劇団民芸の体操教室の生徒にしていたことがあり、おこがましくも、自分なりの解釈で、仲間や高校生の方に伝えてきたのです。でも、近頃はいささか怠けているので、自信がありません。考えたあげく、泥ナワながら勉強して、演技の分科会に申しこむことにしたのです。

何日かたって、演技分科会の講師田口精一先生からの熱いお便りが、事務局はぐるまに着きました。

「……中国の演劇教育の徹底したあり方に衝動をうけられた滝沢修先生が、自ら陣頭に立ってレッスンしておられる民芸の方法を伝えたい……」

という趣旨でした。

十何年かふいに飛んで消え、チリ一つない民芸のレッスン場が浮んで来ました。野口体操で有名な野口三千三先生（柏樹社から「野口体操・からだに貞く」という本をだしておられます）のレッスンでした。

その頃でさえ決して若くはなく、学校での体育実技の成績は、2に近い3しかとったことのない私が、これから体操を始める不安をオズオズ呟くと

「何才から始めても遅すぎることはない。体操がダメという人ほど、他人に伝える時にはプラスになる。苦勞した分だけ、伝えられる中味が多いから」

と勵まして下さった野口先生のお顔。たった一人の生徒のために、わざわざ助手の方と二人で、半日の特別レッスンをして下さった芸大のガランとした体育館のことなど——それから、それへと浮んでくるのです。「貴女自身の体操を創りなさい」とおっしゃった暖い声のひびきまでも。

田口先生のお便りは、更に続きます。

「……本格的な訓練などは知らず、小器用でよしとしている風潮があり、基礎訓練は敬遠されるかもしれませんが、やってみて欠かせないものと痛感しました。今回のゼミは、演技の出发点を身体を使って知っていたかどうかと思っています……」

基礎訓練——業余劇団の私たちに、一番欠けている部分です。稽古時間が少ないこと、一日の仕事で疲れていることなどを理由にして、まっ先に切り捨てがちな基礎訓練。四月に私たちが上演する「十一びきのネコ」の踊りが、まったくそのとおりなのです。はぐるまではいま四人の劇団員（モダン二人、ジャズ二人）

が指導やふりつけを担当していますが、それぞれにパーレッションや、基礎ステップの前のストレッチ体操を人念にやろうとします。それが、必要最少限の手順とわかっていても、演出の私はジリジリと心が焦ります。ついに、舞臺と口をそろえて「早くふりつけに入って、もう時間がないんだから」と叫んでしまうのです。演技者としての基礎訓練にいたっては……言うまでもありません。

田口先生の熱いお便りに触発されてか、若い劇団員の何人かが「参加したい」と言いだしました。職場や稽古のつどうで多くは実現しませんが、ダンス担当の南いくみを含めて、四人が演技の分科会に参加することになりました。これは、はぐるまにとっても、きっと大きなプラスになる事だと思います。

「演劇大学も今年で七年、他の分科会はふじたあさやさん、園良昭さん、萩坂編集長などの講師だけでなく、生徒の方も固定してきました。ところが演技の分科会だけは、毎年講師も変り、生徒も若い人中心に流動的で、まあ短大というべきかもしれません」

講師紹介のはじめに、後藤陽吉さんがユーモラスにおっしゃいました。確かに、例年のことながら演技分科会は若い人が多いようで

す。今年は幸せなことに、仙台小劇場の鈴木京子さん（ケイコサン／と呼んだ時に、ふわりと返ってくるおらかな微笑は、まさにアネゴというか……貴録です／と、原陽子さん（知る人ぞ知る萩坂編集長夫人です。十六年の演劇歴で十六年の休眠、目がさめるのに時間がかかるでしょうか……）という萩坂さんのお言葉ですが、何の何の、レッスン中のナイーブで柔軟な反応には、いろいろと教えられることも多かったのです）という先輩もいて下さったので、私も怯んだりせずに参加することができました。

さて、お待ちかね田口先生の講義です。四時間の第一講義「肉体を知る。体操。呼吸と発声」

まず、演劇人としての「計画的な身体づくり」です。訓練により「退化を遅らす」「素材に手入れしていく」こと。

淡い性格俳優として定評のある田口先生の第一声に、ドキリとしました。若い人たちがちがって、「退化」という言葉が身近に思われる年令のせいかもしれません。基礎訓練が、声や肉体を伸ばしふくらませること以上に、衰えを防ぐためだとすれば——私たちは、全員が、今日、いまからはじめなければならな

いのです。

更に、それは「基本をくり返しくり返し続ける」ことに尽きると言われました。簡単にみえて、決して簡単ではないことを、充分知っていられる上での、「くり返し続ける」という言葉の重味が、しっかりと伝わってきました。

発声についてのお話も、興味ぶかいものでした。「呼吸」「共鳴体」「声帯や骨との関わり」、そして胸式呼吸とか腹式呼吸というより、「横隔膜の存在の重要さ」など、常識をくつがえすユニークな視点がつきつきに提示されました。

いよいよ演技実習です。体操着に素足の私たちは、いささか寒くなってきたこともあり、大喜びで立ちあがりしました。

肉体の緊張と弛緩——からだの解放（一緒に行った若い人たちは、基本的なこのあたりが実に印象的だったと言います）を基礎にした民芸体操の実習です。

まっすぐに立つ——地球の中心と足の裏を結んだ延長線上に立つのです。十何年前はじめて「地球の中心」という言葉をきいた時の鮮烈な驚きが、はつきりと思いだされます。

このように壮大な感覚で体操をとらえたことがなかったのです。「自分自身のからだの動きを手がかりにして、人間とは何かを探究する営みを体操という」との野口先生の考え方が、ひしひしと伝わってきます。この数年、忘れかけていた大切なことでした。

余分な力をぬいて、まっすぐに立つことは、舞臺の上の俳優の基本ともいえます。足の裏を柔らかく床となじませ、まっすぐなままだ音もなく飛ぶ両足とびにはじまり、幾つかの実技を学びました。常識にとらわれず、実感を中心にすえ、決してムリをせず、身体そのままの重さにまかせて、ゆすぶったり、ぶら下げたり、ふくらませたりする——どの一つをとっても、正しくマスターするにはかなりの時間がかかりました。私たちが誤った方法に迷いこまないように、一つ一つ実に丁寧な講義がありました。若い人たちの中には、「もっともっと動きたい」という欲求はあったようですが、中味の重さに満足して、皆夢中でノートをとりました。

民芸では、週一回のレッスンを二年間続けて、一つのカリキュラムを終るとのこと。人々を識る——観察と表現」の第二講義と合せて、たった八時間の実習です。限られた時間

内で少しでも多くのことをと、田口先生はたいへんな御苦労だったと思います。

第三講議「扮装とメークと思考」

最後のメークは時間ぎれで、二十分ほどの駆け足の講義になりましたが、実に大きな収穫でした。従来の、はじめにこつてり地ぬりをぬりこむ方法とは、まるでちがっていたのです。大まかな陰影をつけてから、指先でたたきこむように地ぬりをし、軽くバブをしてから二重三重に陰影をつける——劇団からつかぜの若い女優さんが、見るまに老婆になりました。小劇場公演での老人のメークは、どうしても嘘くさく不自然になりがちで、毎回あれやこれやと四苦八苦してきました。ようやく出口が見つかったような気がしたのですが、実習するだけの時間がなく残念でした。機会があればもっと時間をかけて、もう一度勉強できたらと思います。

メークに入る少し前に、ゼミナル最後の講演をして下さる滝沢修先生が、静かに入って来られました。第一、第二講議の中で、実にしばしば滝沢先生の日常訓練についてのお話を聞いていましたので、何となく校長先生

でもいらしたような喜びと緊張が感じられました。

最後の講演がまたすばらしく、二時間があっという間にすぎました。ゼミナル第一日めから「リアリズム演劇の今日性……」といった、根本的なところで私たちが今やっていることの自信までゆらぎそうな、やや暗い雰囲気があったのですが、そうしたものを見事に吹き飛ばすような、力強い自信に満ちた講演でした。田口先生の講義と合せて、本当に貴重な勉強をしたと思います。

特集・第七回「演劇大学」

考えるほど考えたわけではないけれど ——舞台美術分科会より——

1 はじめに

舞台美術の分科会は例年のように園良昭氏を講師に迎え、二年間の各集団の成果と境界修次作「迷いみち」をテキストに討論を重ねた。二年前に演出分科会との合流を試みたが

中部ブロック交流会での体操は、分科会のクラスメイト岡崎演集の柴田くんの応援もあり、不十分ながら楽しく終ることができた。ともあれ、思いがけず演技の分科会に入って、貴重な勉強をするきっかけを作った。いただいたことを、感謝しています。

佐藤 張 二

(京浜協同劇団)

今回はテキストが決らず、苦しまぎれに「迷いみち」を選び、作者にも討論に参加してもらった。

舞台美術のはなしをことばで語ることは非常にむずかしい。それは私に文才がないからでもあるが、うらかたの多くの会話は「感じ」

の問題であつたり、アレ、コレの代名詞で意味をつなぎあっているからである。そんな討論のなから、考えるほど考えたわけではないけれど、考えていることを記してみよう。

2 なぜ照明器具がみえるのか

園さんは北京での舞台美術展の話から、近代劇の発生とプロセニオンとさまざまな様式スタイルについて話した。そして、いつの頃からかどんなようを使わない舞台、照明器具が丸みえの舞台が多くなってきた。いつの頃からか……なぜだろう、という。そう問われると事柄はそう簡単にはすまない。

私の体験でいうと造船所を舞台にした「九〇二番船、進水」でどんなようも袖幕も一文字もすべて布製のものは撤去したことがある。それは布のもつマチュエルが「鉄」となじまないという理由からであつたが、見切れにはずいぶん苦労した。又「金冠のイエス」の場合、袖幕の黒を嫌い、全部ドンゴロスの袖幕に吊り替えた。

考えるほど考えたわけではないけれど、その都度の舞台のトーン(ドラマの意味と色調)を考えてどんなようなしとか、袖なし又は吊

り替えをやっているつもりなのだが、いつの頃からか……なぜだろう、と問われると困ってしまう。

今度の「グスコブドリ」の伝記」ではどんなようは使わないが、袖幕と一文字は黒でキツチリとし、照明器具は見せないつもりでいた。ところがスライドの映写機の吊りが一文字よりさがるためこれは断念した。ここでは「かくす」ことが機能的でないということになる。照明器具をなぜ見せるのか、という問いは、なぜかくすのか、かくしたのかを考えるとと同じ程、重要な問題である。かくすから見えないのであって、かくさなければ、あるものは見える道理である。

◇ ◇

プロセニアムの発見は舞台美術の領域を大きく広げた。背景としての美術は立体として俳優とかかわるようになり、その美意識は劇場機構を発達させてきた。ところが、いつの頃からか……プロセニアムからの「脱出」もしくはプロセニアムの「破壊」を考えるようになった。それはいい考えであつた。そのように実行すれば、の話としてである。脱出したものは脱出すればいいし、破壊したいものは破壊すればよかった。そうした試みは多

くやられている。しかし、問題なのは金と力と知恵を余りもちあわせていない多くの劇団は、プロセニアムとどんなようと一文字と袖幕が完備(?)した劇場で「苦汁」している……

3 小劇場で……

毎年五月に多摩川の草の上で安達元彦さんとたちと野外の音楽会をひらいているがここ一年程の内に音楽家の仕事に参画する機会があった。

鈴木たか子さんのピアノコンサート(82年6月劇団稽古場)、笠木透さんを中津川から招いて安達元彦、岡田京子さんたちとの「ただうたいたいためだけにうたうのではない」という音楽会、二夜連続(82年8月バモス青芸館・池袋)、82年夏のゼミナル(青森)で中野孝恵さんおやこの三味線は魅力的だった、呼ぼうというわけで、中野さんおやこ、横山茂、星野正吉さんたちとの古市場音楽会(83年1月劇団稽古場)

それは百名前後の小劇場での試みであり、私にとってはプロセニアムについて考える絶好の機会でもあった。劇場史という、人々があつまるところに広場が生まれ、広場が芸能

を育てていく。広場は人々の必要最少限度の「舞台」であったし、広場に人々は胸のトキメキを感じながらあつまってくるに違いないのだ。

いま、広場について考えることは、舞台の原型——舞台の過去と未来をつなぐ糸をたぐり作業のようだ。舞台と観客との合意の場としての広場。その関係を追求することがいまや舞台装置の主なそして基本的な任務である。そこでは小劇場という限られた条件のなかで、どのような劇場（広場）を創るのか、という劇場の設計から問題が発する。

鈴木たか子さんのピアノコンサートの場合には劇団の諸氏が早朝多摩川の上流まで車をとばし、野の花をつんできてピアノの傍にそっと飾ったのだった。笠木透さんを迎えた時は、地下のコンクリートのカベは笠木透のうたにそぐわないとヨシズを用意し、カボチャやなにやらを舞台にころがしておいた。二夜連続のフィナーレで、笠木さんはそのカボチャを岡田京子さんにはって渡した。中野さんおやこを迎えた劇団稽古場には、近隣のお年寄りもつめかけ、おひねりがとんだ。それらは感動的な事件であった。

そこにはもはやプロセニアムは存在しない。

プロセニアムはあることはあるが、人々の意識からは完全に消えている。プロセニアムの問題は演劇のスタイルや様式の問題ではない。少なくともスタイルや様式の問題としてとらえるより、舞台と観客との関係として考えていくことの方がいまの私には大事なことに思える。

4 85演劇大学への宿題

「迷いみち」のプランニングについて報告をした。日常と過去を舞台上の造型として、下と上との関係で考えてみる。日常と過去との関係が乏しい。かなり恣意的であると思いつつ、日常の人物が仮面をつけて過去（舞台上）に登場するというのはどうか、という論旨である。

これには、おもしろさはあるにしても、無理であるとの異論続出。作者とも、だれとも討論せず、印刷についての知識もなく、つくった装置プランはどういうものか、という「悪い典型」として記念すべきものであった。構成舞台風なもの、三場面を飾ったもの、シャマクを使ったもの、写真風に下と上を交又させたもの、参加者それぞれの個性があっ

てこの討論はたのしいものだった。

同席した作者境野修次さんからは、印刷について、問題を同時にバラバラに提示していく、などの話をきいて、なるほどと思う。この討論はながくより、作者に同席してもらったの討論をやるということ、85年の演劇大学ではこばやしひろし作「アメリカ人になれなかった日本人と日本人になれなかったアメリカ人」と黒沢参吉作「金魚修羅記」のプランをもちろろうということになったことで想像していただきたい。（黒さんはもう同席することができないのだが、劇作集が刊行されたし、代表作の一つである金魚修羅記は読んでほしい戯曲です。こばやしさんには大変でしょうがよろしく願います。「アメリカ人……」は近い内に演劇会誌に掲載されるとききましたが、編集長よろしく願います。）

5 附記

(1) 編集長よりの趣旨では美術の分科会を続けてきた成果についてかくようにとのことでしたが、東り演ゼミナールの交流からいえばもう十数年になるでしょう。

講師 國 良昭氏
参加者 小松慶子（仙小）樋口千鶴子（展望）加納豊美（はぐるま）高木永司（支木）布施佑一郎（からっかぜ）手塚孝夫（石るつ）一戸保孝（レオ）伊藤美江（すがお）佐藤張二（京英）

特集・第七回「演劇大学」

七つの鍋の火加減

——創作劇分科会のこと——

林 陽子
(劇団展望)

(3) この原稿の切直前に石るつの境野修次さんから、こんどの公演の装飾をやれという電話があった。これはうれしいことです。宮沢賢治風というならば、「これからほんとうの勉強がはじまるのだ。」

記録

1. 北京の舞台美術展
近代劇以降の様式について
演劇とはなにか
2. 境野修次作「迷いみち」
3. 討論

○ 集まった作品と顔をあげると、まず「監房長」（滝沢修氏の講演で覚えたことば、早くいえば匿名主）は萩坂桃彦さん。

「風の暦」／からっかぜ・深沢大助さん「迷いみち」／石るつ・境野修次さん、「ネームリング」／世仁下乃一座・岡安伸治さん「アメリカ人になれなかった日本人と日本人になれなかったアメリカ人」／はぐるま・三島幸司さん、お忙しいなかをさいて顔を出されたこばやしひろしさん、「回収不能の戦記」

／土の会・矢野喬さん、「はじめてのコンサート」／弘演・藤村歩さん、京浜・城谷護さん、展望からは集団創作・ま昼のちようちゃんシリーズNo.39の「姥捨」／大沢郁夫と林陽子。

○ 分科会のはべー〇時間。均等に話をすすめても一作あたりわずか一時間20分だ。

○ それぞれの作品について、問題提起とつか基調報告というか最初に「えーと……」



と口をきる人を大宮の八重垣荘に集まる何日も前から指名されていたので、各々のやり方で、場面分析のメモを読みあげるやら、こういう戯曲には弱いんですがとあたりさわりの感想で逃げるやら、どうも舞台を先に観ちゃったのが不幸のはじまりだよとぶちあげるやら……。

○ どの作品にも参加メンバー10名分の……あ、もうお一人、一作につき原稿用紙何枚づつにもわたる書簡での参加、名芸・栗木英章さん、計11名分の読みとりがあった。

料理でいえば、それぞれがお味見のあと、塩や砂糖やしょう油、コショウやカレー粉、ポン酢にきざみパセリをもってかけより、ふりかけるや泡立て器でかきまぜるやら、オーブンの火を弱めている横でねじり鉢巻に漬わちわでバタバタとおぐ奴もおるといったあんなばいなのだ。荻坂料理主任は適当な火加減で作品1編をおろしてくださる。どうやら時間内に七作品の検討をすませた。

○ それぞれの戯曲について出た発言や批評を記録しようと思いたがとて紙数が足りない。かえってどの作品にも作者にも非礼を

おかしそうだ。分科会から日が経っているのを強味に、自己流のまとめを許していただいていくつかの共通問題点をあげてみると――。

○ 「回収不能の戦記」「はじめてのコンサート」では、書き手からの作品の自立、作品からの書き手の自立という、あたりまえすぎて底の深い問題が出た。

何十年にもわたる教育者としての実践活動、そして土の会をひきいての二十七年、戦後民主主義運動の挫折の歴史を舞台にと、わぁ大変……なテーマに立ちむかったよしだはじめさん。はじめての戯曲を「はじめてのコンサート」という原作を得ての脚色の形でまとめた藤村歩さん。そして私達にも、商品としての戯曲を製造しようなどと考えないために、自分の書きたい思いに足をとられて、その「思い」とやらをだれに、どう手わたすかの具体的な努力に欠けるところがないだろうか。藤村さんのすずやかなまなざしには「題材」と「それを見つめる自分」を「煮つめる自分」についての知恵を予感させた。

○ 「アメリカ人に……」をめぐる発言では、作品の自立をもう一歩進めた、読み手の

なるこの過程は、題材やテーマを書き手の秘密工場の中に閉じこめたり専有物のように扱わず、集団の一人々々が自分のことばとして観客とわたりあうための窮余の試みなのだが……整理が足りないロマンがないとの指摘みな「増殖」の及んでいる射程にみあう文体をもつに至っていないのだと考えさせられた。

○ 文体・構造・そのなかみについて話題になったことは――

現代を重層的にとらえようという試みを反映して戯曲のかたちも重層構造になったり劇中劇を挿入したりしている。だがその手法を選びとった意味が書き手の意図どおりに届いてこない。言いかえると方法意識のあいまいさがテーマをばやけさせている、いやその逆テーマのあいまいが……であった。

「迷いみち」はどこで何が迷っちゃったのか、零細印刷所と企業が派遣しているエリート社員教育のための特訓合宿の二つに通底するものはなにか？

「ネームリング」の切りくちははたして何を、どう切れているのだ？ 造船の労働現場を、船底のロンジやフレイムと呼ばれる仕切

り鉄板の間でねじまがった姿勢で時間に追われた盲導接をする下請工の視点からみていくことはいったい何を先取りしているのか？ 「姥捨」では住民たちのプチブル的エゴイズムが淋しいお年寄りへの思いやりという衣をまとってお婆ちゃんをはき出す。このお婆ちゃんは住民たちにとって何なのだろう？ どれも結論はひきださないところに分科会のミソがある。

矢野さんの「どんな形式の戯曲だって人間をどう表現しているかなんだ。人間の表現にばかり人間は心を動かされ、そしてはじめてぼくらの認識が変わるのだ。ただ知識を伝達するだけだったならば戯曲なんか書かない」（このとおりに言われたわけじゃなく、私のちょっと強引な解釈です）。

三島さんは「ぼくア理屈じゃなくって現場人間。うまく言えないんだ、身体が手が眼が考えちゃう感じちゃう……」（あ、これももちろんことばどおりじゃありませんよ、たしか交流会でのアルコール入り発言です）等々。どの発言も刺激剤、触媒剤になる。

○ 「風の唇」で話題になったのは地域に根ざす集団が郷土の歴史に光をあて、新しい

中で戯曲が「増殖していく」とでもいえる展開がおもしろかった。

二世三世にとうけつがれてゆく血の問題、親子の問題を日本という狭い枠をとっぱらって見すえてみたい、それらがこわれかけている現代だからこそ新しい強い光をあてるべきだと、こばやしさんの一言。実際に岐阜で起こった事件に刺激されて一気に書きあげた作品とのことだった。こばやし作品と長いおつきあいの荻坂さんにはすんなりと、そのテーマにまぎれもない岐阜の体臭も加えて納得されるようだった。

ところがこの戯曲の報告者・矢野さんは、血、民族の問題から先の視点、素の存在としての人間への問いかけへと踏みだした試みと読みとらうとしていた。

「増殖」とは一方が他方にとってかわるのではなく双方生かしながら相乗してメッセージを送ってくる関係にちがいない。この作品は作者の設定した人口からどの出口にぬけるのか、まだ興味深いトンネルの中にある。

この「増殖作用」を展望の集団創作ではささやかながら作業として定着させようと自分たちに企んだ。一人の書きだしっぺから上演までには全員が書きだしっぺのような具合に

民衆像をさぐっていく作業のうえで必ずつきあたる問題だった。当時の関係者が生存しておられ、触れてほしくないと取材を拒否されるような体験である。現に進行中の社会的事件をドラマにする場合にも形を変えて起ることで、題材やテーマを大切に扱おうとすればするほどのしかかってくる問題ともいえる。

深沢大助さんは日本労働争議史上の三大争議の一つ、日本楽器争議の記録におしつぶされることなく、そこに息づいていた青春群像と劇団からつかぜの現メンバーを重ねあわせてとらえるという思いきったやり方で、この題材を同時代性の熱湯にドボンとはおりこもうとした。いわゆる戯曲としての密度、台詞のイメージ喚起力やダイナミズム不足など、あげつらうのは簡単だ。しかし戯曲もまた地域に根をおろし地域から養分を吸いあげていくのではないだろうか。

○ 創作劇を上演していくときの集団の課題は？ という城谷護さんの問いかけのひろがりには創作分科会の枠をこえた討論につながっている。峻厳な態度で原稿用紙に赤鉛筆をはしらせることよりも、舞台成果の報告や上演へのアドバイスに話が及ぶのは、どの作品

もそれぞれの集団という「肉体」をもってやるからかもしれない。この特質を生かした創作のありようが、いま、手さぐり足さぐりながら模索されている。

○ このメモ、読みかえすと「……でなく」「……がない」と否定形がめだつのはあきれてしまう。しかしこの否定形には未来がないことは……ない。分科会の室内は煙草のけむりも絶えなかったけれど、笑い声も絶えなかったんですもの。

○ おわりに。分科会は「黒沢参吉劇作集」巻末の回想的解説を執筆という仕事を了えられた萩坂さんに、黒沢戯曲についてのもう一言一言の切りこみを予定していたのだが、時間切れになってしまった。

もっともそれは創作分科会の方に閉じこめるべきではない。「演劇会議」への執筆をお願いして、この駆け足メモ、ひと休みにします。

◇ ◇

劇団通信

劇団阿波っ子

第一回本公演、樋口一葉・作、久保田万太郎脚色、斎藤さとし演出「おおつごもり」は、82年12月13日、徳島県芸術祭参加公演として、県郷土文化会館大ホールで開催されました。

劇団阿波っ子は創立三年目、81年8月の全リ演西会連和歌山総会で正式に全リ演に加盟しました。以来約十名の実働団員で、浜田広介作、斎藤さとし脚色「泣いた赤鬼」、多田徹・作「花刀」などで、県内各地での小公演を14ヶ所26ステージをやりぬく中で、本公演実現へ向けての力を養ない、実現したものです。

地方都市徳島においても、価値観の多様化とかで体制派演劇や新左翼系の劇団、又、観客に無責任な劇づくりなどが目立つようになっている中で、健全な、地域の庶民感情に根ざした劇づくりが阿波っ子への期待となっている支えで、「おおつごもり」にとりくみました。

結果は二ヶ月半の稽古と観客動員と装置、衣裳、小道具などの製作作業をエネルギー

△地域にねざした大作三つ▽

このところよくつかの意欲的な大作、労作と言えるものに台本で読める機会にめぐまれた。そのどれも「演劇会議」の全読者に読んでもらいたいのばかりであるが、その実現は不可能にちかい。そういう大作に対してこの雑誌のできることは、適切な紹介と、簡明な劇評くらいのものである。戯曲掲載の要求は強いけれど、それはあくまでも上演の必要からなのである。その意味ではここに紹介する三つの戯曲は、地域的にも特色があって上演した劇団との密着度が濃い分だけ、どの劇団にでもという風にはならないかもしれない。

一つは、昨春秋、青森の劇団弘演が上演した「農婦」である。津川武一氏の同名の小説から、「常紋トンネル」の作者矢作京介氏が脚色したものだが、貧農一家を、その苛酷な生活の中でとらえたりリアルな情景が胸に迫ってくる。凶作飢饉のなかで逃散を思いとどまる農民の立上りがダイナミックに描かれる。明和、安永年間におそったみちのくの冷害の活写や農耕現場の再現は演出者（飯田信之）や演技者たちにとって

どんなに大変だったろうと想像される。次に、四国松山のこじか座の猪野建介氏作「捨へんど寒葉」を紹介する。

この上演には野村秀夫氏が五〇枚を超すと思われる懇切な論評を寄せている。プリントになっていて、こじか座の野村氏から送られてきたが転載は無理であった。

野村氏によると「荒筋はかんたんだ。頭を病んだ娘の寒葉をつれて、母である寒葉は四国八十八ヶ所遍路の旅に出ている。経済的に成り立たず、寒葉は売春をして糊口を渡している。浜辺の村で、この行為に怒った住民（とくに女たち）に追いつめられた寒葉母娘は、入水心中する。以上だ。」とあるとおりだが、とかくローカルな風物詩的にとらえられがちな四国遍路さんを、このような切口で、人間の生き方として見せたのは新しい踏み込みといえる。地域にねざす演劇に与えるインパクトである。いわばこの、残酷とも言える対応を、「喜劇」と押さえた野村秀夫氏に、ばくも組したい。それに方言がすばらしい。

余白は失くしたが残る一つは月曜会の土屋清氏の「閃光の遺産」である。（萩）

に克服し、地元劇団では初めて新派、新国劇にもまけぬと評されるほどの大がかりな舞台装置（ベニヤ板60枚を使用）を造り上げ、観客は、キャバハ〇〇名がほぼ満員、売ったチケットは一〇〇〇名。赤字は今の所出ない見込みです。製作のPR文書は、チラシ五千枚、パンフ三千枚、その他二千五百枚と一万枚を超え、活動の中で新団員七名を迎えることに成功、劇団の質的向上にめざましいものがありました。

只今劇団は、次の地域小公演（3月13日予定）にむけ、竹内勇太郎作「さっぱ夜ばなし」を若い演出家で稽古中。来年七月には「徳島大空襲」の劇化に、劇団をあげてとりくむことに決めています。また新人団員のための「演劇教室・基礎訓練の場」の開設も検討されており、稽古場は活気に満ちています。

3月26・27日には池田町篤蔵寺で、全リ演西会連四国ブロックゼミの第三回目、阿波っ子の準備ですすめられようとしています。

（斎藤さとし）

（770）徳島市佐古八一五一一六 斎藤方

〇一八八一二五一一八四九五

世仁下乃一座

いつも細々とみじめ一心の世仁下乃一座で

すが、83年春は様変わりがありそうです。新宿は昔懐かしいアングラのさそり座ありしところの近くに「タイニイ・アリス」なる小空間が四月にオープン。今東京で若い人に人気の高いスーパ・エキセントリック・シアターや神領国資の舞踊集団・神遊（サラム）、他に北村想の雪屋・86等々が連続上演することになりました。そのなかになぜか世仁下が入っておりまして4月24日より30日まで、「別れが辻」（岡安伸治作、77年初演）を上演するということなのであります。他にも六月には江東で石の「木場の鉄太郎」（境野修次作）への協力、そして九月には富山国際アマチュア演劇祭への参加企画もあります。

（176）東京都練馬区豊玉中三二五一一一304

岡安方 〇三一九四八七三三八

テアトル・ハカタ

一九八三年上半期のスケジュールを報告させて頂きます。

一月五日初日の正月公演「妾」（北条秀司作、再演）はおかげ様で満席大人満員で、始めての試みの成功を祝うと共に、舞台装置部門芸術祭優秀賞を受賞した係福岡久の劇場空間論の見事な結晶に、御客様も充分満足してお帰りになりました。（巻頭写真参照）

二月六日、八三年度の全公演が無事動め修める事のできますようにとの願いをこめての開幕記念公演は、地元博多巻香の、まつ香、佳美、和代による「正調博多節」を始めとする座敷芸の数々を披露して頂き、盛況裡に終了致しました。

三月十八日、十九日、野尻敏彦構成演出による「中村旭園筑前琵琶で平家を語る」が、シアター・PAL・ふくおかで、テアトル・ハカタ協力出演で開催。

三月二十六日から四月九日迄、マチネを含めて二回公演、渡辺浩子訳「奇蹟の人」は全八場面の空間を設定するため、十二尺と九尺の二つの回り舞台を使つての転換と音楽はエレクトーンの異才川村江一作曲の数々を始めての生演奏で上演。

五月十三日より十九日、林黒土「貧乏神」。五月二十五日より三十一日、山本周五郎「武蔵と岩太」、連続して時代物に挑戦。

六月には広島、呉で「キューポラのある街」の自主公演を行います。

(812) 福岡市博多区古門戸4-22

〇九二二七一一五〇九〇

劇団湖

こんにちわ。地方選もたけなわ。こんどこ

を動く者の文化を推進する道政の実現めざして頑張っています。

昨年の二十周年記念公演、市民参加の「残影観内炭山暴動」の反省の中から、公演は成功だったが、年毎に演ずる側も観る側も要求が高くなり、「湖」の実力以上の無理が無理を重ねてきており二十年が限界ギリギリ。もうこれ以上現在のやり方が進んではパンクすると云うことになり、二十一年目から又原点に戻って会員だけで実力を積み上げてゆける出し物をやろうと話がまとまりました。

三笠文化協会主催の初夏の文化まつり(6月20日頃)めざし、伊賀山昌三作「結婚の申込み」宮本研作「人を喰った話」の二本で新人養成することになりました。

会員も、休団や就職のための転出や参加体制の軽減を望む者もいて動き易いような体制に作り変えられ、今やとうとう実働六名になつてしましました。しかし三笠の地に演劇の火を消してはならじと残った者の意欲は並々ならぬものがあり、期待が持てそうです。

(068) 21 三笠市観内住吉町九 加藤方

〇二六七二二一三〇四四

劇団同胞

啓蒙を過ぎて、尚厳しい寒さです。

昨年十一月、旭川市公会堂にて、第9回公演「大阪城の虎」(かたおかしろう作、沢田和彦演出)を上演しました。

三年前から暖めていた作品で、関西弁、三味線、浪曲、太鼓等初めて試みでした。

年明けて、二月に劇団総会、そして六月二八日、旭川公会堂で第10回公演「星の降る夜の物語」(朝間義隆作)―第19回春の芸術祭参加―のため三月から取組みに入っています。

(071) 13 旭川市末広四条八丁目高桑方

〇一六六五七―三八三六

劇団2月

こんにちわ、3月に入ってもまだ寒い日が続きますが皆様お元気で御活躍の事と思ひます。

今年は4月に大阪府知事選を迎え、文化の方でも文化状況を良くしてくれる人を、と革新政府再建にがんばっております。又、今年も北海道から九州までいそがしく飛びまわります。どこかで全リ演加盟の劇団の方とお会いし、交流出来たらいいのと思つています。83年度上演作品は次の通りです。ぜひごらん下さい。

「てんまのとらやん」

かたおかしろう作 村上嘉利演出

「のらねこハイジ」

矢田嘉代子作 深海ひろみ演出

「三年ねたろう・やさぶろうばっさ」

さねとうあきら作 村上嘉利演出

「うたえこコーシュ」

イオン・ルチアン作、演出

「冬の虹」

さねとうあきら作 深海ひろみ演出

「ぶんぶん太平記」

しかたしん作 黒沢降幸演出

「大阪むかしむかし」

坪井敦・構成、演出

「ぐうたら王とちよこまか王女」

村山亜土作 さねとうあきら演出

(事務局)

(546) 大阪市東住吉区今川一―10―12

〇六―七二四―九五四五

関西芸術座

例年、二月―四月までは、まさに雑多な多忙さにまわります。

中・高校巡演は、一応三月前半で休憩。

その間隙をぬって「関芸スタジオ」公演。

二班ある長期公演の、一部配役変更にもなう再稽古。附属研究所の本科卒業公演。本年度の研究所入所試験。新年度の一般公演企画

〇六―六二二―二二二

劇団やぎ

拝啓。早春の候、編集局の皆様にはお元気でご活躍のことと存じます。毎号のお世話本当にご苦労様です。早速私共の今年度の公演予定をお知らせ致します。

◇第6回こども劇場

「まわれ、まわれ、まわれ、ピストンクランク」

しかたしん作・やまだみどり演出

6月5日(日) 伊丹・中央公民館

6月12日(日) 天神川小学校

◇第12回自主公演

「野の聖―僧・行基物語」

香村菊雄作、村川直演出

11月25・26日 伊丹市立文化会館

△追記V去る2月27日(日)に伊丹のくすのき学級(聴力障害者)手話歌劇「カルメン」に裏方に全面的に協力し、観劇後の感動に私共改めて演劇の無限の可能性をみました。

(うま・たろう)

(664) 伊丹市千僧字船原二〇―九坂上方

〇七二七―八―一六五五〇

劇団新劇場

全リ演の皆さん御苦労様です。先の演劇大学不参加申し訳ありません。さて劇団は、昨

年9月の「流水の海に女工節がきこえる」の3ステージを終えてから正月返上で、アトリエ公演「踊子」(北村想・作、山根義昭・演出)を上演しました。団員層の若返りから今日の劇創りを、ということと熱気にあふれた舞台となりました。今場の真向いには道警本部があり刑事さんにも推理の一助になったかもと感謝状(?)のくるのを待ちわびています。

「わるいとおかみ」3月6日公演に続いて、男優6人が劇団さっぽろの第8回公演「桂昇天」(木下順二・作、飯田信之・演出)に客演します。同時進行で、劇団さっぽろの協力により、「はやてに走れあまんじゃく」(しかたしん作、小林秀治・演出)を5月の児童劇月間に向けてけい古に入っています。まだ雪深い北海道ですが、けい古場は熱気に満ちています。劇団の公演と選挙にと皆頑張ります。(N)

(060) 札幌市中央区南24条11丁目

〇一一五五一九七八四

劇団やませ

久しぶりにお便り致します。2回程休んだでしょうか。そのことが劇団の最近の活動の停滞を如実に表しています。

稽古場無しの根無し草、団員定着もままならず、定期練習も閑古鳥の態。外は冬。内も冬。北国の寒さが身にしみる昨今。おー寒む。「やませ」という名が恨めしい。

とまあこんな訳でして、寂しい話はこの位にしましょうか。我が劇団の弱点は永遠の挑戦課題なり。がんばらなくっちゃ。

昨秋の公演「海村」「毒きのこ」の二本立ては初めての旅公演を経験しました。特に「海村」では、浜の漁師の一代記(ひとり芝居)でしたので、農村の人々にどれだけ受け入れられてもらえるか心配でしたが、地元より素直に反応してもらえたようです。題材はともかくテーマの大事さを改めて教えられました。この「海村」はもう一度繰り返すつもりです。さて、7月17日の子ども劇場No.4、斎藤惇夫原作、征谷伸夫脚色・演出「冒険者たち」に取り組み始めたところです。在住のフォークシングの協力も得、ミュージカル風に仕立てたいと思っていますが、音痴が目白押し。我が劇団員、果してどんなものができるか……まずは、乞う、御期待!

(031) 八戸市鮫町蕨島町14征谷方

〇一七八三三一一九一二

青年劇場

「演劇大学」お疲れさまでした。直後に、東横劇場で「ブーフォーウー殺人事件」(飯沢匡作・演出)の幕を開け、6日間8ステージを無事終了しました。新聞評に「公演期間を長く」との注文がありました。これまでの課題でもあり、公演日数と観客数、財政等の問題点にとり組み、来年は是非実現にこぎつけようと思っています。

今年は、田中角栄への求刑と期を一にしての飯沢作品に始まり、革新統一候補の決まった都知事選、統一地方選、6月の参院選(ダブル選?)という大事な政治戦の中で、劇団初の常時三班体制、稽古場移転等、目まぐるしさも格別です。又、手狭になった倉庫を人間へ移転(分散していた道具全てを収めてもまだ余裕のある広さです)現在進行中です。

特に、三班体制突入を前に5本の作品の稽古がほぼ同時に行なわれますが、人や時間の調整は勿論、分散を避け、集中を高める作業が早急に求められています。

夏までの公演予定は次の通り。

「あの町は遠い日」4・14・16 日仏会館

金沢・名古屋・富山・高岡

「かげの岩」5・7日 北海道・東北

7・17 日本教育会館

「青春の岩」5・7月 長野・石川

「15才の出発」5・7月、関東・東海

「愛さずにはいられない」7月、市民劇場

(九州その他)

(葛西 和雄)

(151) 東京都渋谷区千駄谷五三ー六

〇三三三二二七〇五四

岡崎演劇集団

第七回「演劇大学」、多くの講師陣により内容も豊富でした。私は演技分科会に出席したのですが、田口精一先生(民芸)の指導で野口体操、発声、観察、メークなど大変勉強になりました。私たち普段なかなかこういう機会がないのでこの大学がとて、良い学び場となるものと感じます。

滝沢先生のお話はとてもおもしろく聞かせていただきました。中でも印象深かったのは「人間は小さい時にふれた文化(環境)がのちまで影響するものであるから、良い文化にふれさせられるような文化芸術を作って行きたい。そのためにはリアリズム演劇を時流に流さずに劇団の主体性を持って演って行くことが大切である」と言う意味のことだった

と思いますが、あらためて考えさせられる講演でした。

三月五、六日、名芸の稽古場で、中部プロククの交流会を持ちました。中部九劇団約70名程の参加で「夜中の交流会」をメインに楽しみました。うちから参加した新人劇団員は「交流会はいいものだ。初めはうちの劇団員しか知らなかったが、交流会の中でたくさん友達ができた。他の劇団にもいろんな人があるんだなあ」と思い、うれしくなった。他の劇団の人がとてもはりきっているのも私も頑張ろうと思った」と感想を述べています。若い劇団員達の相互交流の場をいろんな機会に持たたいと思います。

来る五月二九日に山本周五郎原作、田島栄脚色、八田満穂演出による「さぶ」を上演致します。今年は劇団創立15周年にあたり、新人会の八田先生に演出していただくことになりました。我が劇団は「まげもの」も初めてであれば、専門の演出家によるのも初めてであり、いろんな意味での「初体験」を通して劇団の蘇生と岡崎でのネームバリューを高めたいと思います。(柴田)

(444) 岡崎市元欠町三ー一〇ー三

〇五六四二二一五〇二二

劇団どろ

昨年11月、プレヒトの「アンティゴネー」を多くの方々の協力を得て上演することが出来ました。翻訳をお願いした八木浩先生、スタッフやキャストで私たちの力量不足を補ってくれた在神劇団の皆様、はるばる九州からアドバイスにかけつけてくれた福岡現代劇場の猿渡氏に誌上を借りて厚くお礼申し上げます。

軍拡中曾根内閣の登場で「祖国を守る」というギマンの宣伝が強まる中での「アンティゴネー」の上演は私たちにずい分多くのことを学ばせてくれました。

年末には兵庫ブロックゼミで「スパイ」を上演、プレヒト作品が続きました。

現在劇団は、年はじめに若干の退団者を出し、メンバー的には苦しい状況ですが、第6期研究生卒演として、ガラリと趣向の変った、田中千禾夫作「こころとおもう」の上演に向けて劇団総ぐるみでけい古中です。上演は、4月22、23、24。本家?俳優座との一ヶ月足らずの間をおいた競演となります。

(652) 神戸市兵庫区大開通七ー四ー七

谷垣ビル4F

(合田幸平)

○七八一五七六—六四八八

黒石演劇研究会

昨年十二月の、黒石市民文化会館での初の公演「勲章の川」(作・本田英郎、演出・中込鉄雄)は千名の目標に七百名で終りました。が、ここ二、三年観客数は着実に前進してきています。しかし、はじめての舞台を使いこなせず、今後課題を残しました。例えば、プランニングの遅さ、まずさ、稽古場がない、借りたが狭い、会員が一丸となった活動になっていない、割り当て枚数の券売りができないなどです。又、一方会員外からの協力者が沢山あって迫力に満ちた舞台だったと全般に好評を得ました。

今年は六月に小劇場「病氣」(作・別役実演出・杉山隆一)を、十一月は「十一匹のネコ」(作・井上ひさし)で、かつての黒石ではやらなかったミュージカルにしたいとダンスや音楽関係者などの協力を得て頑張ろうと思っています。

青年演劇では歴史と伝統のある黒石市ですが、今年の青年大会で上演団体がとうとうゼロとなる一方、黒石子ども劇場もその存続が危ぶまれています。そんな中で、三十七年間の地道な活動が認められ、昭和五十七年度の黒石

市文化功労賞を受賞しました。団体では初の受賞となりました。今回の受賞を機に、更に良い舞台づくりに決意を新たにしたいと考えています。

(036) 03 黒石市乙徳兵衛町五一加賀谷方
○一七二五—二一四〇九七

劇団協同

皆さんこんにちは。春の公演準備でおいそがしいことと存じます。

◇私共の83年の出発は一月十五日劇団新年交流会での「鳩」(勝山俊介作)の上演で幕をあけました。この「鳩」は、二つの組が続けて同作品を上演する初めての試みで、好評でした。

しかしその後、春の公演のレバ選定が昨年より難行しており、ずるずると三月を迎えてしまいました。三月に入り、神原政常作「袋の女」で五月下旬を決め、準備に入っております。何ぶんにも少人数の上、女性不足(魅力ある男性がいるのになぜか女性が増えない)のため、客演を交渉中。

◇劇団員のひとりが勉強をかねて、他集団にはしご客演、「壊れた風景」と「イルクーツク物語」。

◇昨年より、全演加盟の仲間のみなさんに

お願いし、脚本を送っていただきました。御協力していただいた集団に改めて、紙面をおかりして御礼申し上げます。

(190) 立川市曙町三一四八—七 黒田方
○四二五—二四一〇八八

演劇サークル夏の会

全演の皆様、連日御奮闘御苦勞様です。また「演劇大学」の御成功おめでとうござります。

さて、私達は昨秋、会の発展のために新しい若手演出の誕生という相言葉をもって、「偽原始人」(爪生正美脚本)を上演しました。演出を担当した本人は不安の横でしたが、会員一同の励ましと協力でお蔭で、スピーディ溢れる喜劇に仕上がりました。評判もよく、成功裡に終ることが出来ました。

今年一月に定時総会を開き、春、秋の二回の公演をすることに決め、春は六月十、十一日公演することになりました。再び明るい喜劇をとり上げ現在、レギュラー演出のもとに稽古に励んでいます。秋は十一月に公演する予定で、春の公演中にレバトリイを決定することになっています。統一地方選、春闘といった中で春の公演で、多忙と困難を抱えています。逆にはずみとして頑張っています。

きたいと考(編集部より、ここで後文が切れている。二枚目は吉岡さんの私信である。黒沢劇作集一冊のご注目の文面であった。)

(吉岡利根雄)

(133) 東京都江戸川区北小岩七—三—110

吉岡方

○三—六五九—八七〇四

劇団思吹

御無沙汰しております。日ましに暖かくなって過ごしやすい季節になりました。各劇団の皆様も御活躍のことと存じます。

私たち劇団思吹は今春公演予定の「アンネの日記」にむけて古い古に励んでおります。作品の大きさを考えるといくら時間があっても足りない様に思えますが、劇団員一同精一杯頑張るつもりです。

日程 6月17日 6時— 東大阪文化会館
6月24日 6時— 郵便貯金会館

(581) 八尾市堤町一—四〇

○七二九—二二—〇八八八

劇団やまなみ

全演のみなさん、山梨の劇団やまなみ、久しぶりの登場です。お元気ですか。

さて、八三年も早く3ヶ月たちました。当劇では一月三〇日に劇団総会を開催し、二月

の演劇大学へ参加する中、3月20、21、27日の地域公演(一宮、勝沼、芦安)のため、目下練習中です。前回とキャストが5人のうち2人入れかわっているの、前回と違ったというか、より発展したものをもと練習しています。

また、春の作品選定もそれと同時に進行しています。公演日も未決定ですが、現在、いくつかの作品のなかから、「ブンナよ木からおりてこい」と「みんな我が子」(再演)が候補として残っていますが、決定するのは四月早々になるでしょう。

また今年で16回目を迎える期生コースもスタートします。

しかし、この忙しいと感じられる今日なのですが、劇団の組織活動の日常性の乏しいのには困ります。劇団員もその事について、総会等を通して自覚しているのですが、個人の生活に押され、組織活動がおろそかになります。当劇団の事務局を中心に、日常の劇団活動をこれからしていかなくてはなりません。

さあ、やまなみのみなさん、全演のみなさん、春のおとづれとともに、日常の劇団活動を活発にしましょう。(私にも、春がこな

いかなあ。)

(400) 甲府市青沼一—八—五 梅津方
○五五—二—三三—九五五六

だいこん座

◇大宮での「演劇大学」はいろいろなことが学べました。特に滝沢修さんの話が聞けたことが収穫でした。

◇新しい団員が二名入ってきました。なんとかがんばって続けてくれますように。

◇今年の公演作品がまだ決まっています。早急に決定するよう選定中です。

◇Y君が「俺が書く」と宣言しました。来年はY君の創作劇が上演できますように。

◇三月二十七日(日)老人ホーム慰問で「落語」を七題ほどやる予定です。一人一題に挑戦しています。

(997) 鶴岡市本町三一—九—十一 高橋方

○二三五—二四—一六八八

劇団塙芸

皆さんこんにちは。塙芸は今年で創立十五周年を迎えました。去年はいくつかの困難にぶつかり、公演活動としては児童劇「はやてに走れあまじやく」を公演したに止まりましたが、現在劇団が抱えている問題は、今後の演劇活動のなかで解決に努力していくしか

ないということ、昨年末、十五周年記念、No.39公演として、小山祐士作「泰山木の木の下で」を由布木一平（塚田恒夫）の演出で行なうことを決め、今稽古に取組んでいます。

今回のキャストの中心「神部ハナ」の役に劇団展望の林陽子さんの参加を得、新しい刺激を受けています。これをプラスのものにしながら、きめこまかい芝居を創っていききたいと思っています。

普及の面でも久々の地元大宮での（埼玉県商工会館）公演なので、ここ何回か続いてきた観客動員数の低迷から脱け出せるよう、そのためには、劇団員がそれぞれ埼玉の活動に確信をもって、決めたことは実践すると言う極く当り前のことを、全員気持を揃えて実行していく、ということと頑張ってみたいと考えています。

公演日時 五月二十四日 PM 6・30
五月二十五日 PM 6・30

場所 埼玉県商工会館ホール
（大宮駅西口）

（330）大宮市染谷一七一一四
〇四八六―八四一三〇八二

劇団京芸

〇京都府文化芸術劇場 三月四・五日

想」実行委員会へ全面的に参加）

現在団員数23名。やっと今年4年目をむかえたヨチヨチ歩きの劇団です。

「福島」の地に根ざした手作りの演劇活動を「をモットーにがんばっています。

大きな仕事としては昨年7月に代表羽田正雄（福島税務署勤務）のいわき税務署への不当転勤があり、家庭に、そして団の体制に大きな影響を与えたことです。

しかし戦争の足音が聞こえる今日、二度と子供達を戦場へ送らないためにも、この「ウメコがふたり」を上演したいという団員達の強い意志に励まされ、今年2月、無事第4回公演を打つことができました。私達にとってはいろいろな意味で、とても意義のある舞台だったと思います。

観客数も回を重ねる毎に増え、第三回公演からは2ステージを打てるようになりました。今は、「ウメコがふたり」の総括と3月27日の第三回総会へむけての「議案書」作成に四苦八苦しているところです。

新人教育、団内ニュース（月一回発行）、機関誌（年二回発行）、「ゼロ」を知る会（年一回）、このペースを崩さないようにして一歩一歩着実に進んでいきたいと思っています。

「肉でもなく魚でもなく」（F・X・クレツツ作、小松徹演出） 於文化芸術劇場
本邦初演の関西弁の翻訳劇、コンピュータと労働者という身近で今日的な題材で、いい反響が返って来ています。

〇俳優教室修了公演 四月八・九日

「真夏の夜の夢」（シェイクスピア作、岡井直道演出） 於京都こども文化会館ホール
〇「十一匹のネコ」の旅は今年十二月まで続きます。

（612）京都市伏見区納所北城堀31-18
〇七五―六三一―二六〇九

劇団群馬中芸

2月2日～6日の群馬中芸センター小劇場
No.8木谷茂生作・鈴木四郎演出の「太鼓」も無事幕を閉じました。舞台形象の面からはいくつ也未解決の問題が残ってしまい、作品の性質上、今の時代にタイムリーな企画だったという以上のものにはなり切れなかった感があります。しかし、逆にそれを今後の発奮材料として、今年度はさらに2回以上の小劇場公演を計画しています。

又、3月29日～4月3日まで中芸演劇センターに於て行われる「春休みこどもの小げき場」に市内の2つの演劇団体と共に参加し、

これからも宜しくお願いします。

（担当 佐野弘子）

（966）福島市岡部字内川原一一五
羽田正雄方

〇二四五―三四一―三四五八屋間V
〇二四五―三五一―七七三六PM 800以降V

劇団すがお

◇春のアトリエ公演が決まりました。若い劇団員の絶対的な支持で、北村想・作の「シエルト」決定です。公演日は
5月13日（金）～15日（日）於けい古場

◇「演劇大学」大へん乗しく勉強できました。美術部会では宿題が出ましたので、2年後を目指してがんばります。（伊藤）

（511）桑名市森忠睦美丘一〇五八
〇五九四―三一一四二二〇

京浜協同劇団

●黒さんの一週忌を前に、七人の刊行委員会の方々の御尽力で「黒沢参吉劇作集」ができました。台本集めから推敲、校正に至るまでの想像を絶するほどの莫大な仕事をわずか半年でやり遂げた刊行委員の人たちの奮闘に敬服しています。なかでも萩坂編集長の努力には、単に黒さんの古くからの友人であり、その全作品を知っているということだ

3月29日・30日の両日、北村青児作・鈴木四郎演出による「三匹のあまがえるとカイト団」を上演します。この作品は昨年秋季より小学校公演を続けており、今年夏まで県内の小学校を中心に巡演する予定です。

今年の学校公演活動は、教育現場をしてそこを取りまく地域と演劇との接点をさらに求め、従来以上に多様な公演活動を展開して行こうとしています。

（371）前橋市昭和町三一五一―一
〇二七二―三三一〇五五〇

演劇集団ゼロ

全国の仲間の皆さん、はじめまして、演劇集団「ゼロ」です。いつも「演劇会議」は楽しく拝見しております。今回はオブザーバーとして初めて投稿させていただきました。我劇団は、79年12月に8名で結成され、それ以後

80年5月 矢野喬・作「やどかり」
80年12月 勝山俊介・作「鳩」
81年11月 小寺隆留・作「かげの巻」
82年4月 飯沢匡・作「毒きのこ」
83年2月 さねとうあきら作
「ウメコがふたり」

（また82年3月、青年劇場公演「臨界幻

けでなく、それをのりこえて日本の労働者演劇の一つの足蹟をきちんと残し、そこから新しい可能性を引き出そうとする氏の情熱を感じるのです。ほとんどの作品を上演してきた私たちにとっては感慨ひとしおです。黒沢作品を知らない若い劇団員を含めて勉強しなうたいと思います。

●昨年夏の総会で、生活、労働、演劇活動を丸ごとひとりの人間の営みとして見つめなおし、もっとイキイキした集団にしていこうと話し合いましたが、その実践のなかでいくつの特筆したいことが生まれつつあります。

久々に八名という研究生が入ってきて劇団に新しい力を加えつつあること。休団していた岡田千尋が九年ぶりに復帰して舞台に立ったこと。劇団寺小屋」を設け、週四回の稽古日に劇団子（小学生）の教育を集団としてとりくみ始めたことなどです。

●三月には二本の芝居を上演しました。一つは宮沢賢治原作、広渡常敬脚本の「グスコ―ブドリの伝記」（十二場）で、もう一つはポーランドの亡命作家ムロジェツクの「亡命者」（米川和夫訳、約二時間）です。演出はいずれも細田寿郎。「グスコ―ブドリの伝記」は六月二日（木）、三日（金）にも横浜の県立

青少年センターで上演します。

(川崎市幸区古市場二一〇九)

〇四四一五一—四九五二

劇団名古屋

なごりの雪のちらつく今日この頃ですが、いかがお過ごしですか。

わが劇団名古屋では、五月七、八日に上演する、飯沢匡・作、久保田明・演出による、「夜の笑い」より「接触」のけい古の最中です。先回の公演では、女優陣におされぎみだった若手男優陣を中心にガンバっております。今日、もう一度教育について考えてみよう。と底冷えのするけい古場を若さであたためながらとり組んでおります。若手男優陣どんな舞台にしてくれませんか、乞う御期待。

(那須記)

(456) 名古屋市熱田区新尾頭二二一九

〇五二一六八二—六〇一四

劇団静芸

劇団はすこしずつでも一つの変化が生まれて来ています。

◇十一月末、さねとうあきら作「星へ行った少年」(西横太演出)での小劇場公演を成功させ、さねとう氏も来静して下さって、「ウメコが二人」「でんでん虫の競馬」につぐ三

部作の上演で、活気が生まれました。次いで十二月二十四日、「竜の子太郎」(高橋健演出)を谷島屋書店主催「親と子の劇場」で再演し、一五〇〇名の観客に反響をよぶことが出来ました。

◇新年に入ってから、二月二〇日、劇団アンデパンダン(各人が自由に発表する)の発表会は、朗読、小創作劇、独芝居、ジャズダンス、日本舞踊、独唱と20人近い俳優が参加し、一定の水準を示す発表がなされて大成功であった。新人・ベテラン共によく努力をして内容のある発表会になり、大きな成果であった。

◇二月二十七日、劇団定例総会がもたれ、新たに、山崎欣太が運営委員会劇団顧問となり、運営委員長西横太、副委員長鎌田三郎となる。新しい若々しい運営委員が二人入り、各実務運営体制がプロジェクトチーム中心に進められる方向、地域にいかになぞすが真剣に討論される。

◇五月二十六日、小山祐士作「泰山木の木の下で」(西横太演出)が上演される。亡き小山氏の遺志を正しくうけつぎ上演成功に努力する。

◇七月、小島真木の創作劇「ねんねの森の子

守唄」を上演することに決定する。

◇三月十九日、劇団三十五周年記念パーティーが稽古場で開かれ五〇名の旧劇団員が集まり大成功に終了する。

◇劇団三十五周年の今年を一つのステップにするべく、その一歩がはじまったと言っているであろう。

(20) 静岡市昭府町二八九二二

〇五四二一七二—〇六〇六

劇団夜明け

三月五日、中津川市青年祭にて「鳩」をうたう会と合同で公演しました。他の団体との合同でしたので、色々学ぶことが多く、いい経験でした。

◇第14回公演(No.5小劇場公演)

勝山俊介・作「鳩」

芳地隆介・作「幽霊哀話」

演出・鈴木弘文

5月21日PM 630 22日PM 100 400

◇夏期移動公演「にんじん」

◇中部ブロック・ゼミナール

8月20・21日 保古湖ユースホステル

◇第15回公演(No.6小劇場公演)

岡安伸治・作「太平洋ベルトライン」

(予定)

今年度は多くの公演を通して、多くを学びたいと思っています。

(508) 中津川市北野丸山

〇五七三六—五一四九三七

劇団展望

大宮の演劇大学には五名参加させて頂きました。その時にも少しお話ししましたが、「あなた自身による芝居づくりの集まり」という、展望が言い出しつゝ進行役の「市民演劇ひろば」が二月にはじめての発表会をもちました。はじめから「やる気」で来た人はむしろ少なく「ちょっとのぞいてみよう」とか「友達につきそい」のつもりが代役をやるハメになり、ハズミがついてとうとう本番までつきあったというような人達十人余。今回上演したものは、自分の動いている学童クラブの吸み取り式トイレについて子供の父母からもんくをつけられたのがキッカケで、あらためて便利・清潔という観念について考えさせられた話、本屋で万引きに間違えられひどい目にあった体験等、三つのエピソード。

今まで観るだけだったけど自分でやってみて……「芝居をつくるのは思ったより易いことだ」「イヤとでもしんどかった」「ものをつくるということが実感できた」「皆で協

力する大切さを感じた」等の感想の中に「卒業証書を出してくれないか」という意見まで出て来た。皆ボカンとしていると「今度自分

のかかわっている、ある裁判争いの中で芝居をつくらうと思う仲間に対する説得力が「うんだ」というのを聞いてナットク。卒業証書は冗談にしても、演劇を活性化として様々な運動の場に持ち込み役立ててくれる人がこの小さなひろばからあらわれたのがうれしい。

◇上半期の活動としては、岩手県「ぶどう座」において「ま屋のちやうちん」上演の予定(七月頃)。また古くなった稽古場の改築案もあり、ゆるやかに「物」の移動中。

(樋口千鶴子)

(166) 東京都杉並区阿佐谷南三—三三二

〇三—三三九三—二七三九

東京芸術座

一方で民主的演劇の創造者として全国を基盤として活動すると共に、もう一方では地域に根ざした劇団として、そこに住む人たちの観劇要求に応えようと発足したアトリエ公演も、この四月には第三回、2月公演の「勲章の川」の再演に続き右傾化への警鐘と、「アソノの日記」を、四月二日から十日まで、稲

垣純演出で上演。

九月には、小林多喜二没後五十周年を記念して、村山知義演出の名舞台「蟹工船」を再演。松下朗が演出補に立ち、劇団総力をあげて取り組むことになっています。この公演も「勲章の川」できり結んだ労働組合や民主団体の人たちと実行委員会を組み、その成功をめざします。

その他十一月には再びアトリエと、今年は地域に根ざし、労働階級の要求にこたえ、民主的運動と共闘し、反動攻勢と闘う文化戦線の保塁を築くことに勢力を傾け、来年の25周年への地歩を固めてゆくつもりです。

(高橋左近)

(179) 東京都練馬区下石神井五—一九—11

〇三—九九七—四三—四二

劇団螺線館

こんにちわ！ことしに入って一月に「曾根崎心中」①と二月に第一班の「楽屋」を上演し、今は、三月と四月に稽古場で上演する第2班の「楽屋」と「亡命者」の稽古に追い込みをかけています。

「亡命者」も2グループで上演するため、去年十二月から計4班にわけて稽古してきました。稽古場を分離できないため、近くの公

民館を借りたり、自主稽古を増やしたりで、かなり苦しい日程でしたが、なんとか上演することができそうです。

「亡命者」が終れば、すぐ「空を飛んだ鶴と銀色の松ボックリ」の稽古が始まります。これは、「四方館」「風浪舎」「蝶線館」の合同公演なので、土・日は堺の方で合宿と、これもまた苦しい日程ですが、舞踊集団との合同公演ということで、体の動き等を含め、何か新しい芝居作りができるだろうと意気込んでいます。

また小劇場部では、阪神間の移動公演のために「マギーの母ちゃん」と「ゼロ弾きのゴースト」の稽古を始めました。

公演予定①は小劇場部の公演▽
4月22・23・24日①「マギーの母ちゃん」

杭瀬サンホール 阪神間移動公演

6月4・5日 尼崎ビッコロ中ホール

10・11・12日 大阪・オレンジルーム

7月1・2日 神戸・生田神社境内テント劇場

右いづれも

「空を飛んだ鶴と銀色の松ボックリ」

7月29・30・31日①「ゼロ弾きのゴースト」

杭瀬サンホール 阪神間移動公演

8月20日 ビッコロ舞台技術教室OB会協力
夏目漱石・原作「夢十夜」
10月28・29・30日作品未定 ビッコロ中ホール

(660) 尼崎市杭瀬北新町三〇四七

〇六一四八八九二二五

劇団支木

まだまだ一ヵ月近い雪が積っている青森ですが確実に春の足音を感じています。

さて公演予定ですが、春公演は5月下旬、6月上旬の間に市内中学校公演を予定しています。昨年の春公演で好評だった「一人の教師と十四人のエリートたち」の再演です。

秋は創立20周年記念の最後を飾る「民次郎一揆」の予定です。劇団としては初めての外部演出、劇団さっぽろの飯田信之氏をむかえ、延べ出演者百名前後の大作です。11月下旬に公演を予定しています。

(030) 青森市本町一六〇一四ふじビル

〇一七七一七七四六七七

名古屋演劇集団

☆アトリエ公演「奇蹟の人」、研究所卒公演

「釈迦内転頂」、青少年芸術劇場「あひるの靴」と、2、3月の約一ヶ月の間に3回の公演をおわり、まあ三つとも大成功とまではいかない中成功くらいで、忙しかった劇団員も

ホッと一息です。こういうときでないと話し合いもじっくり出来ないもので、3月下旬の10日間程を、部会、全体会議といった総括、討議、方針づくりと一月にやった年度がわりの会議をもう一回やっているような感じです。

☆6月25・26日の名演会館フェスティバル参加公演の演目として、有馬頼義原作、劇団創作研究会合同脚色による「遺書配達人」が決まりました。創作研七人が手分けして各短編を脚色、敗戦直前戦友からあづけられた遺書を渡して歩く西山民次という一人の男をめぐる戦後日本の変転を描き、戦争の傷の深さ、そして傷も癒えないうちに再び危険な方向に歩き出す傾向を見せる流れを一つ一つの小品を通じて根っ子からさぐるものです。演出は、昨年、「看護婦のおやじがんばる」で初仕事をした太田幸則が意欲をもやし、じっくりと6月末まで取組もうというわけです。忙しい忙しいが劇団演集の悪いクセですから今回もひとつ……というわけです。

(451) 名古屋市区内通四一六一三

〇五二二五二四一五九七五

劇団弘演

今年創立20周年を迎えました。20周年記念として、3月、小劇場公演「ぼんち絵」(高

橋丈雄・作、秋本博子・演出)「雪渡り」(宮沢賢治・作、青山司・演出)。6月、本公演「はじめてのコンサート」(川北克司・原作、藤村歩・脚色、宮崎英世・演出)11月、秋の移動公演(子供劇場)「おこんじょうり」

(ふじたあさや・作、宮崎英世・演出)、また、5月には記念パーティを開く予定、記念誌の発行など、いろいろな企画を予定しています。

第一弾として、2月25・26・27日、弘大生協組合センター、6ステージ、「雪渡り」「ぼんち絵」をおえました。

今は、3月21日に開く総会の準備のため、それぞれの部会で、総括をまとめています。

また、20周年というおおきな節目で、青森県文化報賞を、昨年の「農婦」に対して、受賞することができました。団員一同大喜びです。なおうれしいことは、今まで活動をかけからさえてくれた家族や、お世話になってる観客(後援会)の方々が私達以上に喜んでくれたことです。

今年は、始めて書いた藤村歩の「はじめてのコンサート」を、毎年着実に演出家として成長してきた宮崎英世が演出します。

弘演、作間雄二亡きあとの大黒柱となる二

人の初めてのコンビ作品なので、団員一同、全力で頑張っただけにたいたいと思

います。(どんな風に仕上がるか?)

20才(はたち)、一人前のおとなとして、一歩前進したい、これまでの歴史を土台に、「地域に根ざした演劇を」のテーマを大切にがんばっていききたい。あらためて考える今日の頃です。(咲間忍)

(036) 弘前市品川町一喫茶ブラジル内

〇一七二二三五一四六七〇

劇団はぐるま

昨秋の「アメリカ人・日本人」はこぼやしの久し振りの創作劇で、一人芝居、モノローグドラマという実験的作品であった。また、アメリカ人にも日本人にもなりきれず割腹して果てた日本人2世の生き方を通して、八方塞がりの状況の中で人間としてのアイデンティ

ティを喪失し、流民化している現代人に鋭く切り込んだ意欲作でもあった。にもかかわらず、舞台はやや上すべり、作品のテーマを未消化のまま終ってしまったように思えてならない。やはり勉強不足と甘さにつけるか? 9月名古屋公演の予定があり、何んとかもう一度、勉強し、創りなおしたいと思います。

年明けて、御浪町ではじめての新春実験劇

場は、楽しくて明るい芝居をやりたいという若手のエネルギーが燃え上った公演だった。意気込みだけでは創造が脹らみきらず、一度暗礁に乗りあげかけたものの、劇団あげてのバックアップで水準以上の舞台を創りあげた。紅白幕を張りめぐらし、中央に花道を設け、桜花を舞台一杯に飾った舞台、満席でお客様が入りきらず1ステージ追加、計4ステージ、428名の普及。笑いあり、ベソスあり、初春にふさわしい公演となったことを喜びたい。今後ともやろうという声しきり。

演劇大学では、やさしくて明るく楽しい芝居であればもてはやされ、難しく暗いからとリアリズム警遠されがちな今日、ほんとに観客要求に添えていくことはどういふことなのか考えさせられました。リアリズムがそうだったのはリアリズムのせいではなく、表現するための技術の未熟さと時代の厳しさにあること。なぜ、意味のないおかしさがはびこるのか。また、この時代をどう生き抜くかという思想・メッセージのない芝居の空しさもよくわかりました。滝沢さんはじめ講師の皆さんありがとうございました。

次回公演は、井上ひさし作、汲田正子演出「十一びきのねこ」で若手を中心に中堅をま

きこんで歌のダンスの特訓に明けくれているところ。はじめての「ミュージカル」これまでの舞台が創れるだろうか？若手の爛々とした目の輝きは、この可能性を切り拓いてくれると希いながら初日が開くまで努力、努力……。

・4月15日(金) PM 700 16日(土) PM 300・700
・岐阜産業会館文化ホール
(山口和紀)

(500) 岐阜市西野町一十一

〇五八二一六五—一八五二〇

演劇集団石るつ

◇春公演

六月十日 午後六時半開演

六月十一日 午後二時・六時半開演

江東区総合市民センター公会堂

(地下鉄都営新宿線・西大島駅下車)

「木場の鉄太郎」二幕

作・演出 境野修次

◇石るつは十人足らずですが、東動演(東京動くもの演劇祭)関係の集団、土くれ他、また世仁下乃一座からの協力を得て、何とか良い舞台をと奮闘しています。「木場の鉄太郎」に御期待下さい。

(135) 東京都江東区白河二—十三—八

吉川復写工業内 境野修次

〇三六四二一六三八三

260 千葉市幸町二—十三—七—五〇—

〇四七二一四四—三六—八八(境野)

劇団大阪

全国の皆さん、今年は選挙の年、言い度い放題の反動政治に鉄槌を下す好機です。お互に各地で頑張りましょう。

さて10周年行動No.4「大枝の鬼」の評価は賛否大きく二分されました。このようなスケールの大きな芝居を取り上げた意欲に対する支持や、台本の構造の素晴らしいへの賛意も多く寄せられましたが、全体的に難解すぎるという指摘や言葉の問題では、出雲弁や製鉄用語の難しさも相俟って、いつも以上に聞きとれないという意見も多かったようです。観客創造の方もまたしても最低線を割るという事態になりました。幸い赤字の方は支出を切りつめ、大した額にはなりません、いづれにしても抜本的対策もないまま団員一同頭をかかえております。

今後の予定

◇4月10日大阪府知事選挙投票日 今回は劇団でも積極的に革新候補亀田治氏を支援していくことにしています。また文工団作品とし

て、かたおかしろう作のひとり芝居「山本小曾根」を劇団の中心役者斎藤誠が演じ、府下各地をまわっています。

◇作・かたおかしろう、演出・熊本一「風」

劇団師子座の高橋扶美子氏主演で評判をとった舞台ですが、今回は彼女以外のキャストを劇団員でかため、昨今のキナ臭い情勢のなか、反戦の願いをこめて府下各地を回る予定です。

◇作・長岡輝子、演出・斎藤誠「長いお正月」
6月24・26日 4ステージ 於けい古場
御存知ソートン・ワイルダーの翻案。斎藤誠が本格的なる初演出に挑みます。新人を中心に演技の勉強を主眼においた研究公演に燃えています。

◇作・井上満寿夫、演出・熊本一「新銀行生活」11月で日時は未定、於府立労働センター。
10周年行動No.5でこの行動のアンカーとして総決算的とりくみになります。

(542) 大阪市南区谷町七—一—39—103

〇六—七六八—九九五七

劇団未来

前略、全国の仲間たち、編集部皆さん、ご健闘のことと存じます。劇団では

◇2月20日、大阪キャッスルホテルで「創立20周年記念のつどい」を持ちました。各界か

ら多数のご参加を得て盛会でした。今後とも宜しくお願い致します。

◇春の演劇まつり参加、小劇場公演No.4として岡安伸治作「フラスコの中の青い空—錬生術—」を決定。藤岡英章が演出します。

現在、テーブルげいの真最中です。ご期待下さい。

5月27・29日 青少年会館小ホール

◇革新府政奪回なるか、

けい古のあい間をぬって、大鼓が活躍中です。大阪に再び春を、

(550) 大阪市西区江之子島一—七—十一

新うつぽビル4F

〇六—四四七—〇三〇一

劇団四紀会

日に日に春らしくなっています。皆さんお元気ですか。大へん遅くなり、ご迷惑お掛けします。

定例総会を2月19・20日と持ち、83年度のスケジュールが決まりました。

春—5月22・29日 稽古場で、第3回元町小劇場、おプラザ。ヴェンゼルの日常性演劇「家族」と初期の作品である「あの町は遠い日」を上演予定。

夏—7月19・20日 神戸の文化の仲間で

「平和を考える文化のつどい」を合同で行います。

秋—劇団が講師を務めている演劇教室の卒業生の15周年公演があります。ただ今レバ検討で苦しんでいます。その間、劇団はベテラン中心で、第4回目の小劇場を開くため稽古を積んでいます。

冬—家族劇場、これも今、レバ募集中です。その間に秋から冬にかけて、移動2ヶ所、今回はすこし遠くへ出張します。一人ひとりが多もや、一生懸命の年です。

今年はスケジュールに関係なく、年間を通して研究所を開くことを決めました。自主的な学び場として、大事にしてゆきたいと思っています。

(650) 神戸市中央区元町通二—九—一

元町プラザ六二二

〇七八—三九二—二四二二

大阪府職員演劇研究会

今、春の演劇まつり参加作品「太陽の子」(原作・灰谷健次郎、脚本・山田民雄)に取組んでいます。

今回の公演は、私たち「劇研」と演劇集団わだち、サークルたんぽぽによる合同公演として行います。大阪では、自立演劇集団の交

流が進む中で、相互協力も行われておりますが、今回の合同公演は、各集団の弱点をカバーしようという現状から生まれました。

私達の劇研では、女優の結婚、出産と、おめでたいことが続いた反動として、女優が思うように芝居ができないという悩みをかかえています。又、サークルたんぽぽは、女優ばかりという状況であり、この点をカバーし、すばらしい舞台にと、今、全員一丸となって燃えています。とにかく、いま私たちはどうして新人を獲得していくか、この課題に直面しています。

職場に文化を育て、働きやすい職場をつくるためにも、職場演劇サークルは守らなければならぬと決意しています。

公演日 6月10日・11日

(540) 大阪市東区大手前元町府職員会館

〇六—九四一—三三三〇

劇団山形

北国山形もようやく梅の雪が膨らみ始めました。皆様お元気のことと思います。

初めて演劇大学に参加し、体操の指導を受け、帰って三日間ほどは階段の上り下りに苦勞しましたが、素顔の滝沢修氏を拝見でき、感激でした。まさに演技としか言いようのない

い講演が今も強く残っています。「芸を究め
尽くす」とは、あれほど魅力的な人間を創
り出すのかと改めて演劇の魅力を感じ、さら
に芝居をするとは何なのかを教えられたよう
に思います。

今、私たちは、5月15日の、稽古場の「天
国椅子」公演に向け稽古に入っています。

3月20・21日の東北ブロックゼミが終ると本
格的な稽古に入ることになるでしょう。今回
は冒険をし、団員それぞれが役者、スタッフ
の新しい分野に挑戦しています。

10月末には「看護婦のおやじがんばる」が
決定されており、その準備もあわせて行う予
定です。

(996) 山形市東青田五・八・五

〇三六三三二四一〇五

劇団名芸

原稿締切りの3月20・21日に、第3回天白
子供劇場「大どろぼうホッテンブロッツ」(台
本・栗木英章、演出・高村真一)を上演、一
週間前の移動も含めて、約五百人の親子に観
てもらいました。団内の作曲、振付けによる
歌、踊り、初めて挑戦した人形劇等盛りだく
さんでしたが、新人の活躍もあり、ほぼ成功
したと思います。

次は春の定期公演で、待望の「リア王」(台
本・栗木、演出・柘植洋)を6月17・19日平
針小劇場で上演します。例によって、名芸版
の斬新な舞台を創りますので、是非ご観劇下
さい。

中部ブロックは、3月5・6日に久しぶり
の大家交流会を持ちました。延べ69人の参加で
にぎやかに語りあかし、八月のブロックゼミ
の成功を誓い合いました。

また名古屋では、来年30周年を迎える名演
の記念例会を、地元劇団と共同で企画しよう
と話し合いを進めています。相変らず多忙な
日々ですが、お互い、がんばりましょう。

(468) 名古屋市中区天白町大字平針

字向田四四六 名芸平針稽古場

〇五二一八〇三二九二二

〇一八二二一三六九一

人形劇団・京芸

好評を得た「猫は生きていく」は初演を含
めると正に全国津々浦々で公演、この三月を
もって打上げとなる。休む間なく、四月より
さねとうあきら氏脚本(同氏の「六べえだぬ
き」より)「ずんべらぼうがすき」を、演出
藤沢薫(劇団京芸)、美術谷ひろしで取組む
ことになる。この作品は五月中旬より、学校

公演を開始する。

昨年より続演の「グリックの冒険」(斎藤
惇夫原作、幸見彦演出)は、再稽古の後再び
四月下旬から学校公演。

秋には西日本の子ども劇場、おやこ劇場の
例会に参加する。又、かたおかしろう作、藤
沢薫演出のポケット劇場班「給食い幽霊」は
休みなしで、今年も全国へ出かける。

来年創立三十五周年を迎える私たちは記念
公演にむけて今年も秋に大人の公演人形寄席
を企画。すでに準備に入っている。きびしい
情勢の中で劇団を守り抜くには、きびしい作
品づくりがないと肝に銘じているこの頃であ
る。

(606) 京都市左京区岡崎徳成町二四

日の出ビル4F

〇七五二七五一〇四五二

演劇集団わだち

昨春秋、さねとうあきら作「ウメコがふた
り」を又川邦義演出で上演、まずまずの成功。
今春は第7回春の演劇まつり参加で、灰谷健
次郎原作、山田民雄脚本「太陽の子」を又川
邦義演出で上演します。6月10、11日。

(564) 大阪市福島区福島六・12・17

〇六一四五八一一四五五



関西における戦前プロレタリア演劇の研究〈四〇〉

大岡 欽治

大阪地方のプロレタリア演劇

日本プロレタリア演劇同盟

(プロット) 大阪支部の活動

一九三三(昭和八)年 六

(6) プロット機関誌「プロレタリア演劇」

一九三三年六月号における「プロット大阪

支部」の活動報告

「プロットの旗は進む
モルト日本支部プロット書記局

大阪支部

A 東京左翼劇場 新築地劇団及び大阪支部
三劇団共同公演によって「機関庫」を上演し

た。この公演に対するファシスト生産党と官
犬との共力による妨害に対して、劇団より抗
議文書を発表する。

B 二月二十日―二十八日のマルクス五十年
祭カンパに於いては準備斗争期間を通じて、
全員サークル配属の実践化と教育活動の活発
なる展開のため新テーゼ研究会を統一的に持
つ事、及芝居物語その他の出版物の発行を計
画し、またコップ地協の指導下にかゝる準備

活動の上に、三月一日―十三日の宣伝斗争週
間には、移動隊活動の強力な展開、特に五日
の失反デーには失業者街への持ち込を行い、
その他講演会、展覧会、プロキノ公開への積
極的応援参加、演劇講習会の開催が行われた。
その成果に就ては未だ報告がなく不明であ
るが、十三日に予定されていた講演会は、コ
ップ主催という理由によって禁止された。

モルトデー公演及この講演会等に於て最も
直接的に表れた白テロの強行に対する大衆的

逆襲の斗争は、三・一五同志小林芳農葬に結
集され、コップ地協及全会、市電自助会、総
評、労救等によって、戦線統一のための団体
協議会が設置され、その統一的指導の下に、
アジプロ活動を展開し、慰問会、葬儀基金の
募集、サークルよりの抗議文、及メッセージ
の作製のために精力的に斗争を開始した。か
くて三月十五日、芳農葬は午後三時より天王
寺公会堂に於て大衆動員を以て公然たる開
催を争い取るべく決意されていたのであるが、
吾々の逆襲に対して、極度の恐怖を感じた警
察当局は、十五日正午を期して、各団体の事
務所を襲撃し、指導的分子の総検によって、
芳農葬ブツブシを計画した。これに対して
吾々は当日午後七時、指導部との連絡の不備
のため統一には行けなかったとはいえ、心
斎橋附近で約二十名の動員をもって街頭デモ
を決定した。

犠牲者は、コップ関係約五十、内プロット

五であったが、二十日前後殆んど全部釈放された。

この労働葬カンパに対する大阪支部及コッブ大阪地協の自己批判として、五十年祭カンパと労働葬を分離して問題にされた事、計画の不充分さ、アジプロ活動の不活発等が指摘された。

(7) プロット第五回全国大会

プロットは、第四回全国大会（一九三一年・一〇・一一）に新しい組織問題を提起して採用されることに決定したが、三二年度には国際演劇革命競争の斗争のために精力をつかって終ったので、第五回全国大会を東京の築地小劇場で、三三年四月一六日に開催することになった。当日は全国から百数十名の同盟員が参集したが、開会と同時に解散を命ぜられた。

以下、この第五回大会に関する資料をあげてみよう。

(一) 日本プロレタリア演劇同盟機関誌「プロレタリア演劇・第五回全国大会・メーデー準備特号」（一九三三年四月二〇日発行）より

「第五回全国大会開催に際して」

我々は一九三一年十月の同盟第四回大会において、プロレタリアートの当面する戦略的目標「多数者獲得」の観点に立って「新組織方針」を樹立した。之は我が同盟の之迄の街頭の専門劇団の組織から、真に経営・部落を基礎とした大衆組織へと再組織すべき根本方針を決定したという点で曾ってなき輝しい大会であった。其の後我々の一カ年に渡る実践は経営・部落における広汎な演劇サークルの組織労働自立劇団の結成、そして同盟の基礎単位なる企業内・部落内同盟班の結成への具体的活動を押し進めてきた。特に我々は国際的国内的革命競争の全期間を、この経営・部落を基礎とした同盟の再組織の為に斗って来た。又三月の第一回拡大中央委員会「新方針」の其の後の実践の点検と、その立ち遅れ克服の為に開催され、九月の第二回拡大中央委員会では、所謂「三二テーゼ」の観点から我々の全活動の再点検を行い、我々の立ち遅れが「全面的政治的立ち遅れ」である事が正しく指摘され、我々の活動が未だ経営・部落内活動から遊離している事が厳しく批判され、「全同盟員のサークル配属」という積極的面

での討論が大衆的に捲き起され、今やその実践の緒につくに至っている。又之と前後して、企業内活動の困難さと、敵の三月以後の打撃く弾圧により多くの働き手が奪われ、働き手の不足と共に益々仕事の困難さを告げて来た事から、同盟内に新たにタイトウして来た主として右翼的傾向の危機が早くも此処で指摘され、その主因が小ブル的怯懦性に根ざしている事が批判され、その後、之等との斗争が強調されて来た。

斯くの如くにして、我々の再組織はあらゆる困難との果敢な斗争によって、この一カ年半に一応の達成を見て、之等の実践は同時に我々の「新方針」が全く正しかった事を証明している。併し、我々は之等の画期的方向転換にも拘らず、未だ甚だしく客観的情勢からの立ち遅れを認めなければならぬ。

即ち、過ぐる一カ年半は極東における日本帝国主义の略奪戦争の全期間であつたし、之は世界ブルジョアジーの東洋における意兵としての中国革命圧殺、ソヴェート同盟攻撃の準備の全期間であつた。国際的には一方において益々腐朽して行く資本主義体制と他方においては益々輝かしい発展をとげ、今や世界史に曾って見ざる階級なき社会建設の為の第

二次五カ年計画へと躍進した社会主義体制との決定的対立を見ている。かくて現在においては正に「戦争と革命の危機の第二期の周期」へと突き進んでいる。とりわけ日本プロレタリアートの革命的昂揚と戦略的目標の発展・新テーゼの確立、それは我が国における来るべき革命の性質を「社会主義革命への強行的転化の傾向を持つブルジョア民主主義革命」であると規定している——と共に我が文化・演劇運動における「多数者獲得」の任務は特に緊急な課題となつて全面的に押し出されて来ている。

ここから我々が之迄過少評価していた土地を廻つての農業革命の重要性、並びに我々の主要敵が「戦争と飢餓」を強要するブルジョア地主的××制である事が明かにされた。即ち我々の当面の戦略も来るべき人民革命の為の都市窮民から、中貧農層まで含めた広汎な人民層をプロレタリアートのヘゲモニーの下に確保する事の絶的に必要な事が結論される。我々の全活動も亦かかる観点から、より一層の執拗さをもつて之迄の方針を進展させ、重要企業農村を基礎とした下からの統一戦線の為の斗争方針を決定しなければならぬ。来る四月十六日の第五回全国大会も外なら

ぬかかる根本的立場から「新方針」実践後の、第一回及び第二回拡大並びにコッブ拡大において我々が全活動を批判し、斗争方針を補足発展せしめ、諸欠点克服の為に斗つて来た、この全期間の発展を更に厳密に検討し、我が演劇運動のより高い段階への指針を確立する為にこそ開催される事を知らなければならぬ。当然、ここから大会の中心問題も亦、以上の観点から、我々の重要な（根本的と迄極言され得る）弱点である、企業内活動の強化が徹底的に討議されなければならない。

即ち、之迄、多かれ少なかれ我々の間に根強く残っていた文化主義的非政治主義的傾向——我々の企業内斗争は演劇的な面のみでやつていればよいという企業内における政治的経済的斗争との結合の忌避、傍観的態度——と決定的に決別し、革命的諸組織との緊密な結合による日常斗争に参加し、その中でのアジプロ隊活動の激発をもつて下からの統一戦線の為に斗わねばならぬ。かくの如き我々の根本的活動形態の創設こそ当面の問題である。かくて今迄の公演活動と移動活動、専門劇団とアジプロ隊という並列の価値評価の再検討が行われなければならない。

モルト第一回拡大ブレナムにおいて正しく

指示されている「資本主義社会における最も効果的な演劇活動の基本的形態はアジプロ隊である」という観点から、我が演劇組織の正しき評価の上に立って吾々の全活動形態の再吟味が要求されている。之と関聯してサークル活動についての検討が行はなければならない。特に現在、その指導の面に現われる右翼日和見主義的傾向「サークル配属」の不履行状態の根本的原因が最も厳しく批判されなければならない。それは又吾々の最近、教育活動の不振、理論活動の沈滞と相俟つてあらゆる偏向を黙認するという「腐敗した自由主義」を生み出している、之等の根本的打開策も亦重要な討論の中心とならなければならない。

之等の欠陥は実践における日和見主義として最も顕著に表われている。即ちサークル数の減少、サークル活動の固定化、創造活動の不振等、唯現象的に見て、労働大衆の間に澎湃として起りつつある文化的要求を見ず、之等の指導・組織づけをなし得ない根本的欠陥、真の「立ち遅れ」克服をサポートし、「力の弱まり」というが如き理由によって積極的斗争からの回避を合理化せんとする敗北主義である。

以上の如き中心問題の徹底的討議から、経

宮・部落における基本的諸組織との連絡強化、アジ・プロ隊（班）の結成、同盟員のサークル配属の徹底の実行、労働者幹部の上部機関への大胆な引き上げ等が正当に解決されなければならぬ、かくて吾々は第五回全国大会をキイキとして広汎な大衆組織を実践的に闘い取らなければならぬ。

その為には大会準備期間において広汎な大衆に大会のもつ重要性、その意義を執拗にアジ・プロし、経営・部落からの大衆討論を捲き起し、之を正しく組織づけて当日の大衆動員へ盛り上げ、第五回全国大会を公然と大衆的に闘い取らなければならぬ。

(二) コップ機関誌「プロレタリア文化・芸術団体特集号」第三巻第五号（一九三三年五月二十五日発行）より

「プロットの同志諸君へ！

（第五回大会へのメッセージ）

全国六百のプロットの同志諸君！ 諸君が今輝かしい第五回大会を迎へるに際し、吾がコップ中央協議会は文化戦線に於ける最も勇敢な斗士連に焰のやうな革命的挨拶を送る。特に獄中に於て天×（皇）制白色テロルに抗して共産主義のために闘っている中央執行委

員長同志村山知義始め、十数名のプロットの最良の働き手に対してプロレタリアートの手を差し伸べる。同志諸君！ 国際革命演劇同盟の最も強力な支部としてプロットの斗争は国の内外に於いて広く知られている。特に第四回大会に於いて決定された企業農村を中心として演劇運動の再組織の意義はまことに大きい。吾々は新方針実践のための諸君の努力を何人にも劣らず評価するものである。併し乍らそのことはプロットの斗争が全く充分であつた事を意味するものでは決してない。

同志諸君！ プロットは文字通り広汎な大衆的演劇組織とならなければならぬ、諸君の活動は未だ充分な大衆性を獲得して居らず、企業内の労働者の有能な演劇的働き手を同盟に吸収するテーマが極めて遅い。労働者同盟員の獲得、新幹部の養成は単に言葉の上の問題でなく、今日直ちに着手しなければならぬ問題である。このことなくしては広汎な革命演劇に対するプロレタリアートのヘゲモニーの確保は不可能である。この点を無視して国際労働者演劇同盟の方向転換を考へるならば、それは単に敵階級への武装解除に役立つのみであらう。其発生以来革命的インテリゲンチヤをその中心として来たプロット及び、我が

文化活動全体によって今最も強調すべき事は組織の労働者化である。このことなしには広汎な革命演劇の指導を考へる事は出来ない。だが、全国六百のプロットの同志諸君！ 諸君はこの事の必要を充分知っている。そして吾々も亦諸君がそれを実践に移しつつある事を知っている。プロットが企業に基礎を置いた、まことの大衆的組織に発展する事は同時に吾がコップを強力化する事を意味するものであり、かくして始めて吾々は忠君愛国主義を強力な支柱とする、文化演劇反動に対する、中国分割、ソヴェート同盟攻撃の強盗戦争に対する強力なプロレタリアートの一部隊を築き得るであらう。

プロットの大衆化へ！

一九三三・四・一六

日本プロレタリア文化聯盟

常任中央協議会 書記局

これはコップ（日本プロレタリア文化聯盟）より、プロット第五回全国大会に送られたメッセージの全文であるが、大会は解散されたので、「プロレタリア文化」誌に掲載されたのが残っている。

(三) 平出末（名古屋区裁判所検事。司法研究

第二部第十四回研究員）著「プロレタリア文化運動に就ての研究」（復刻版）昭和四〇年より

第四章 演劇運動

第二節 日本プロレタリア演劇同盟

第五項 第五回全国大会及其後の

状況

第一 第五回全国大会

（一九三一—一九七頁）

第五回全国大会に関する資料については、プロット側のものは手に入らないので、司法省関係の文書の内から一部を抜いておく。

第五項 第五回全国大会及其後の

状況

第一 第五回全国大会

昭和八年四月十六日、築地小劇場に於て第五回全国大会（劇場同盟当時より通算）を開催、参加者百十余名あったが、開会と同時に解散を命ぜられた。当日審議する予定であつたものは、中央執行委員会報告、規約改正、綱領スローガンの決定の件等であつた。

プロット第五回大会スローガン

1. 我々の組織の根を重要経営、重要農村、

- 兵営、軍艦へ
- 我々の斗争の中心を企業内芸術アジプロ隊活動へ
- 下からの統一戦線の為めに企業内演劇サークル自立劇団を拡大強化しろ！！
- ファシズム、社会ファシズム演劇を撲滅しろ！！
- 創造方法に於けるレーニンの段階の確立へ！！
- 農民演劇、同伴者演劇をプロレタリアートのヘゲモニーの下に
- 言論、集会、出版の自由
- 軍事的、警察的テロル反対、コップ、プロットの犠牲者並に一切の階級的政治犯人を即時釈放しろ！！
- 日本プロレタリア文化聯盟発展万才。
- 国際革命演劇同盟極東書記局確立、東洋諸民族の革命的演劇運動発展萬歳
- ソヴェート同盟、中国ソヴェート攻撃、中国革命厭殺の帝國主義戦争を打倒しろ
- ソヴェート同盟 中国ソヴェートを守れ！！
- ファシズム、社会ファシズムの打倒
- プロット第五回（全国）大会萬歳
- 国際革命演劇同盟の旗の下に
- 右のスローガンに於て明白なる如くプロッ

トはモルトの日本支部たることを誇示し、コップの使命を果すことを掲言し、党及び共青の指導下に活動し、右スローガン中にも演劇運動に固有と認められるものの外に、三二年テーゼに基づく政治的事項が機械的に羅列されて居るのが、当時の運動の真相を如実に物語るものである。

併し乍ら此の當時に於てプロットの運動は根本的支障に当面して居た。即ち「検閲上の制限、有能な技術者の活動の自由奪取、財政上の逼迫、大小劇場からシャットアウト等、更に全体としてプロレタリア階級の力の減退」等々の原因により、経済困難に陥り、他方客観的社会状況に押されて従来の政治主義偏重の誤謬が愈々顕著に意識されるに至り、右のスローガンに於ける誇張的表現の裏には、既にプロットの解散を見越して、モルトは勿論コップをも脱退せんとする気運が内蔵されて居たのであった。

(8) 戦旗座・構成劇場の二劇団の合同
新劇団名を一般から公募

時局は激しく動いてきた。

この年一月、ドイツ、ヒットラー内閣成立。

二月、日本関東軍中国熱河省に侵入、三月、日本国際連盟脱退、五月、京都大学滝川事件おこる。

そして別項で取扱うが、思想弾圧が強化され、コップ関係者の検挙が強化されてきた。大阪でもプロットを含むコップ関係が襲われてきた。

この状況と、第五回全国大会は解散させられたが、プロットの方針は組織再組織演劇活動もアジプロ活動が中心となるの方向も考慮して、公演専門劇団の整備が必要になってきた。大阪では戦旗座と構成劇場が合同して一劇団となる方針が立てられた。次のピラが流された。

☆ 戦旗座構成劇場合同に際して

新劇団名を労働者並びに

一般労働大衆より募るノ

全大阪の労働者並に一般労働大衆諸君

広く諸君に支持されプロレタリア演劇運動の旗をおし進めて来た輝ける戦斗的劇団大阪戦旗座と構成劇場は合同して、一つの劇団になることに決定した。

一九三三年四月十六日のプロット第五回全

国大会で、日本プロレタリア演劇運動の方向を次の如く決定した。

プロット（日本プロレタリア演劇同盟）の

組織の基礎は、工場農村に置かれなければならない。わがプロレタリア演劇運動はこの組織の基礎の上に立つて大工場、大経営、農村部で労働者農民諸君の間で発展しなければならない。だが現在には支部の中心的な力は労働者ではなく劇団員だ。従って吾々はプロットを労働者農民の組織につくりかへるために努力することが当面の任務である。

それと、労働者農民諸君の手で工場や農村の中にアジプロ劇団をつくることに尽力することが吾々の第一の任務である。

今までの劇団の仕事の中心は公演であったが、吾々の公演は今迄のような仕方では駄目だ。前に言った様な努力を吾々が一生懸命にやって、工場、農村にプロレタリア演劇運動の基礎をつくり、工場農村から直接支持されて公演をもたなければならぬ。

吾々の当面の仕事は大経営大工場農村部でプロレタリア演劇運動の基礎をおくことだ。吾々の今後の活動は、以上の批判に基づいてやる。そう云ふ点からみると、現在の状態の二つの劇団があることは力の分散であり、

大阪戦旗座構成劇場合同に就いて

我々両劇団の合同に際し、過去の自己批判と合同の理由を明らかにし、今後の斗争を誓うものである。

我々は一昨年の我同盟第四回全国大会の「新方針」に基いて、企業農村を基礎とした真に大衆的な演劇組織へと再組織する為め、大阪地方に於けるプロレタリア演劇運動の中心部隊として、日本プロレタリア劇場同盟創設に協同し、一昨年の我同盟再組織には全国に卒先して日本プロレタリア演劇同盟（略称プロット）大阪支部創立に努力し、今日に至った大阪戦旗座であり、

他の一つは、同じく過去六十年の歴史を、人道主義的自由主義的小ブルジョア劇団より正しく成長した同伴者劇団として可成長い期間をプロレタリア演劇運動に参与しつつ大阪支部創立に全力的活動をなし、昨年の第二回国際演劇デーを期してプロットに加盟し以降戦旗座と共に大阪地方にプロットの旗を強力に押進めて来た構成劇場である。

我々両劇団はまた、支部の決定に従い、戦旗座の移動劇場部として活動していたアデプロ劇団を昨年三月十五日を期して独立せしめ、大阪メガホン隊を創設し、大阪支部の各活動

部隊を充実せしめた。

我々自体としては前後十数回の大小公演をもって大阪に於けるプロレタリア演劇の旗を高く掲げてきた。

併し、経済恐慌の深化と第二次世界戦争の危機の切迫は、（特に一昨年の満洲、中国を中心とした日本帝国主義の侵略戦争開始以来）益々階級対立を尖鋭化し、現時に於けるプロレタリアートの戦略目標たる下からの統一戦線による多数者獲得は緊急なる当面の課題となっている。かくの如き状況の下に開かれた同盟第五回全国大会は、我々の演劇戦線の最前線を受けもつものは企業内芸術アデプロ隊でなければならぬと決定した。

この中心課題こそ、企業農村に於ける広汎なサークルの組織、自立劇団の結成、その中に於ける同盟班の確立によって、かかる斗争形態を創設して行くべきことが明らかにされた。斯様な活動を通じて労働者新幹部を養成し、同盟の奥の労働者化を計らなければならぬ。之らの諸活動と結びついて始めて、我々の公演活動が全き形に於て展開されるのである。之迄、全同盟員のサークル配属を問題にして来たのも以上の如き理由からに外ならなかった。

消ヒである。少しの力をもムダツカヒすることなく、その活動に使はなければならぬので合同することに決定したので。

戦旗座にしろ、構成劇場にしろ永い苦しい歴史をふりかへて見ると、吾々にとっては強い愛着を感じるが、そういう感情で正しい道を歩むことを阻害してはならないと座員一致で合同を決議した。

そして、今度の劇団の名前は労働者諸君につけてもらおう、その名前のもとに集って、前に倍してモリモリ闘いに進んで行かうと決心した。

工場の休憩の時間に、サークル集会の席上で一つ問題にして素晴らしい名前を、吾々劇団の為に考えて呉れ、吾々はその旗の下に生死をかけて闘うであらう。

一九三三・五・一五

日本プロレタリア演劇同盟大阪支部

戦旗座

構成劇場

合同準備委員会

五月卅一日

送先 北区中野町三丁目九三

大阪戦旗座内合同準備委員会宛」

「 声 明 書

我々がかかる新たな観点から吾々の活動を再検討するなら、明かに公演中心主義に落人っていた事、我々が未だ街頭のであった事を認めなければならぬ。

斯くて我支部執行委員会は大阪地方の客観的、主観的条件の分析の上に立って我支部活動形態の再評価を行った。

その結果は、現在の大阪支部の主観的条件を以て、第五回全国大会の決定を最も効果的遂行する為めには、アデプロ劇団（メガホン隊）を含めての三つの専門劇団に大部分の力を費すものでなく、公演劇団の□□に依って企業内芸術アデプロ隊の主要な誘発隊としてのメガホン隊の強化を計ると共に昨秋より□□□□いた全同盟員のサークル配属をテッタイ化する事によって企業内活動を強化しなければならぬ。

我々両劇団もこれを中心として討議し、その正しさを確認し、両劇団総会に於て合同を決議した。勿論このことによって企業内活動の重要性から公演活動を過少評価するものでも、公演劇団は唯一つでも事足りるというでもない。

かかる企業内活動との関連のもとに初めて組織活動と創造活動との統一を見ることが出

団徳島が十月「おもん藤太」十二月「時の氏神」を。「テアター八〇」が十二月「冬眠者」を、「新オーラル派」が十月、八三年三月に「君は愛のために死ぬるか」、十二月に「冬眠者」を。「為五郎」——人芝居——が八月より十二月にかけて「土佐源氏」を、それぞれ公演している。

高知県は、劇団「ユマニテ」が県芸術祭参加公演として、「熱海殺人事件」を上演している。またRKC劇場も公演を続けている。このように四国全体を概観すると、かなりの量の公演が行われており、それがそれぞれ三〇〇名から七〇〇名の観客を集めているところから、今、一種の高揚期にさしかかっているとも考えられる。過去このような傾向が五・六年単位でくり返されて来たが、今流動する情勢を見据え、その中で生き残る質の高い舞台を創るための、理念と技術の確立が急がれる状況にあるといえよう。

やがて来るであろう淘汰現象の中でゆるがぬ位置を確立するためのリアリズムが、この現象的盛況の中で問われていると思われるのである。

△散歩道▽

「11びきのネコ」（劇団はぐるま）
恥しながらこの有名な「11びきのネコ」にふれるのは、読むのはじめてなら見るのはじめて。どうせ大した本じやあるまいという理由なき偏見があった。井上ひさしとなると、小説なら「手鎖心中」、コントなら「てんぷくトリオ」、芝居なら「葎原校」と、そのあたりでヤメていたのが原因である。

考えなおして出かけたのが岐阜の「はぐるま」。もっともこれにはいくつか情報も入ってきていて、はじめてのミュージカルでという意気込みや、演出が「血の婚礼」をものした汲田正子さんときいて気持が動いた。

小雨煙る四月十六日。会場は、例の、一九七三年八月の第二回東西合同演劇ゼミナールでモデル上演の会場となった産業会館。建物の周囲も十年前とそれほど変わっていない。陽春ならげんげの花が一めんに咲いていそう。そんな場所に、さすがははぐるまである。その日は、立見席まで出る満員の盛況。

「11びきのネコ」は井上ひさしらしからぬ健康な本である。飢えた野良ネコたちがちからをあわせて御馳走の宝庫、大きな魚をたかひとるまでの冒険ものがたりである。11びきの全ネコに過不足ない、見せ場、やり場が与えられていて、残らず、嬉しさに輝いている。

中でもリーダー格のちゃん太郎のなみ悟朗が光る。歌って踊れて、声質も中々チャイミングである。負けてはならじと、かって「ひしめきあう不毛の季節から」の昌夫役で会場をわかせた三島幸司、さすがにあの頃の若さの鮮度はうすれたが、面構えが出て来た。もう、こんな老け役が似合う年頃になったか、山口和紀がちゃん作老人で殿りをつとめている。にゃん十（南いくみ）とにゃん六（高島明）の踊りがいかにも滑らかなので、内輪をきくと踊りはプロ級の由。これ迄、骨格の渋味で見せてきた感じの青木茂、船渡治郎、宮嶋洋洋といった面々もこの踊りでは鍛えられたらしい。

ともあれ、熱っぽいアンサンブルで作品のメッセージは客席にとどき、鳴りやまぬアンコール拍手で幕が降りた。（桃）

嬉しい出逢い、哀しい出逢い

——「空を飛んだ鶏と銀色の松ボックリ」の作者からの報告——

可能 あらた

戯曲が「演劇会議」に掲載されて……

素晴らしい舞台を見て、改作

1月21日・22日の両日、青森の劇団「支木」創立20周年記念公演No.1「空を飛んだ鶏と銀色の松ボックリ」を作者として見せて頂き、種々心を動かされて、忘れぬ内に、演劇会議へのお礼かたがた一文を送る事にしました。

「演劇会議」No.48（81年9月）に「空を飛んだ鶏」を掲載いただいたから——

▽81年4月 劇団「どろ」五期生卒業公演。

▽81年夏 岡崎市商業高校演劇部公演。

▽81年11月 劇団「大阪」九期生卒業公演。

——そして今年に入ってから「支木」公演と他劇団の上演の機会に恵まれ、作者として沢山の発見があり、また、改作を進める上で多くの勉強をさせていただく事ができました。

前記の公演の内、劇団「どろ」と劇団「支木」は、公演前に稽古へ参加させて頂き、また本番前の舞台稽古とともに全ステージを見る機会に恵まれて、作者として大変うれしい場面に立ち合う事ができました。

劇団「どろ」公演は、保木政男氏の演出、林田鉄男氏の舞踊指導のもと、卒業生九人が踊り唄い、飛びはね、床をたたき、全身痣だらけになりながら躍動感に満ち満ちた汗と涙の舞台を創ってくれました。

劇団から応援に入った杉原まことさん演ずる管理人のお婆アさんが、ガラァーンとした鶏舎を掃除する様式的な表現から始まって、真っ暗な中、無声音の「シズム、沈む、陽が沈む」が徐々に有声音となって、一羽一羽飛

び降りて来て床をたたき、それが脱走の激しい舞踊に変わって行くファーストシーン。

またラストシーンでは、鶏舎に残された恋人役が空を見上げ、声を出さず、「ソオラアトオプウトオリ」と口の形だけで言い、そこへフワリと鶏の羽が天井から落ちて来てテーマ音楽、飛ぶ姿勢のストップモーションと、小さな思いつきと閃めきを丁寧に積み重ねた保木演出と卒業生の舞台は、ステージを重ねるごとに客席の一人一人に迫り、四月だというのにキャバー〇〇のアトリエはギューギューで熱気が一杯。最後には追加公演をする程制作にも力が入った公演で、「見に来て良かった」という観客の声に私の嬉しさも倍でした。

私は「どろ」公演に刺激されて改作を進め、ラストシーンはそっくり保木演出を付け加えてさせて頂き、それを「支木」公演の上演台本に引き継がせて頂いたのです。

幅広い観客の中にいて

「支木」公演は、藤原浩平氏の演出のもと、高木えいじ氏（音響）、中野健氏（舞監）と創立メンバーが両脇を固め、十年選手から一

年選手まで、マラソンに体を鍛え上げての本番でした。

零下七度。時折り吹雪く二日間でしたが、八・九才の小学生から、中学・高校生まで含めた幅広い観客を集めた公演となりました。——これまで小劇場が主体でしたから、キャバ五〇〇の劇場で、果して内容が伝わるのだろうか……それに子供には少しむずかしいのでは……という心配をよそに、それは感動あふれる舞台でした。

ネコ車を押して現われた空銀子さん演ずる管理人のお婆アさんが鶏舎に入ってザァザァーツと地ガスリの上を竹箒でく音とフルートの音楽が妙に感覚を触発し、学校帰りの工場現場に働くお婆さんをそのままつれて来たようなオーブニングでした。——初稿では重苦しかった前半部も、世界各国の鶏の鳴き方や犬の吠え方を折り込み、ギャグも入って笑わせながら、止り木へ必死に這うプロイラーいじめのシーン。そのさい中から、青森のプレスリーこと佐々木喜英雄君のロック調「コンピューターオン、ビコビコ、偏差値でてるぜ鶏」の歌と踊り。そこを一転して、プロイラーがトランポリンへ飛び降りブランコへ飛びついて逆さ飛行をはじめると拍手が起る。

中盤、「南の国には今でも空を飛ぶ鶏がいる」というプロイラーの語りでは場内水をうったような静けさの中、すすり上げる声も。そして野生へ帰るといふ願いが叶う神様との会話では、「ウォーツ」と叫ぶプロイラーの声にすすり上げる声が波うつ。……笑わせたり泣かせたりの一時間五〇分、ただ噓って寝て卵を産んでいた鶏たちが、空を飛ぶ鳥を志すプロセスが、鮮明にかつ丁寧に描いて仕舞った。

これは、作者的な思い入れの深すぎる主観的な評価なのでしょう。いや、多分、客観に近いと信じます。

ゼンコねえがら作らねが

鶏が空を飛ぶ……このシーンを舞踊にするかトランポリンにするか、それとも機械仕掛けにするか——演出者の頭の痛いところ。

「支木」の場合、舞踊も合せてトランポリンを使いました。買うと一台十五万円。プロイラー役の松山涉君の発案で何回か試作を重ね、自転車と自動車のチューブを百本編んで、市販のものよりバネが強く、かつ桁違いに格安のトランポリンを作ってしまったというの

です。それは若者のパワーでもあります。それは若者のパワーでもありません。アマ・プロ七百劇団のひしめく東京にあって、失敗に次ぐ失敗を重ねて、私自身も、当時劇団にいた若者に合せて書き進め、必死に冒険を仕掛けながら、「体を動かす全身」の演劇に辿りついたのがこの戯曲でもあります。観客の意識からかけはなれた言葉（セリフ）の劇ではなく、見る者の感覚や感性とどこで結び合うか、それが、演ずる者の全身を使い、舞踊的要素と音楽的要素を一体化した「叙事詩劇」だったのです。

60年代の半ばに演劇を学び、後半から劇団活動を始めて十五年、「今、何を、どのように変革の立場で……」と、思い悩まずに来たわけではありません。リアリズム演劇とは何か、それを自分の主体性でどう捉えるか、私の模索のプロセスでもあります。

北に南に新しい友が

「演劇会議」に掲載されて、神戸にも大阪にも青森にも少からぬ友人ができ、戯曲を書くという事の楽しさと喜びが私の中にひとつの広がりをもって捉えられるようになりました。それは同時に、あの場面はどうなるか、この場面はどう伝わるかと、作者一流の心配をドカーンと吹き飛ばされた時のカイクン／＼は、「セーラー服と機関銃」どころではありません。戯曲を通じて出逢った集団と人の「舞台」を通して、励まされ勇気づけられ、そしてちょっと「俺の本も捨てたもんじやない」との自惚れと自信も、やはり作者には必要なようです。これも初めての経験でした。

二、三の哀しい出逢い

こうした嬉しい「人と舞台」との出逢いと別に、まったくフカイな出逢い、哀しい出逢いもいくつかありました。

——開口一番から演出者の一方的な改作論議をぶつけられ、金がない話の後は五、六ステージで一万円という上演料の巧妙なかけ引き、出版社を知っているのだ、プロ劇団だのとヌカして、「やってやるからありがたいと思え」と言わんばかりの態度で、あぐくに約束はボカボカ破る。これは最悪でした。「資料は全部貸すから自分で思うように書きなさい」というのが私の彼に対する唯一の抵抗でした。

戯曲がなければ芝居が始まらない。なのにこの演出家先生の姿勢は、大なり小なり創造というものの過程をパスする風潮の現われのように思いました。

泣き事は申しませんが、劇作の仕事にはあらかじめテキストはありません、真っ白の原稿用紙に、辞書のア行から書き写して百枚になるまで何日かかるか試してごらんさい。

——ましてどんな駄作でも資料を集め、現場を取材して、24時間こもりつきりでも、最後に「幕」の一字を書き込むには一カ月二カ月の話ではありません。その間、月夜ばかりでも、女房の顔が毎日毎日「新妻の微笑」をうかべ

演劇変えるヤングパワー

それは若者のパワーでもあります。

「空を飛んだ鶏」は大半が若者の支持でレバにあがっているようです。「支木」公演の打ち上げ前に、藤原氏と話したのですが、「正直、こうなるとは思わなかった」と言いました。「ただ、若い人たちがやるというので、八ではVと取り組んだのだ」と言います。これは自慢でも何でもありません。アマ・プロ七百劇団のひしめく東京にあって、失敗に次ぐ失敗を重ねて、私自身も、当時劇団にいた若者に合せて書き進め、必死に冒険を仕掛けながら、「体を動かす全身」の演劇に辿りついたのがこの戯曲でもあります。観客の意識からかけはなれた言葉（セリフ）の劇ではなく、見る者の感覚や感性とどこで結び合うか、それが、演ずる者の全身を使い、舞踊的要素と音楽的要素を一体化した「叙事詩劇」だったのです。

ているわけではありません。月七万円の借家に子供が二人いて、一冊千何百円の本を彼女の給料日を当てにする身分ともなれば、これは、自分の書き進めている劇以上にドラマチックな心理劇に何場面か出演しながら、一向に幕の降りない真っ白の原稿用紙を見つめ、一行一句「演劇の種」「公演の設計図」を創り上げているのです。ペタランならともかく、私のような馳け出しの筆が遅い男の戯曲には、書かれていないセリフと書きが一作一作にあるのです。——そしてこれは、多分私だけの事ではありません。

演出家先生は沢山生れても、劇作家は、劇団と生活に狭み討ちにされ、その上移り変わる時代が見えなくなれば、書きかけの秀作にも「幕」は降りず、劇作家は生れも育ちもしない。未熟児のまま流産してしまうのです。

出逢い、そして再会

幸運にも、私の「空を飛んだ鶏……」は、この六月から七月にかけて舞踊集団「四方館」、劇団「螺旋線館」、「風浪舎」の三者合同によって、尼ヶ崎（ビッコロシアター）、大阪（オレンジルーム）、神戸（生田神社テント）と

9 ステージ巡演の計画が進んでいます。

「蝶線館」と演出の嶋田三朗氏とははじめの出逢いですが、演出舞踊の林田鉄男氏、制作の保木政男氏とは再会となります。「空を飛んだ鶏」が大人の芝居としてどこまで鑑賞に耐えられるか、戯曲の骨格に演出と演技がどんな肉と皮をつけてくれるのか……私にとっては嬉しい出逢いと再会が続いています。「演劇会議」が結んだ縁は、再会によってもう一つの広がりをもつ事になりそうです。

作者殺すにや刃物はいらぬ

私の場合、自分の作品を自分で演出して舞台に乗せ、それも東京という事もあって、演劇会議の萩坂さんにも直接舞台を見て頂く事ができ、運良く「演劇会議」に掲載されて、この一文に示したような出逢いを得る機会を与えられたのでした。

全国には、まだまだ自分の仲間や集団からさえ正しい評価を受けずに眠っている戯曲が沢山あるのではないだろうか。それも、上演されず、活字にもならず……。

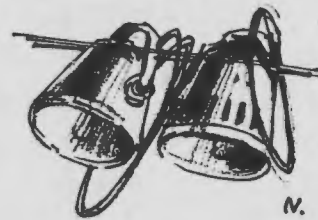
身近かな仲間や先輩、中途半端な専門家の熱心な批評、チェーホフやブレヒトなど大作

家を例に「演劇」とはこういうもの」という枠組に基づいた酷評——こうした批評が、時にはいやほとんどの場合、生れ出ようとする創作劇を流産させ、創作への熱情を冷やす最高の条件になってはいないでしょうか。

「空を飛んだ鶏」も、たった一人の劇作家を除いては、劇団の中でも、勉強会の中でも酷評され、一点の評価も与えられなかった作品でした。私はほとんど内外の批評を無視し、仲間を強引に巻き込んで、舞台でやってみせる事でのみ、記号(戯曲)と肉体(舞台形象)にとり組んで来たのでした。

演劇は、戯曲の完成度のみで観客の心を動かせるものではないでしょう。演技者の体の自由な表現、演出者の小さな思いつきと閃めきの積み重ね、集団の掛け算的アンサンブルとパネがなければ成功しないものです。——それを全て戯曲の完成度に求めているのは創作劇など生れるはずもなく、今日のオリジナルの貧困を越えようがありません。

「演劇の種」「公演の設計図」である戯曲を書く側の主体性と連帯がそろそろ必要に思えますし、また、これを観客に届ける演出者や演技者にも業をせず、自分の役割や課題を厳しく突きつめ、戯曲の未熟さを越えるパネ



がなくては、この時代を捉えた創作劇の展開はできないように思います。お礼かたがた、書き手の実情も一文添えさせていただきました。

劇評

劇団月曜会・試演「閃光の遺産」

藤沢 薫

試演と題されたこの公演は大分前から予告されていた。原爆を題材にした土屋清の二作目として注目されてきたのが、六年ぶりにやっと完成した。期待していたわれわれにとっては待ちに待った、劇団としては念願の上演である。しかも月曜会がこの公演で解散か再生かを決めるというおだやかならぬ話を聞くと観る方も力が入る。

これは三好徹の同名の推理小説の脚色である。筋書きを紹介するのは骨がおれるが、要約すると、——原爆投下から二十年経った一九六五年の広島、「僕は過去を発掘したい、なぜなら血の匂いにもれた過去に僕の知らぬ真実があるような気がしてならないから。MO生」なる新聞投書の記事が発端となり、投書の主は原爆の時生き別れになった自分の息子だという資産家が現れ、同年代の三名の原爆孤児・大滝光雄・大竹光夫・倉高光男が

探し出されるが、一人は何者かによって殺され、もう一人は加害者に仕立てられるという複雑に入りこんだ殺人事件である。結局、資産家の息子探しというのはつくり話で、実は原爆のどさくさに他人の土地を取得して十数億の財をせしめた被爆者が、真相がバレることを恐れて、土地所有権が法律上消滅する二十年の期限までに、当時五才だった土地所有者の息子とおぼしき二人の青年を同時に消してしまおうとする計画的犯罪であったことが解明される。この話にはミステリーを謎解きしていく面白さはない。

「推理小説は謎解きの文学というより探求の文学である。」というのは原作者三好徹の言葉であるが、からみからんだ糸が見事に解きはぐされていく面白さより、考古学者のように丹念に見えない部分を探り出していく興味であり劇化には向いていない。脚色者の

土屋はどこに引かれたのか。

舞台を観ているうちにそれは領けた。「六十年代七十年代のわれわれは、忘れることで地獄を過去に押しやってしまうことで、列島繁栄ブームのおこぼれにあずかってきた」と劇中のセリフにあるが、事件にかかわりのある人物のことがらが明るみに出されるにつれて、公園や食堂、美容院からトルコまで「平和」の文字で溢れている「虚像の街」広島が仮面がひっぱがされて、とくに埋ってしまった筈の二十年の才月が逆転して、否応なく現代に生きる(広島で生きると云った方がいか)われわれの前に容赦なくさらけ出される。事件を解明する毎朝新聞の社会部記者海野(原作では奥信所調査員)が広島市民でなく、わざわざ大阪出身に設定を変えているのも脚色者のこのような視点によるのだろう。

これは、見真講堂につくられた舞台空間、客席に張り出されたもう一つの舞台が、奥に向って四段にせり上り正面奥の下から天空に向って突き上げ雲状に客席天井にまでつく天幕が伸び、左右の片隅に瓦礫を配置した岡島茂夫の装置にも、如実に示されていた。それは現代に居ながら二十年前の地獄の断片が永久に付着した様を見るようであった。

狂歌なまでに美しい昔景の中での殺しがい
きなりはじまり、舞台は急テンポで展開して
いく、冒頭、「地獄の中で生きた者が地獄を
見たとは云えない」という越村神父（吉沢勝）
に記者海野（松浦信介）が、犯人の「澄本菊
平（小倉茂）」は、広島証言者を消してしま
うことで平和と繁栄の広島を得ようとした、
われわれは人殺しこそしなかったが虚像の街
広島をつくるのに大いに加担したんだ」とい
う意味のことを云わせているが、過去を語り
たくないという神父も、資産家澄本からの寄
付金で原爆孤児を育てるという苦悩を背おい
ながら過去を消し去ろうとしている。

神父の平和教会の同人雑誌に投書と同じ内
容の文章を書いている大滝光雄（篠原五郎）、
澄本の経営するパチンコ店の求人募集を見て
現れた大竹光夫（大川博志）、澄本の養女加
奈子（井之上夏美）の知り合いで、昔大竹光
男と名乗っていたという倉高光男（木村恵文）、
原爆孤児であったこの三人の青年たちの過
去が次第に明らかになっていく中で、観客は
忘れ去ろうとしていた広島の暗い過去と対面
してゆくことになる。この二〇年の才月を解
明する記者海野の行為は、真実を究明するジ

ャーナリストであると同時に、歴史の証言者
を発掘する行為でもある。だが孤児たちの過
去は依然舊の彼方にかすんでつかみ難い。ど
こで生まれ、誰と暮し、どんな名前かわか
らない無数の孤児たち、それらの影が時折り、
舞台空間を静かに横切る。澄本の養女（実は
実子）可奈子（井之上夏美）が出生の真実を
怖れ、大滝光雄の姉がわりとなってきた芳枝
（松浦優美子）が過去が明るみに出されるの
を必死で防ごうとする姿は、今日の広島の実
と重なって見えて来る。犯人捜しに執拗で
周到な赤木警部（日高敏之）も、澄本の秘密
に計算された罠にはまるが、歴史の真実を見
きめようと精根かたむけて追求する海野が
事件解決に貢献することになる。

終幕警察に拘引される前澄本が海野に向っ
て云う「あんたは広島の人じゃないからわか
るまい（中略）こんな気持はピカに会うたも
んにしかわかる筈がない」、それに対して海
野の言葉が叩きつけるように返ってくる。「わ
からんです。そういう広島人の根性なんぞ、
わかりとうもないワ。なにもかも都合の悪い
ことは原爆のせいにして、原爆をダシにした
ものの云い方は我慢できんワ。原爆原爆とい
う、原子爆弾は広島に落とされたんですか？

日本に落とされたんじゃないんですか！ 世
界に落とされたんじゃないんですか！」。一
瞬息をのんだように客席の空気が凝縮した時
会場は真赤なきのこ雲に包まれ「——地上は
殺戮の血で濡らされ神々は地上を見棄て給う
た」という「原爆の子」の序文が朗読されて
終る。この終幕に全て集約されている。

これは単なる推理劇でもドキュメントでも
ない、いわば広島歴史の真実を掘りおこし
追求するドラマである。海野をこれほどまで
突き動かしたのは、いまだに自分の過去を
知ることのできない無数の原爆孤児たちの声
であり、闇の中に隠蔽されたえたいの知れな
い被害者たちの戦後である。孤児たちを救う
ことに聖職者としての生涯をかけてきた神父
も現実の汚濁に染まらざるを得ない矛盾をか
ゝえた悲劇的人間として象徴的である。

このように歴史的現実を色濃く反映しなが
ら、形は事実を説明してゆくように坦々と進
行する。時々舞踊風な抽象的表現が加わるが、
事実を究明していく叙事的な描き方として効
果をあげていた。例えば澄本が大竹光夫が自
分の息子であることを証明するための嘘の証
言をする場面では、語っている前面に黒子風

の人物が情事をシンプルに表現したり、原爆
の子の群像が舞台全面に動いたりしたが、演
技指導に当った舞踊家神沢和夫の影響だろう。
しかし多場面の舞台空間の設定がやゝ雑で、
高さで区切られた二重舞台を充分生かしき
ていないのが気になった。演技は時折、思い
が先走ってヒステリックに高揚するが、全体
に素朴で好感がもてた。大事なところでセリ
フが日常的に流れなければもっと内容が鮮明
になったのにと惜しまれる。

なにより印象的であったのは、舞台に出て
いる半数が新しい顔であったことだ。しか

劇評

描き切れなかったと日常性とは…
劇団京芸「肉でもなく魚でもなく」を観て

菊川 徳之助

（京都演劇教室）

演劇は、舞台上に表現されたものがすべてで
あることは、当然なことであり、そして、批
評行為は、その舞台を対象に論ずべきもので
あるが、上演される前に、色々な期待をいだ
かされたり、期待をいだきたくなるような現
象があることは、なかなかいいものである。

劇団京芸公演「肉でもなく魚でもなく」(F
・X・クレック作、小松徹演出)は、何故か
上演される前からこちらに期待をもたせてく
れた。そしてこのことは、特に前宣伝が派手
であったとか、巧みな宣伝法が使われていた
わけではなかったために(むしろ熱心に宣伝

も主人公の海野公一を演じた松浦信介は、新
人とは思えない説得力のある演技で好演した。
こうなると脇にまわった劇団のベテランが余
裕さえ見せて新鮮に見えてくるから不思議だ。
土屋は公演パンフの口上で「いったん解散し
ても出直すしかない」と云っているが、今
回の若返った舞台を素直に喜ぶたい。月曜会
は立派に再生したと見た。(1月26日所見)

x

x

は行われていたが)いい意味で心にひっか
かものがあった。この現象は、京芸公演がひ
とつの意義をもっていたことを示しているよ
うに思えた。それ故に、上演前の期待感がど
のような中身をもっていたのか、このことを
探っておくことが必要な作業であるような気
がする。

昨年の大阪、京都周辺の地元新劇状況には、
突出した現象があった。それは、大阪阪急フ
ァイブオレンジルームと情報誌プレイガイド
ジャーナル社の企画による、若い世代のハエ
ンターテイメント演劇Vの隆盛であった。ノ
ミネートされた学生四劇団が競い合った「オ
レンジ演劇祭」、スポンサー付きで話題とな
った「キャビン85小劇場」(年四劇団公演)
四劇団一挙競演「熱海殺人事件」、「阿Q正
伝」、「北国の空」のプロデュース公演、
などなどである。そして、これらの公演は、
着実に多くの若い観客をひきつけていった。
既に今年に入って第二回オレンジ演劇祭が催
され、多くの観客を獲得して終了し、今年も
エンターテイメント演劇はひた走る感さえあ
る。

大阪には、新劇団協議会による「大阪新劇

フェスティバル”があり、京都には、京都府文化芸術劇場がある。だが、「新劇」の衰退の時代を示すごとく、これらは静かな出来事となっている。今年の始めこの状況に対して発言をしたことがある。少し長い引用させてもらおう。

“なみいるこれらの企画（オレンジとブガジャ）の中で、昨年のうねりとなったのは、やはりハ笑いVを中心とした、華やかな、しなやかな、軽やかな感性をもった、若い世代のエンターテイメント演劇Vであつたろう。エンターテイメント演劇の成果は、おしよせる観客数に如実にあらわれ、関西の新しい演劇状況として、活性化に大きな役割を果たすこととなった。そしてこの現象は、一過性のものという危惧をもちながら、非常にうれし

い思いを起こさせてくれた。
だが、このうれしい思いの裏側に、歯ざりするような、もうひとつの思いが、残っていた。それは、エンターテイメント演劇のみの波及を許しておかないはずの「新劇」——社会派（リアリズム派）演劇の、奮い立ちがなかったことに対してである。（中略）社会派演劇が、苦戦をしいられることは、真劇（新劇）を拒否する今日の状況を解すれば、

やむをえないことと納得も出来よう。だが、少なくとも、エンターテイメント演劇にハ対置Vする発想を、社会派演劇がもつべきではなかったか。今年は、巻き返しの逆転舞台の連続を願う。”（京都新聞）

少し、というよりかなり図式的な発言であるが、私達の周辺に対する奇立ちの表現であつた。そして、京芸公演は、このような状況の前に登場した。しかも、その作品が、技術進歩による労働疎外と家庭問題をクロスさせながら描いたリアリティックな作品と聞けば、エンターテイメント演劇に對置する舞台を期待する心境となつた。

さらに、クレツツの「肉でもなく魚でもなく」という作品は、今日において注目すべきハ題材Vをあつかひ、注目すべきハ描き方Vをしているように思われた。コンピュータによる労働疎外という社会問題をひとつのファクターに、そして、家庭における夫婦の問題をもうひとつのファクターに選び、それを交錯させる着眼点、さらに、最も関心をもたられるのは、今日の観客が、最も舞台と回路をもちやす「家庭」を舞台に選んでいることである。

「演劇会議」五二号において、大橋喜一氏が、リアリズム派作家が書くのに苦しんでいる状況を提示されていた。この文章は多くのことを考えさせてくれた。そして問いたいこともいろいろあつた。リアリズム派演劇が、観客に真の感動を与える前提条件が、ハ現実の反映Vであるとすれば、現代人が現実における対象物とリアリティックな関係を持てなくなつたという状況、つまり、ドラマにおける葛藤が、真実な関係として成立しないところにあるということが大きな問題になるのではないか。つかこうへいや竹内統一郎や野田秀樹が、虚像や幻影や言葉遊びに生きる人間を描くのは、人間が対象物に対して、リアルな関係を失つたために出て来た人間像であらう。（今年の岸田戯曲賞選評における別役氏の野田評にあつた「あらゆる哲学はクイズにすぎない」という野田作品への言葉が印象的であつた）

さすれば、現実と真実な関係において、人間像を追求するリアリズム派演劇の作品は、今日どのように構築されるのであろうか。当然リアリティックな関係の成立する極面を探索していかなければならないことになるであらうが、まず、リアリティックな関係の喪失

した人間像を認識する必要があるのではないか。それ故に、作者クレツツが設定した「家庭の日常」は、社会性をかなりの部分喪失し、現実感触をハ私的領域Vにとじこめていっている私達の感覚に、通底する描写方法であるといえよう。

コンピュータという題材も、色々な角度から、今日私達の関心を集めている。理論的には、人間破壊に最終的に到達するであろうこの怪物についての理解は出来るものの、職場における日常において、目の前につき出されるコンピュータは、必ずしも拒否すべきものとして私達に結実しないのである。目前の賃金を安定的に獲得していくための発想は、コンピュータを積極的に導入する発想にも転換して行くのである。この意識は結局、今日の人間のありように問題を収束していくであろうが、個人の意識レベルではそう単純ではないようである。それ故、クレツツという作家が、夫婦という家庭生活とその中に入り込んでくるであろうコンピュータ社会をどのように描くか、期待のもたれるところであつた。

京芸公演は、大阪、京都における新劇状況に対して、作品の表現方法に対して、その題

材に対して、の期待感であつたようだ。そして、京芸が最近内包している、形と音声だけのセリフ、それは、スピード感あふれる、現代的で、表現的（美的）であると誤解出来る、しかし決して観客に内容の伝わらないセリフ。この現象を、内実を大切に小松徹演出が、それらの良さは良さとして残しながら、どのように軌道修正するかという期待感も含めてふくれあがつたものであつた。

さて、前置きがいささか長くなりすぎたが、上演舞台について語らねばならぬだろう。

「肉でもなく魚でもなく」という作品を、翻訳者の言葉を借りて紹介すれば、「ドラマは、楽天的ないちぎさをもった職人エドガーと、理性的で試算の働く組合活動家ヘルマンを軸に、自立心に富み、仕事に生きがいを感じるエドガーの妻エミーと、ヘルマンの妻で三人目の子供を欲する主婦ヘルガをからませながら進行し、企業合併、職場の合理化による配置転換という問題を、四人の登場人物で、しかも職場ではなく、家庭を通してあらわす」とする「作品である。舞台化の骨格は、三幕二〇場という比較的短いシーンの積み重ねられた構成、四人だけの登場人物、しかも夫

婦の対話を中心に家庭と労働を描き、セリフは方言（大阪弁）を意図的に使われるといった特徴をもっていた。

幕が開くと、夫婦のベッドシーンである。ベッドシーンといつても、セックスが直接描かれるわけではない。むしろ、きわどい言葉もあるが、二組の夫婦の家庭が既にチグハグな要素のあることを示す。夫エドガー（藤沢薫）が、「あそこがおっきいぞ、今日やる日」という誘いも、仕事オンリーの妻エミー（松下由紀子）は簡単に拒否する。ヘルガ（早見栄子）が、「こっちきて」と夫ヘルマン（長畑豊）をさそうが、夫は組合の話ばかりするだけである。日常性の中に存在する亀裂を、巧みに描いた幕開きはなかなかいいスタートであつた。だが、京芸のベテラン、藤沢と早見が一組の夫婦、中堅の長畑、松下がもう一組の夫婦役と思つたが、演出者は、ベテランと中堅をかみあわせ、新しい可能性を考えたキャスティングであつた。しかし、このカップルの対話は、最後まで、こちらの感覚に異和感を残した。

スポーツクラブで空手を練習しながら、男二人がかわす、給料の差や会社のあり方についての対話シーンは、なかなかおもしろい表

現になっていた。ここには、セリフと身振り
がうまく存在したためと思われる。だが、全
体を通してセリフが突出し、身振り表現が不
足していた。作者が見据えた、この作品の特
徴でもある、日常のリアルな描写が追い求め
られていないのである。簡単なことでは、女
性がベッドに入る前の（ベッドに入っている
時でもあるが）日常的な身振り感覚が役者に
見えない。職業婦人なら化粧感覚があるであ
ろうし、主婦なら子供たちの洗たくもの感覚
があるであろう。舞台の夫婦は、ベッドにて
台本のセリフを語るのみである。このことは、
クレット作品が、八家庭Vを中心に描いた、
最も重要な構造が抜け落ちる結果を招き、全
体的に日常性が描出されず、セリフに示され
る社会問題に重点がいていたといえよう。

（したがって、この作者の特徴でもある「長
い沈黙」、間が生かされない）そして、この
重点のおき方は、セリフの抑揚にも派生して
いた。それは、翻訳者が選びとった大阪弁を
役者は、関西言葉のニュアンスを重視してい
なかったということである。関西弁は、ハン
ナリしているという言葉があるごとく、やわ
らかな文体である。社会問題に重点をおいた
思考は、言葉を硬質にし、硬質に表現された

大阪弁からは、作者が意図する、「労働、土
地、社会を表現する方言」、ということには
ならなかったようだ。

セリフの問題では、小松演出になっても、
京芸の役者は、スピード感はあるが、セリフ
の意味も、人物の心の動きも、役者の感情を
も殺す、前舞台の名残りの物言いの傾向であ
った。このことは、意外な結果といえよう。
小松演出のかつての舞台を知っている者にと
っては、理解出来ないことであつた。（あと
で聞いたことであるが、小松氏は途中病氣さ
れたとのことであつた。）

少しだけなら感想を書いてきたが、この
作品が種々のおもしろさをもちながら、舞台
化に今一つ共感出来なかったのは、四人の登
場人物というこの作品の特質が、生かしてい
なかったためと思われる。単純にいってしま
えば、この作品は、八小劇場Vの空間を必要
とするものではなかったろうか。京都府立芸
術会館という中型ホールで、舞台全面を使う
構成の装置、そして舞台全面に照射する照明
は、凝縮した短いシーンを拡散させていきも
した。クレットの芝居は、中型ホールでは、
クローズアップが必要なのではなかったらう
か。このように書けば上演のみに責任があつ

たようであるが、クレットの戯曲自身が、シ
ーン、シーンの積み重ね形式がアンバランス
で、短い場面があるかと思えば、突然やたら
長いシーンがあつて、客席のリズムを混乱さ
せた。

「肉でもなく魚でもなく」とは、「中途半
端」、「どっちつかず」という意味だそうで
ある。作者は、コンピューターという現代の
問題をあつたが、男二人、女二人のタイ
プは、かなり類型的でもある。その類型を類
型としてつきぬける形象にこそ、クレットの
新自然主義があるのかもしれない。「日常性
演劇」や「新自然主義」の方法が、今日の人
間の中途半端さをいかに描くか、さらにこれ
らの作品を見たいものである。作品の内容を
探求する前に制限枚数となつた。討論すべ
きを沢山残した、京芸のこの公演の意義を
認めたい。

☆

☆

劇 評

本邦初演の大阪弁ドイツ現代劇

—「肉でもなく魚でもなく」（京芸）を観て—

丸子 礼 二

題名の意味は、「どっちつかず」とか「中
途半端」という意味だそうである。訳者の市
川明、演出の小松徹は（そして私も）昨春の
D・D・R（東ドイツ）観劇交流団に参加し
た仲間で、それがこういうユニークな企画を
生むのも一つの成果だろう。

作者F・K・クレットは三十七才、西独で
鋭い社会批判と巧妙な劇作法で知られ、技術
の進歩による労働の疎外をあつたこの作
品は81年の年間ベスト戯曲といわれている。

印刷工場に働く熟練工のエドガー（藤沢薫）
と組合活動家ヘルマン（長畑豊）、エドガー
の妻エミ（松下由紀子）は自分の店を持つこ
とが目標で、ヘルマンの妻ヘルガ（早見栄子）
は三人目を望むかどうかで夫と対立する。
登場人物はこの四人だけ。京芸のベテラン役
者四人のからみは、舞台の流れそのものに一
味つけくわえた面白味を見せていた。作者自

身強いバイエルン訛りで書き、「その地方
弁でやってけっこう」と云っているようで一
九八〇年のミュンヘンでなく現代の大阪あた
りのことだとしても、あまり違和感はなかつ
た。

ベテランの植字工、エドガーが、組合活動
で他の職場を追われて来た新参者のヘルマン
に、飽くことのない説教をくりかえし、ヘル
マンも斗争の意義をかざしてやり返す。延々
たる議論だが、場の設定が面白い。家族ぐる
みのつきあいをしながら、居間で熱帯魚の水
槽を見せびらかし、「魚も理性がないと喰い
あいしよる」と皮肉るエドガーの弁舌、柔道
衣をつけた華法の練習と並行する論争。それ
ぞれの妻君とのやりあいもからんであきさ
せない。

二幕に入り、一転して、彼等の勤める工場

が、大企業に合併され、コンピューター写植
に切かえられる。再教育センターでベッドを
並べた室内での会話は、二人の立場の逆転を
示す。「二週間の研修でテレビを見ながらポ
タンを押すことを覚えれば出来上り、こんな
ものは仕事じゃない」と鉛の活字をなつか
しむエドガーに対し、技術の進歩をふりかざ
すヘルマン……二人の論争は機械への憎しみ
から、自然の中で自由に生きる人間へのロマ
ンにいたるエドガー役の藤沢薫（やっぱり反
抗的、空想的な語りの方が断然生き生きして
いる）の弁舌の妙もあつて圧巻であつた。

遂に職場をなげすめるエドガーに対し妻エ
ミは自分の店を持つことになり、そっちに夢
中。ヘルマンの妻ヘルガはとうとう三人目を
生むことになり大きなお腹をしている。

ルンペンとなったエドガーは妻の金で生き
る恥から、夜中にこっそり冷蔵庫のものを漁
ったりして妻と大げんか、家出の前に、妻の
大切にしている熊のぬいぐるみの股間にドリ
ルで穴をあけ、大根をつき刺し、その先をぶ
った切つて、ケチャップで血みどろにするこ
う象徴的イタズラに及ぶ。先に出了、水槽
中の熱帯魚に閉じこめられた人々を意味させ
ることといい、日常性から象徴性への流れが

チラチラとあらわれて来る。

エドガーの退職は、新しい職場に根づく為
必死になっている組合員仲間への裏切りであ
るとして、頼って来たエドガーを冷く追い出
すヘルマン。彼に対しヘルマンは「あなたは人
間のために死ぬうとしているのに泣いている
あなたの友だちを家から追い払うのね」とき
びしく非難する。

そして劇の流れは象徴の世界へ入り込む、
霧か煙かたような世界で二人きりのエドガー
とヘルマン。エドガーは「水の中に自由を求
めて旅出つ」ため肌着一枚、ヘルマンは何と
「やつらおれの腹の中に一杯詰めこみやがっ
た」と太鼓腹であられ、尻の痛みに苦しみ
ながらガスを音高くメロディーつきで放ちつ
づける。のたうちまわるヘルマンと沖へむけ
て歩むエドガーの世界がそのまま女性二人が
豊富な食料を並べた台所に変わり、床のたう
つヘルマンと「凍えて」帰って来る肌着姿の
エドガーは食事をめぐんでもらう。

店を持ったエミと子供を腹に持つヘルガー
二人の女性の泰然たる姿と、あわれな二人の
野郎を呈示したまま、幕は降りてしまう。一
かみさんとコンピュータとどちらが男でも
をより疎外したかどうか観る者の判断にま

かされるわけである。

作者は人間の二面をくっきりと分け、コン
トラスト、又コントラストで描いて見せる。
日本人ではできない徹底ぶりのコントラスト
である。忠実と造反、がんと柔軟性、中年
と若年、自立と母性、孤独と連帯……読む者
にとっては定めしきりした作品であろう。

しかし、演じるのは生身の役者である。一
面化を徹底して描かれては形象に困ってしま
う。とられる方法は二つ。断固として、自分
の役づくりを通すか……藤沢薫の役者の狡猾
は強気の裏に弱気、我ままに見せて愛情ゆた
かと、一面の表現のカゲに反対の心情を散見
させて厚みのある役づくりを見せていた。反
面一つの性格の極を表現するという任務からは
どうしてもズレを生じ、ボケて見えて来る。

長畑豊は脚本の方式に忠実に組合活動家の一
面機械文明派の一面を強くえがく反面それ
だけ実在感はずれて来る。いや、この二方
向とも、この脚本の場合も徹し切れるものじ
やないだろう。とくに日本の役者の場合はそ
うだと思ふ。大阪弁は日本人臭さを強め、舞
台そのものを「肉でもなく魚でもなく」する
方へ働らいたのだと思ふ。見ていて、セリフ

が面白いわりに、なんとなくもう一つびった
り来ないなと感じ、乗り切れなかった理由を
私なりに考えて見たのが以上の理屈である。
そう苦勞させておいて、象徴的場面へ持ちこま
れるのだから、後者の適応は大変だったろう。
しかしこの煙の中のような場面は、それまで
必死にセリフを追っかけていた私なんかには、
何となくフィードバックでわかって、楽な場面
だった。

ところで、客席には、大学の先生のような
年令と人品の方々や、年はいっているが知性
豊かなような婦人が割に多く、平均年令が高い
ようだった。ドイツ作家の本邦初演とベテラ
ンの演技を興味深そうに味わいながら、舞台
の出来に対してはかなり点の辛そうな観客で
ある。やはり京都だなと感じさせられた。こ
ういう客席に期待される水準を示さねばなら
ない京芸の方も、なかなか大変だなあと思
い、羨しくも感じた……。

劇評

劇団阿波っ子の更たな前進のために

—「おおつ」もりに寄せて—

三宅修

(徳島市民劇場事務局長)

「あなたは、心から真実を語れる友を、お
もちですか？」と問いかけつつ、友情や連帯、
人間愛を芯にすえた「劇団阿波っ子」の地道
な創造姿勢が、僕は大好きだ。他人への思い
やり、やさしさを喪失させられている時代だ
からこそ……。人間である限り、どこかで
それを求めているからこそ「E・T」や「気
くばりのすすめ」に人は群らがるのだろう。

この徳島でも、「人間らしさ」や「心のふ
れあい」などを、「ダサイ」という一言で切
り捨ててしまう風潮がある。スマートで、合
理的で、感覚的でといったことを、ややもす
ると「かっこよく」思い込む人がある。

そんな流れに抗して、一石を投じようとし
る「劇団阿波っ子」の志は大きい。だから、
やはり「阿波っ子」の真摯な若者らしさは、
樋口一葉の作品にピッタリと重なると思う。
貧しさに苦しむ庶民、その上にのしかかる

不条理な社会、それに対する静かな怒り、そ
こから生まれ出るたぐいなきやさしさが、情
緒的にドラマ性を持って迫ってくるのが「大
つごもり」だ。

昨年暮れの劇団阿波っ子第一回本公演、「お
おつごもり」には、団員の意気込みが実り、
キャバ八〇〇名のホールは満員に近い入りで
あった。十数回に及ぶ慰問公演などで力を蓄
えてきたとはいえ、果して、樋口一葉の世
界を創り出せるか？ 若い阿波っ子達が、ど
う「おおつごもり」の日を生きるか？ 誰も
が（おそらく当人たちも）小さくない不安を
持っていたことだろう。観終った後、「思っ
たよりよかった」という声が、圧倒的に多か
ったことでも、それは明らかだ。上演中も、
観客の眼は暖かかった。好意的に見守ってい
るという雰囲気を感じられた。プロの舞台を、
比較的観慣れている市民劇場の会員たちにも、

新鮮な感動を与えてくれた。後味がとてもさ
わやかだった。それは、アマチュア劇団とし
て一定水準の舞台に仕上がっていたことがある
のだろう。稽古もよくやられており、何より
団員一人一人の熱い思いが強く伝わってきた
ことにもあるのだろう。勿論、初めに書いた
樋口一葉の世界が、言うことないほど充分に
展開しえたとは言えないのだが……。内容を
知っていてもなお、観る者をハラハラさせな
がら最後まで引く張ってゆく、そんな迫力に
はやはり欠けていた。好演したみね（山中英
美）をはじめ、他の役も、よく演出（斎藤さ
とし）が各人のキャラクターをつかみ、うま
く配役していたのだが、まだまだ層の薄さを
カバーしきれなかった。順調に育っていると
はいえ、助走期のアマ劇団にとってやむをえ
ないことと思う。蓄積の問題といえるのだ。
舞台のつくり（装置・衣裳など）は、限ら
れた予算と人手の中でとてもよくできていた
と思うが、演技の交流（切り結び）という点
での課題はまだ大きい。たとえば、みねが切
羽つまって、手文庫の中から、五十円を抜き
とる場面。石之助（黒崎弘志）がうたたねを
しているのだが、二人とも、互いに相手を意
識の外においていなかったか？ 終幕へつなぐ

劇評

奥羽ブロック観劇報告

— 82年11月—83年1月 支木、黒石、レオの上演から—

藤村 歩 (劇団弘演)

重要なシーンだが、淡々としすぎて、残念ながら「淡っ子」の芝居になり、細かい眼が、ゆきとどいていない感があつた。
最も残念だったのが幕の多用。舞台上に素直に入っていくとする観客と舞台を結ぶ緊張の糸を緩め、たびたび感情の流れをさえぎる結果になった。いま改めてふり返ってみると、残念だったことや、ゆきとどかなかつたこともいくつか浮かんで来る。しかし、幕が下りた時、舞台上にひき込まれ、マブタを押えていた人が少なくなかつたことも、また事実だ。いろんな弱点や限界を感じさせながらも、それは今回の公演のもつ意味(劇団阿波っ子にとつても、徳島の演劇文化にとつても貴重な成果)を、いささかも減殺するものではない。僕はあえて、曲解を恐れずに大成功だったと言っておこう。まじめな「阿波っ子」たちの更なる前進に期待を込めて……。

奥羽ブロックの昨年11月から今年1月までの活動を報告します。

ブロック五劇団は同一県内にあるとは言え、全ての劇団を観劇することは難しいことで、今回も八戸のやませは見逃してしまいました。やませの舞台は「看護婦のオヤジ頑張る」以来八戸市民劇場の例会として取り上げられ、今回の公演も八戸ばかりではなく、五戸でも市民劇場の会員をまきこんで成功しています。上演は次の通りです。

△劇団やませV11月6日「海村」(砥谷伸夫作・佐々木洋二演出)「毒きのこ」(飯沢匡作・山沢邦郎演出)八戸市民館、28日五戸公演。ステージ。

△劇団弘演V11月9日・10日「津川武一作」(農婦)より農婦(矢作京介台本・飯田信之演出)弘前市民会館2ステージ。14日五所川原市民文化会館1ステージ。

△黒石演劇研究会V12月5日「勲章の川」へ本田英郎作・中辻鉄郎演出)黒石市民文化会館2ステージ。

△劇団レオV12月11日「さかし弟」「新・ももくり物語」(後藤志げお作・演出)五所川原市民文化会館2ステージ。

△劇団支木V1月20日・21日「空を飛んだ鶏」と銀色の松ボックリ」(可能あらた作・藤原浩平演出)青森市民文化ホール3ステージ。

「空を飛んだ鶏と銀色の松ボックリ」(支木)20周年をむかえた記念公演No.1のこの舞台は、昨夏ゼミの事務局としての大奮闘ぶりからみられる通りの「団結力」と「誠実さ」を力一杯発揮した優れた舞台だった。団員の体あたりの演技から一人一人の生き方の真剣

さをうけとめたのは私ばかりではないだろう。舞台の成果におしめない拍手を送りたい。

鶏舎から脱走した一羽のブロイラー(松山渉)が、卵を産み落とすだけの毎日を送る白色レグホンに「可能性の空間にむかって翼をはばたく」よう目覚めさせる。大空と大地のものとでの野性の生活を夢見て、鶏は「飛ぶ」ことを学ぶ。舞台は役者の動きを十分に考慮してジャングルジム・トランポリン、空中ブランコで簡潔にまとめあげられている(装置/桜庭聡)。そこで繰返される訓練。しかし飛べた鶏はいない。疲れ果てた鶏に希望を与えるのは「銀色の松ボックリ」だ。——限りある命の美しき花を自ら咲せようと志し励む者の願いは必ず叶えられる。努力もむなしく飛びたつたのはブロイラーとチビ(福田啓子)だけだった。「トリハソラトブ」と口の動きだけで表現された鶏の叫びが心を打つ。決して絶望しない強い主張がみなぎっている演出である。

私の疑問は脚本の領域になると思うが、「銀色の松ボックリ」は一体何であろう。韓国の「狂った鳥」をもとにして書かれたというこの脚本で、あるいは日本の社会に置きかえて私達に「飛ぶ」勇氣と力を授けるものは何だ

ろう。寓意劇であっても、いや寓意劇だからこそはつきりと見すえたい。「神」であってはないのだ。

しかし、外的な作用ではなく、自らの力を強固に蓄積していくことによって現実から飛翔するのだという支木の意志がこの舞台を見事に成功させている。それは、観客が思いつまるほどの肉体を駆使した訓練、飛べずに残された鶏の声なく叫ぶ瞳に確実に表現されている。——飛べ飛べ飛んでみるあの空、鶏の歴史を変えてみるという歌詞の通り、決してペシステイックになっていないのが、支木の舞台である。だからこそ、高校生・中学生をも感動させたと思う。「夢をみて、夢をみつづけて、いつか必ず人間になるぞと念じながら、元氣を出して、必ずみんなで飛べるんだと自分をかりたてている」(バンフレット)という演出の藤原浩平氏の思いは、一人の落ちこぼれもなく劇団員に伝わって、すばらしいアンサンブルを創り出した。

残念なことは音楽である。音楽(三橋修一)は外部の協力だが、旋律もリズムも単調すぎる。支木の舞台の主張を少くも背負っていないものだった。訓練の最中の曲を歌謡曲の替歌で処理するのは全く安易である。

セリフのテンポ・呼吸はやはり今一歩であつたろう。幕あきのセリフがわからない、またどう言っているのかわからないという疑問を残したままの役者もいて、充分消化されているとは言えない。しかし、鶏の個性は、団員の持ち味・性格を理解した演出のキャストイングによってよく表われていた。メイクは凝りすぎて、かえってじゃまになった。

舎長の野宮えり子は大ベテランで、安定感があつたし、佐々木喜美雄(鶏1)は器用ではないが好感が持てた、大柄な身体は貴重。中堅の松山渉・福田啓子はこれを期にどんどん異なるキャラクターに挑戦していつてほしいと思う。

創立メンバーの藤原、中野、高木の三氏がスクラムを組んで、増えつづける若い劇団員の中心にどっかりと居る。だからこそ、このような見事なアンサンブルを生み出したのであろう。公演の成功おめでとう。

「勲章の川」(黒石劇研)

秋田雨雀の生地で、生誕百年記念と黒石市民会館開館記念の看板を背負って、しかも「勲章の川」、大いなる挑戦である。

「劇研在籍二十年の私自身の総括として：(略)……単に戦争を告発するだけでなく、先生が生徒に語りかけ生徒達が触発されて大人の戦争責任を問うところに、今後の教育の方向性と今日の演劇創造の視点の一致をみて」と演出の中辻鉄雄氏が上演意図をのべている。

花岡事件そのものを描ききることより、「戦争はカッコいい、ゾクゾクする」という浩二(杉山隆一)の真実を追及する姿勢をもつまでの人間的变化に主眼点がおかれた舞台であり、黒石市で上演されるのにふさわしい芝居となったと思う。

杉山氏は眼をみはる奮闘。実際の高校生や高校を卒業したばかりの役者より、十歳も若がえったであろう杉山氏のほうが存在感があった。浩二の専断の「オドリック(父さん)」という叫びは観客の心をとらえた。同様に庄司先生(加賀谷治)も気合いの入ったよい演技だった。ただ行動線がとぎれがちになるのは役づくりの問題もあるのだが、舞台装置芳賀誠治)とその転換にも大きな問題があったためであろう。装置は大きすぎず無駄が多い。効果(沢広康)もいろいろな音をとりにませず一貫していない。

長年にわたる市民運動の成果で完成したホ

ールである。劇研ばかりではなく、ホールを使いこなしていくことは私たちアマチュア劇団の課題であろう。

「さかしい弟」「新ももくり物語」(レオ)

私たちの周囲は今、マスコミの氾濫で通俗的な笑いと安易なおふざけで満ちあふれている。観客は、笑いにしる涙にしろ、「本物」を舞台にもとめているはずだ。後藤志げお氏はレオ創立以来、「創作民話」を作・演出しているが、この舞台は、「本物」とはほど遠い。

「新ももくり物語」は民話「絵姿女房」をもとにし、津軽弁に直してミュージカル風にアレンジしたものである。「さかしい弟」は民話「喜劇」となっている。この二本は、内容にふれる以前に、レオの芝居づくりの姿勢が問われなければならないだろう。——客入れ後も音あわせや舞台稽古を続けている、出演者の子どもが上演中舞台を横切る。アドリブでセリフをつなぐ、稽古不足を言いわけする。後藤氏自身がセリフの途中で音楽のテープを止めに袖に入る——こんなことがあっていいのだろうか、開いた口がふさがらない。

舞台は一人でつくるものではないし、私たちはたとえ十分でも精一杯稽古をし尽した舞台を観客におくらなければならない。

九百人の会場で昼夜2ステージで観客数十名の舞台を自我自賛していても進歩はない。

「津川武一作」「農婦」より「農婦」(弘演)

自分の劇団なので活動報告にとどめる。

弘演では作間雄二氏が亡くなってから津軽を題材とした脚本は生まれていない。「農婦」は、作間氏最後の作品「八戸無産者診療所」から七年、上演記録をたどっても「津軽謀叛人始末」から四年ぶりの創作劇となった。創作劇を生みだすまでの時間と労力は大変なものである。

「津軽謀叛人始末」から「農婦」の上演運動の中から、「謀叛人方式」と「津軽海峡文化圏」という言葉が、演出をお願いしている飯田信之氏(劇団さっぽろ)から生まれた。

「謀叛人方式」とは、地域のあらゆる階層の人々をまきこんで舞台をつくる方法で、今回も客演ばかりではなく、小道具作りや稲刈り、草取りの実習を農家や農協の協力を得たり、登山囃保存会の協力出演等で、出演者のべ九

十名の舞台をつくりあげることができた。

下北のむつ市で教師をしている乳井先生が片道四時間の道のりをへて弘演を観に来て下さる。むつ市でもぜひ芝居をやって下さいという。「私達はもっと運動の中に文化を取入れなければいけないのです。私達が劇団の苦労を知り演劇を観ていくことで手をつながなければ地域は変らない」と熱っぽく語る。飯田氏の「津軽海峡文化圏」という言葉の真髄はここにある。津軽海峡を中心に円を書いた地域のつながりを広げ、中央集権の文化ではなく、地域の歴史と生活を見すえた、地域が主人公の文化を創造しようという構想だ。津川武一原作の小説を札幌の矢作京介が台本を書き、装置にステージアンサンブルの高田久男氏、照明にSLSの中山功氏、劇団さっぽろの飯田信之氏が演出、そして「謀叛人方式」で上演をなしたげた「農婦」は「津軽海峡文化圏」構想の第一号の作品と言えるだろう。

支木と弘演は今年共に二十周年をむかえる。それぞれが新しい課題に挑戦する。「もう二十年、いえ、まだ二十年」と秋本博子氏が言い直した通り、これからである。一つ一つの舞台をこの歴史の上に積み重ねてゆきたい。

劇評

「よかった!とは……………」

—中部ブロック82年11月—83年3月の上演から—

丸子 礼二

(1) ながい間「一人じゃできない」とわめいていた効果があつたのか、あるいは、「いつでも勝手なことばかり云わせておいては……」という対策からか……今年の中部ブロックの観劇交流は組織的に行われ、各批評担当者の文集まで作られた。私としてはその内容を参考に報告をまとめればよいことになった。ごく有難いというより、やっと本来の姿になれたわけである。短いスペースでとても全部を反映することは出来ないが、やれるかぎりやってみようと思う。勿論、誰かが、「よかった!」と思ったのに、私が「よくなかった」と書くこと、及びその逆は当然あることだ。というより、この「よかった」というのは、舞台と観客の関係をあらわす言葉なので、舞台だけ切はなして絶対評価するなどというのは、演劇の場合ナンセンスなのだろう。

(2) ……という留保をつけて考えて見ても、なお舞台の「よい」「よくない」と云う基準というやつは、「リアリズム」という概念同様、なかなか、はっきりしなくて困ってしまうのである。

82年11月から83年3月までの上演は以下の通りである。

名古屋劇団協議会合同公演(劇団名古屋、劇団名芸、名古屋演劇集団、劇団名俳参加)
市民芸術劇場/82 11/6・7 於名古屋市民会館中ホール 熊谷昭吾作 若尾正也・久保田明演出「娘たちの声が聞こえる—名古屋炎上」

劇団はぐるま 第61回公演・御浪町ホール公演No.6 11/20・28 於御浪町ホールこばやしひろし作 こばやしひろし・三島幸司演出「アメリカ人になれなかった日本人と

日本人になれなかったアメリカ人」はぐる
ま実験劇場 1/14・15 於御浪町ホール
井上ひさし作 藤沢伸二・山口和紀演出「う
かうか三十、ちよろちよろ四十」

劇団すがお 第14回親と子の名作劇場 11
/23 於桑名市民会館、員弁郡全小学校巡演
11/3・12/12 (20st) プロイスラー作
加藤衛訳 加藤武夫演出 「大どろぼうホッ
ツェンブロッツ」

劇団上野市民劇場 第27回定期公演 12/
4・5 於上野市文化ホール 大橋喜一作
杉森正美演出 「朝はだんだん見えて来る」

岡崎演劇集団 第28回公演 12/12 於
岡崎労働会館大ホール ふじたあさや作 平
岩千尋演出 「臨界幻想」

劇団名芸 第3回太白こども劇場 3/20
・21 於名芸平針小劇場 プロイスラー作
加藤衛訳 栗木英章台本・高村真一演出「大
どろぼうホツェンブロッツ」 第16期研究
生卒業公演 12/18・19 於名芸平針小劇場
W・シェイクスピア原作 栗木英章台本 平
沢加寿美演出「真夏の夜の夢」

名古屋演劇集団 第2回アトリエ公演 2
/12 W・ギブスン原作 広渡常敏台本 丸
子礼二演出 「奇蹟の人」 名古屋市青少年

れない。「海軍士官のズボンが短かく、海
軍らしいカッコよさが無い一軍需工場の軍人
の役割を過小にしていたのではないか」
「殿下御祝祭の珍妙さに爆笑、しゃべり方も
天皇そっくりで味のある演技だった」

……というわけで、お客の入りも二千三百ほ
ど、黒字になり、その点もふくめて、合同公
演は意義のある成功を勝ち取れたと思う……。

(4) 写真一枚胸に抱いて、十七才のリサはアメ
リカに渡る。移民の嫁として、重労働、戦争
による日系人迫害、夫との死別、娘からもう
っとうしがられる老年、働いて働いて六〇年、
日本を恋しながらアメリカの土を掘りつ
つ死んで行くはぐるまの中心女優の一人大
塚鏡子のモノローグドラマ。大変な努力であ
る。そして見ている方もかなり疲れる。八年
ぶりの創作にかけるこぼやしひろしの思いの
たけが更にのしかかる、日本の現実に対する
ベシミズムが――。

アメリカ人になり切るために、自分の血の
中に流れる日本人になり切らねばならぬ。ベ
トナム戦争の炎に焼かれ、白人の疎外に苦し
んで山田青年は日本に行き、ギリギリまで日
本の姿を追求、チョンマゲ姿で動語を暗誦、

のための芸術劇場 3/12・13 於名古屋市
民会館中ホール 水上勉作 浦はじめ演出
「あひるの靴―アンデルセンの一生」 附属
研究所第20期卒業公演 2/27 於名演小劇
場 水上勉作 浦はじめ演出 「釈迦内極限」
劇団四日市 四日市市文化祭参加 11/6
於四日市文化会館第2ホール 飯沢匡作 森
賢郎演出 「毒きのこ」 子供会巡演 12/
12・3/6 (5st) 斉藤隆介原作 吉川
雅喜脚色 森賢郎演出 「ゆき(スライド劇)」
・劇団夜明けは公演が延期になり、未だ舞
台を見ることができなかった……。

(3) 合同公演の批評を、夜明けと岡演の、これ
も合同で七人がプリント三枚びしりと書い
てくれた。これ自体すばらしいことだが、今
はその中のほんの一部を引用することしか出
来ないのが残念である。

「戦争を題材にした作品は、かた苦しくて
肌に合わないが、「娘たちの声が聞こえる」
は、同じ年頃の少女達が主人公なので興味深
く見ることができた。……私がかりにあの時代
に勤労学徒の一人として、厳しい監視つきの
労働、自由もなく、空腹でいつ死ぬかわから
ないとしたら……ヤエのように自分の首を絞め

腹を切って憤死するまで自分を追いつめる。
なみ吾郎も役者として山田の中に自分を追い
つめる。苦しくなる様な熱演、助演者はいて
も、これもたしかにモノローグドラマである
――二人の日本人の姿：あつてはならない姿と
して。

私も演技者のはしくれとして、こんな課題
にぶつかる役者冥利と困難さをつくづく思う。
役の中に、客席の心をひきつける光のかたまり
を発見、練りに練ったディテールを、駆使
して、何の圧力もなく自然に演じつづけれ
たら、一時間も短かく感じ、もっとこの姿を
見ていたいとお客の方から要求される、関
係がつくれたら……そう云う意味で、今回の二
人とも、説明と緊張が強すぎたのではないか、
その反面、なるほどと思わせ、お客を乗り出
させるディテールの用意も乏しく思う。

頭のおかしい村のおとこのさまと老いた特医
の二人が、村娘ちゃんに寄せる恋心をめぐって
あつというまに何十年がすぎる、井上ひさし
の軽妙な「うかうか三十ちよろちよろ四十」
にはぐるまの若者達が挑戦する。ちかの江口
美奈は愛らしく、とのさま(高島明)と特医
(伊佐治直之)は八方破れで、演技としてま
ともなサマになっていないのに、妙に魅力と

その苦しみから逃げ出すにちがいない……
「若者たちはあたり前のように死んでいっ
た、とても悲しいことです……」

「白百合班の少女達はみな個性的」 場面
転換が多かったが、テンポよくスムーズでよ
かったです。」「歌がよくそろう、発声が聞き
とりやすかったです」

「もう一工夫ないとするおにその当時へ入
りにくい。作業場面がもっとないと、つらい
生活がつたわって来ない。ヤエの通夜に何の
感情もわいて来ない。場面をカットして中味
を深くしたならばという気がします」

「合同公演とは思えないほどのアンサンブ
ルで、いい舞台でした、中心人物の絹子(吉
富祐子)は光る演技で、うったえるものがあ
ったが、野呂(糸井重喜)のひねくれた性格
をあらわす演技は力が入りすぎ、見ていて疲
れた。遠山先生(岡部雅郎)の心の変化、と
くにラスト(防空壕の中)の平家物語の授業
は心の中が痛い程感じられた……」

「開幕、客席から普通の姿の娘たちがかけ
より、舞台上で戦中の服装に着がえる導人部は
客を当時にひきこんでとてもよい方法だった」
「工場での生活は説明不足ではないか。寮
生活と軍需工場のきびしさももう一つ感じら

情熱でひきつける。とにかく幕が開いた途端
「あ、こりゃ、もう気楽に眺めていよう」と
批評する肩のしこりをはぐしてしまった。

役づくりの綿密さと技術は前の「アメリカ
人になれなかった日本人と日本人になれな
かったアメリカ人」(長いノ)に比べて何分の
一だろう。客席の若者たちは「こっちの方が
何倍も面白いや」と気楽にしゃべっていた。

そう、この生々しい魅力、役者がハダカで
さらけ出された様な……どうも私ははぐるまの
未来を、こっちの方に感じてしまおうのである。
(そう芝居は甘いものでもないことは、わか
っているつもりなのだが……)

(5) 間抜けな大どろぼうホツェンブロッツと
りこうなカスパー、あはなゼッペルの二人
の少年コンビのたっかい。面白いおばあさん
や魔法使や桂にされた妖精アマリス等がで
て来て、とにかく話は面白く、つくりものや
仕掛の工夫のチャンスは沢山ありすぎるくら
い……この作品がドイツで大人気なのうなづ
ける。

すがおの舞台は員弁郡の山の中の小学校で
見たの다가子供達はよろこびで見ていた。
ゼッペル(伊藤みえ)が眼鏡をかけてアラレ

観劇雑感 萩坂桃彦

ちゃん風なのや大きな蛙などが受け、テンポのなさも苦にならない。ホッツエンプロッツや魔法使ももう一工夫と思うが、二十スティージを廻りこねるだけの楽しさはあった、と思う。

名芸の「ホッツエンプロッツ」は春の天白こども劇場、胸に動物のアップリケをつけたクロコ達が生を向くと森の木になる工夫、おばあさん役（坂野加納子）の酒脱さ、カスパールの浅津和代は前記合同公演で女学生の一トモエを演じた時もよかったが、今回は更に活躍していた。魔法使の家来大ガラス（金原祐三子）も人気を得ていた。やはり名芸のホッツエンプロッツの方が、まとまりは一步上だったと思うが、魔法使の場をほとんど人形でやったが、意外とモタモタして流れを崩したのが惜しかった。

…枚数がついて、上野、岡崎に言及できず残念。今回の中部ブロックの各上演、一応お客から「よかったよ」とは云ってもらえた舞台が多かったと思う。たゞし「よかった」の中味は…？

「グスコ・ブドリ」と「亡命者」
(京浜協同劇団)

後味のいいのは台本の良さのためであるらしい。宮沢賢治の天才的な固執は、ぼくなどの凡庸、下世話の人間には通じにくいところがあると思うのだが、そういう輩にも、宮沢賢治のノーブルなエスプリを吹きこんでみせるといふ工夫がこの本にはある。その意味では、これは脚色を超えてオリジナルである。

超天才的な存在、科学の権威、クーパー博士を物語の芯に据えて、人間と科学との関係というシリアスな問題の提示やグスコ・ブドリのあまりにもいたいけな生き方の中に、彼の理解者となったオリザの配置は、原作にはない。原作にもオリザという名は出てくるが、それは農民の常用食である穀物の名称である。この一つだけでも台本の広渡常敏の苦

心のあとが見える。

京浜の舞台は例の如く生真面目である。しかしそれは、時には硬直を伴う。科学は人間にとっていかにあるべきかという命題の追及に性急が見える。賢治の作品もそのことは意図はしているが、なによりもこのすぐれた童話の感銘は、次々と変転する運命に奔弄されながら、ひたむきに生きつづけ、農民の福祉を最期の希いとして自らを燃えつくすグスコ・ブドリの素晴らしさである。それは賢治の自画像である。そしてこれが傑作である。所以は、童話として完成していることなのだ。つまりこどもにも、いやこどもだからこそ、この素晴らしさが、真直ぐにわかるのである。これまで書いた時に作家の小沢清氏から電話があった。京浜の「グスコ・ブドリ」を観ることを奨めたばくへの返事であった。

「京浜はダメだね、途中で帰っちゃったよ、あれはインテリの芝居だろ。どうして川崎の

労働者の芝居やらないのかね。アンサンブル

(広渡氏の劇団のこと) はいいさ、あそこはインテリの思考でやってんだから」云云。

京浜の「ゼロの記録」はどうだったかときくと、あれは良かったと言う。「グスコ・ブドリ」はその路線にある害なんだがなァと、京浜に代ってばくが戸迷う。

レパートリーの選択を誤ってはいないのである。小沢氏をして途中で帰らしめたのは、この作品のもつ、童話としての原点を、おもしろさから外したつくり方をしたためではないかと思う。

ブドリ役の隈広誠二は柄に合っている。子供から成人への変り目で、当然そこで役者は変わるが、そのあたりに隈広に幼な姿が宿しえたら申し分ない。少年時代のブドリの山本唯一郎がみずみずしい。

子育てを終わって復帰出演の岡田千尋のオリザはさすがに多少姥様めくのはやむを得ぬとして、セリフにメリハリがあり、容色も健在で役柄に納まっている。十五年のブランクは歩き方に出ている。

クーパー大博士の中沢研郎の飄々とした感じも頂けたが藤井康雄のペンネンナム博士は若すぎただろう。農民役の山口あきお、原

科清あたりは京浜の定着したたのしさである。

演出(細田寿郎)に発想の転換があれば、もっとくつろぎ、たのしさ、おもしろさ、役の振幅をとまなび出して出たのではないか。これをたすけるための音楽も節約されすぎたようであった。(3月3日、幸文化センター所見)

ムロジェックの「亡命者」が演出や役者の意欲をかきたてる理由はどこにあるのだろうか。ニヒルで、どこか嗜虐的なインテリと、守銭奴のような労働者とは、地下室での共同生活でかもし出す、日本の万才で言えば、ツッコミとボケの会話仕立ての喜劇は、かなり難解である。第一、こで言われる亡命そのものがそれほどわかりやすすくない。インテリはどうやら政治的亡命、労働者は出稼ぎである。彼らの「くに」はポーランドに擬せられる。プレヒトの「亡命者たち」の追われた国はナチスであった。これは解りやすい。ムロ

ジェックは、体制からの亡命、物質からの亡命、孤独な精神の自由の渴望をいうようであるが、それも空しい。幕切れは象徴的である。インテリは号泣し、持金のありつたけを投げ捨て、自殺にも失敗した労働者は、いびきを

たてて眠る。

奇妙で、グロテスクな、諷刺だけが残る。このような芝居は、プロセスを克明に描きつづけることに尽きる。役者は、この苦しみをたのしむ。

当然のことだが、ぼくは、これを「京浜」の「亡命者」を観て書いているのである。ムロジェック論はまた別の次元である。というより、それはぼくの能力を超えるだろう。

そこで、「京浜」について言うと、稽古場であれだけの地下室をしつらえた装置(佐藤張二)のたしかさ、計算に計算しつくした感じの演出の仕事には感心した。もう一つ感心したのは、苦行を強いられと言えなくはない三時間ほどの時間を、客席が耐えさせたことである。或は耐え終らせた何かということかもしれない。これは、得難い、客席からの「京浜」への愛情ではないのか。いたわりではないのか。

「グスコ・ブドリ」を終えたあとの45日間ほどの支度で、この公演があった。演出(細田寿郎)とインテリ(クーパー大博士の中沢研郎)がそのまま移行している。

インテリにあらわれた疲労と未完成度は、同情はできるにしても、観せられる客席もつ

らしい。会話での労働者の適確な応答がなかったら破綻していたにちがいないほどのものであった。労働者役の山本忠利はさいきん、めきめき腕を上げている。

(3月26日、けい古場公演所見。第二日目の3月27日は、中沢研郎氏竟にたおれ、延期になったとき。胸塞がるる思い。)

「鬼怒」(可能流門中会)

客席の椅子に身体を落すと、一寸見おろす若しくは稍見渡す感じに、舞台がある。舞台というより所作台といった方が適切で、T字型になっていて、足の部分が花道になっており、人物の登退場に使われる。

新宿駅東口近くにあるビルの6階に屯するそこは、もともとバブか喫茶でもあったのか、客席は暗い穴倉に沈む感じである。

開演前から照明は乏しく、受付けで渡された印刷物の字はとても読めない。幽明の境を彷徨しているような気分である。

前ぶれらしいものはなく、おどろおどろした和太鼓の響きで劇がはじまる。白髪の老婆と女を想わせるような女が二人、舞台上に居並び、老婆は燈なので立てないが、あとの二

人が立ち歩き、舞い、踊りながら誦するが如くセリフを紡ぎ出す。

その言葉は極めてわかりにくい。中身が難しいのではなく古文語体の装飾のためである。作品の意図にもそれは明示してあって、「この戯曲では座客に対して台辞の論理を伝えるのではなく、演者の生身の肉体の営みの全て(台辞に加えて仕草、体の位置や向き、立居振舞い、作法等の動き、舞い)を通じて、座客の感覚・感性との対話を求める所に、作劇上の研究テーマと美の追求に関わる作者の思惟があると御理解願いたい」とことわっている。だから内容は平易である。

時代は縄文後期から弥生文化に転ずる頃を想定し、ところは東国、総(ふさ)の国、筑波峰を臨む鬼怒川のほとりということになっている。現在でいうと茨城県結城地方である。ここに登場する三人の女は、老婆とその娘と孫娘で、原住民族の生き残りである。祖先は東方からの侵略者によって悉く滅されてしまった。そのあとには蛇が棲むといい、鬼が棲むという伝説を生んでいる。

この三人の女が守護する部落に、百人のいくさびとを率いる東征軍がやって来た。指揮するのは百人男(ももびとのますらお)、従

うは、犬磨(いぬまる)、猿彦(さるひこ)雉丸(きじまる)である。これでわかるように「桃太郎の鬼退治」のパロディである。

犬磨は矛の頭、猿彦は弓の頭、雉丸は、実は老婆一族の郎党とわかる。

桃太郎の率いた百人のいくさびとは、薄ケ原の底無し沼に呑みこまれて消えた。どうやら老婆の呪術のなせるわざとわかって、一行は恐怖に包まれる。

しかし見たところ、この女長が治める村は平和であって、機を織る娘、係娘、居坐り機で糸を紡ぐ老婆の折るような静けさ。

桃太郎一行は一夜の宿を所望する。白湯のもてなしを受け、織り上った絹布の真物の供与も受ける。ただひとつ、機場だけは覗いてはくれないという老婆の所望である。

深夜、その誓いを犬磨が破ることになる。かれの嗅覚は、機屋の奥に、華やかな女体を嗅ぎとったのだ。

「まさしく女三人、婆に、年増に、生娘一人。はあて、あの機屋の奥に横たわるもの」とじっと覗き入ると、それが觸體の山とわかる。

誓いを破られた女たちは鬼神と化す。稲妻が閃めき、雷鳴がとどろく。

作・演出の可能あらたは、「白い鴉あるいはころもがえ」「真謝部落陳情口説」「空を飛んだ鶏と銀色の松ボックリ」の小坂忠の最近名である。昨年「おたあジュリア」を草月会館で上演して、中野勤演を解体し、ますます、その「個」を際立たせて「可能流演劇」と名告り、合議制劇団体制から可能改個人の演劇観、教育観、創造方法論を基礎にして、「可能流」を創出し、麾下にあるものを門中会と称する。「鬼怒」上演は、その可能流門中会の企画である。中野勤演以来の、八巻淑森本拓次郎がびつたりはりついている。

ぼくには、まだこの可能流は未知数に思える。日本列島史を劇作で縦断しようという可能流民俗劇の創始は、堀りはじめてみれば、先蹤の途を踏んでいるかもしれないのだ。彼の意図の壮んさには目を眩りつつも、芝居の道が平坦であるはずがない。それは内省と懸命の努力を必要とする茨の道であることを、好漢自重せよという気持で言っておきたい。

(2月26日・新宿もりえーるにて所見)

「プンティラ旦那と下僕マッティ」

(アトリエ41+ブレヒトの会)

「プンティラ旦那と下僕マッティ」はブレヒトのものにしては肩が凝らずに読めて、結構面白いので、逆に読みとり方が皮相なのではないかという心配もあった。ブレヒトがわからぬのが恥しい気持と解ったような気持でいることの不安が、ぼくにはつきまといっている。

とまれ、観たまま印象を語って自分を計量するしかない。

対面した舞台はぼくを喜ばせた。人物のみならず場面のどれにも、ブレヒトラしい解釈があり、それが役者たちの中に躍動して見える。まず、福田豊士のプンティラ旦那が滅法におもしろい。あのテカテカ頭はプンティラの定型かと思われるが、全くうってつけである。ビシヤリと叩いてみせるにせよ、撫でて見せるにせよ、かつらをかなぐり棄てた時にあらわれるそれにせよ、行動と性格がそこで見事に重なってみえる。

それに口跡もよかった。酔っぱらった時と醒めたときのケジメのつかないところなどに

微妙な工夫がある。酔っぱらいが酔が醒めると別人になるという趣向は、チャップリンの「街の灯」に出てくる金持にもあって、それはそれで面白いけれど、ブレヒトのプンティラに与えた「人間性」は、もう少し本質的なようだ。どちらも本音なのである。このあたり、「コーカサスの白墨の輪」のアツダクに似ていなくはない。ちがうのは、アツダクが民衆の意志を表し、プンティラは大地主として階級的にとらえられているという点である。

それは前口上で料理女(山本良子)が歌う「つまりわたしたちがこの舞台でお目にかけるようとするのは、一種の前世紀動物、その名前をラテン語で申しますと、エスタティム・ボセリール即ち土地所有者なのでございます」(上演は岩瀬達治氏訳であるが、ここでは内垣啓一氏訳を借用)にはつきり説明されている。だから、プンティラは単純に出鱈目ではないのだ。さいごは必ず収奪者としての思想でケリをつけている。それまでの過程で、善良ぶりや人間らしさを嗅ぎまわってみせるけれど、帰するところは所有者としての収奪である。

運転手のマッティが最後に決別を告げるのは、そうした旦那プンティラの本質に対して

である。

「お別れの時が来ましたね、お運者で、プンティラの旦那。旦那は私の知っている一番の悪人じゃありません。酔っぱらったときの旦那はほとんど一個の人間ですよ。われわれの友情は長続きしませんでした。興奮は醒めるもんです。(中略)そろそろ雇人たちがあなたに背を向ける時代なんです。彼らはじきに良い主人を見つけることでしょう。まず彼らが自分自身の主人になりさえすればね」(内垣啓一氏訳)

運転手のマッティは維田修二が演じた。この俳優は、昨年、クレッツの「男のたのしみ」で水城蘭子と火花を散らした役者としてよくは記憶していた。精悍な感じと利口そうな労働者の風貌を持っている。明瞭な行動線で役に迫るタイプである。こういう直截な形象がブレヒトの劇には合っているように思える。

プンティラの娘エヴァに、あの一寸ツンとした感じの美人の中野良子が出ていたのは、これも拾いものであった。もっともラク日が近いというのにセリフが聞えたりする無邪気？さもあつたが、その分だけ必死だったという解釈も成り立つ。演出(岩淵達治)がエヴァに中野良子をえらんだとすれば、うなづけ

ないこともない。人生を興味本位に生きているブルジョアの娘のさもありうタイプが克く出ている。

エヴァの婚約者の外交官補(斎藤文哉)がいつになく面白かった。気どりの屋で、実は内情、借金で火の車の、見識ぶった愚にもつかぬ男をボンチ絵のようにうまく出している。丹念な勉強の成果である。

この戯曲で重要な部分を占める、プンティラと婚約を結ぶクルゲラの女たち、闇屋のエンマ(水城蘭子)、薬局の女店員(原田あおい)、乳しぼりの娘(でぐちのりこ)、交換手(佐藤恵子)とのくだりもたのしい。ブレヒトの芝居には、不図、こうした屈托のない場面が挿入される。弁護士(櫻井達雄)、判事(小池幸次)も印象を残した。

(3月8日・紀国屋ホール)

「どん底」(東演バラダ公演)

「それでは千田先生の「どん底」はどこがちがっていたのであろう。ひと口に云えば、やたらとひっくり返されたのである。第一、

所要時間2時間20分というのもぼくの経験にはない。カットというのも余り見当らないところをみると、小さななづみやこだわりを極力省いて、それを全体図としてとらえたということだ。そういえばセリフの交錯や同時進行が意識的に用いられ、消却し合う関係の中で、逆に個が浮き立つという手法である。行動線も直截であって、たとえば、あんなにまっしぐらに死へたたみこまれるアンナも初めてであつたし、朝の木賃宿、名もない宿泊人たちがぞろぞろと仕事に出かけるといった幕あきの描写もこれまでにお目にかからなかった。云ってみれば、この木賃宿、どん底、浮浪者の群れが、社会の断面図として描かれたということである。

もうひとつには、これまで舞台のヒーローだったサーチンが働くことの価値のわからぬ破落戸として扱われ、ルカの説く、潰えてゆく夢が肯定されて、ルカに与えられたこれまでの解釈、偽善者の濡れ衣を免れせしめたナチュラルな眺め方である。

とにかく八大人物Vが消えて、誰もが、ありきたりの、どこにもいる、手近かな人間として再生されたのだ。働きのだが、働いただけ飲んでしまう帽子屋ブノフなども、言

うこともすることも、宵越しの金を持たぬ日本の手職労働者と少しも変わらないし、錠前屋クレシチの行きづまりも、日本人めいた貌つきもあつて、生ぐさい。アリオシカでさえ、殆んどルカやサーチンと同じ比重で扱われているのである。

千田先生の演出によつてもたらされた八新しさVは人間讃歌や人間確認といった、どちらかというと重い命題を捨象して、仕事をしている人間、怠ける人間、知識や驕りの墮落、敗残した寄食者の無気力、役者に象徴されるような純粹の夢想の破滅—といった、とりどりの、リアルな現象の追認である。

歌わず、滅入らず、坦々と描き切るという千田演出の積年の手腕ということになる。」

これは三年前、千田演出による劇団東演の「どん底」を観たときの、ぼくの印象の追憶であるが、こんど、客席百人余りの、東演バラダという小劇場での、再演はふたたびぼくをとりこにした。基本的には初演の印象と変らぬけれど、小劇場をいっばいに工夫したいわば必要不可欠なものだけの舞台、小ささを逆手にとって、今回は念入りな人物の活写となった。

客席から、視線がやや不向きになる位置に穴ぐらを覗くような感じで、木賃宿がある。眺める「どん底」の舞台は、限る舞台になった。くっきりと人物が浮かびあがる。初演に比べて特に意を須いたかに見えるのはサーチン(池田勝)である。初演時の、やや無為徒食のならず者の描き方の一刷りも、納得のいくものであったが、どうやら、何故、彼がこんな男になったかの新しい考察が加わったようである。彼の内奥に、苦悶感と焦燥感を漂わせて見せることになった。ルカにこだわったサーチンは、これならわかる。

アンナや役者のほげしい吹き込みで幕をあける浮浪者宿の描写の適確さと同時に、バラダ公演は、どの人物にも血をかよわせるヒューマンな形象化に行きついている。

一九〇二年の作品である「どん底」は、初期ゴリキイ文学の集大成である。

「どん底」は革命の「嵐」の前夜の描写ではあっても、まだ、「嵐」の予知、告知者ではないのだ。むしろ、あるとすれば、暗たるベシミズムではないのか。

そしてここにある最大のおもしろさは、そこで交される人間臭いやりとり、呪い合い、罵倒、擲論——のことばと生活の交響楽だと思ふ。ゴリキイが「私の大学」でまなんだ觀察の勝利である。

(3月27日所見)

手紙

—エピローグのある2幕—

瓜生正美

△登場人物▽

第一幕

小西 綾子 立誠学園理事・副校長
アコ
大橋 奈美子 綾子の兄一郎の昔の許婚者
坂本 芳子 少年係刑事
瀬尾 教官 医療少年院法務教官
川村 教官 医療少年院法務教官
中野 先生 立誠学園教師
山本 洋子 立誠学園中学三年
島田 かおる 立誠学園中学三年
佐藤 和夫 医療少年院在院中
綾子の兄一郎の声
緒方の声
寿司屋の声

立誠学園理事・副校長、小西綾子の家の応接間兼書斎である。庭などは少し荒れているが、戦前からの、木組みのしっかりした大きな邸。現代風にいくらか手を入れてあるものの、下手のがっしりした暖炉や電番などは昔からのものである。暖炉の上の壁には三枚の額。中の一枚は海軍中將の正装。左の一枚は、航空服を着た若い将校が二人、肩を組んでいる姿。右の少し小さな額にはモンペ姿の中年女性。綾子の父と母、そして兄とその友人である。正面は広々と

あけ放つことのできるサッシのガラス戸で庭につづき、下手には、キッチン、ガレージ、居間などに通じるドアがある。上手奥に古い机、書棚など、上手前は玄関へ通じる入口。その入口と、机との中間に昔の書生部屋らしき小部屋へ通じるドアがある。

幕あくと誰もいない。夕刻。電話のベルが鳴っている。一度切れる。又、鳴りはじめる。車のとまる音。犬の吠える声。勝手口をあけて綾子が帰ってくる気配。電話のベルに気づいたらしく小走りに入ってくる。

綾子 (息をはずませて) お待たせ致しまし

た、小西でございます。……ああ、中野君。たったいま帰ったところ。電話のベルがなつてたもんだから……。そう、教育委員会主催の生活指導のゼミ。助言者なんかやらされて恥かいて来たところなの。そうねえ、百人位かしら、少年係の刑事さんなんかもいたようねえ。……ホホホ、とんでもない、そんな立派な話なんかできませんよ。……え、ああ、例の件ね。あの子たち、二度目でしょう、もう少し厳しい処分の方がよかったと思うの。でも、中野君の熱意にもほだされたし、職員会議で、厳重注意、始末書という線が出たんだし、いいんじゃない、それで。……大丈夫、こたわってませんよ。でもね中野先生、担任として責任もって下さいよ。うちの学校は、厳しい駄と、進学率。この両方で生徒が集ってるんですからね。私学の経営って大変なのよ、今更いなくなつてわかつてますよね。

三年といえばもう大人よ。あの子たち、男の先生の扱い方、本能的に心得てますからね。親身になって相談にのるのはいいけど、鼻の下ながくしては駄目よ。自分が何やつたのか、ちゃんと反省させて下さいよ。え？ ええ、うちにいます。お客様がみえる予定だけど、かまいません、結果をまた報告して下さい。

玄関のブザーが鳴り、犬が吠える。

綾子 あ、みえたみたい、じゃ、お願いしますよ。

綾子、サッシのガラス戸をあけて、一声、二声、犬を制す。「だめよ太郎、お客様よ」など。そして、玄関の戸をあけに行く。

奈美子が入ってくる。兄、一郎のかつての許婚者だった女性である。綾子にとっては、必ずしも歓迎する客ではない。

綾子、正面のカーテンをあける。夕焼の庭がみえる。

ジェット機が通りすぎる。その間、通話は一時停止である。

綾子 ごめんなさいお待たせして。それでね中野君、一つだけ云つときますけど、中学

奈美子 お久しぶりでございます。
綾子 ごきげんよう。お待ちしておりますわ。さあ、どうぞ。

奈美子 突然、学校にお電話などして、お仕事のお邪魔して申しわけございませんでした。……これ、ほんのつまらぬものでございますが。

綾子 困りますわ、そんな御心づかい、これからはお止めになって下さいませ。今、お茶を持って参りますから。

奈美子 どうかおかまいなく。

綾子、台所の方へ行く。奈美子は写真に近づき、まず、綾子の父母の写真に合掌し、次に、綾子の兄とその友人を、じっと、みつめつづける。綾子の戻ってくる気配にいそいで合掌する。お茶をいれる綾子。ちゃんと湯さましなどして本格的な煎茶のいれ方である。

奈美子 こちらの御様子、時折、母からおききしておりました。

綾子 あら、お母様、やっぱり、もとのとくろに。……お元氣ですの。

奈美子 はい。お近くに住みながら、申しわけない。くれぐれもよろしくと申ししておりました。

綾子 そう、お引越になったとばかり思っておりました。

奈美子 申しわけございません。

少しの間。

奈美子 お父様がお亡くなりになって、どのくらいに……。

綾子 来年が十三回忌でございます。

奈美子 ながいこと寝たきりでいらしたとか、綾子様も、さぞ大変だったことでございますでしょう。

綾子 娘ですもの、当然のことですわ。

奈美子 ちっともお役に立てず、申し訳なく思っております。

綾子 ……

沈黙つづく。

奈美子 お母様がお亡くなりになった時も、焼け出されて田舎にいておまして、馳けつけもせず……

綾子 あの頃は、みんな、自分が生きていくことで、精一杯でしたから……。さあ、どうぞ。お手伝いさん、パートなもので、もう帰ってしまつて……。何もおかまいできませんけど。(菓子をすすめる) どうぞ、召し上つて。

奈美子 栗鹿の子ですわね。昔よくお宅で戴

きましたわね、懐しいわ。

間。

奈美子 あのお写真、一郎さんと、いえ、お兄様と御一緒の方、緒方さんですわね。

綾子 ええ。

奈美子 よく四人御一緒に、この部屋でレコードをおききましたわね。……緒方さんバリトンで、綾子さんとデュエット。「庭の千草」最適だったわ。敵性語だというので、小さな声で原語教えて貰いましたわねえ。覚えていらつしやる。

綾子 ええ、あのレコードまだ家にありますのよ。

奈美子 綾子さん、お母様を御病氣でお亡くしになって、お兄様は戦死、そして緒方さんまでも……。

綾子 そういう目にあつたのは私一人ではありせんわ。

奈美子 そうですわねえ、私たちの世代つて……。

綾子 でも、貴方はお幸せですわ、よいお連れ合いにめぐまれて。私、あなたをせめてなんかいませんよ。兄は戦死してしまつ

たんですもの。仕方ございませんわ。いまでも京都にお住い？ 御主人、御元氣ですの？

奈美子 ……二年程前に亡くなりました。私今、こちらの兄の家の離れに……母と一緒にでございます。

綾子 そうでしたの、存じあげませんでしたわ。……御病氣？

奈美子 肝硬変でしたの。

綾子 じゃ、御酒でも随分……。

奈美子 ええ、主人のお酒には、いろいろと泣かされました。

綾子 お子様は、たしか、いらつしやいませんでしたわねえ。

奈美子 ええ。

間。

奈美子 お屋敷、昔のままですわねえ。

綾子 もうすっかり古くなって、学校のことでは忙しくてますでしょう、手入れも何もほうりっぱなしで……お化屋敷ですわ。私にはお似合いですけど。

奈美子 あら、そんなことおっしゃって、綾子さん、ちっともお変りになりませんわ。

太郎が吠える。

綾子 まあ、お上手ですこと。貴女こそお若いわ。……(立ち上つて、庭の方のガラス戸をあける) ほら、ごらんなさい、草もはえ放題でしょう。

奈美子 たしか、あの頃もシェパードが。

綾子 ええ、太郎の二代目ですわ。二代目といつても、そろそろボケて来てますけど。

……たべるだけはよくたべますの。

奈美子 母と同じですわ。一度たべても、たべたこと忘れまますのね。まだ、夕御飯たべさせて貰つてないとか……あれでは、嫂も大変でしたわ。

綾子 あなた覚えていらつしやる。あの西小路さん、同じクラスの。女学校出てすぐ御結婚なさつて、うらやましいなつて思ったものですけど、御主人すぐ戦死なさつて、嫂さんのことで随分御苦労なさつたんですわねえ。私なんかお蔭様でそんな苦労しなくて助かりましたけど……。

奈美子 でも、お父様ながいことねた切りでいらして、綾子さん、大変だったと思ひますわ。本当なら私が……。

奈美子 哲郎さん、お元氣でいらつしやいます。あの頃、可愛らしくつてね。

綾子 ああ 弟。千葉の方で病院やつてますけど、私が煙たいんでしよう、全然よりつきませんの、私は目下、天涯孤独。話し相手は、あの太郎だけなの。

奈美子 こんな広いお屋敷に、おひとりじゃおさみしいわねえ。

綾子 もう馴れましたわ。それにこの年になるとかえつてさばさばして、仕事もつてますから。……紅茶召し上ります？

奈美子 いえ、本当におかまいなく、私、すぐお暇致しますから……

綾子 ゆつくりなさつてもよろしいんですわ。(台所の方へ行くこととする)

奈美子 (あわてて) 本当にいいんです。……あのう、実は……。綾子様にちつとお願いがあつて参つたのでございます。

綾子 ……
奈美子 (パンフレットなどを出して) 私、

主人を亡くしましてから……おはずかしいんですけど、こういう事をやっておりますの。勿論、綾子様、沢山はいつてらっしゃると思いますけど……。

綾子、パンフを手にとる。

ジェット機が通りすぎる。会話は一時中断される。

綾子 ごめん遊ばせ、他のことでしたら私、御相談にのらせて頂け……

奈美子 ……

綾子 ……、私、一人でしょう、保険かけても仕方がございませんの。

奈美子 でも、保険には、いろいろございませうのよ。今は、死亡保険、つまり亡くなつたあとの御家族への保証というより、養老保険……御自分の老後のための保険の方が主力になってきておりますの。うちのこの……

綾子 ねえ、奈美子さん、保険だけは堪忍して欲しいの。いやな思い出がいろいろあるの。

奈美子 ……

綾子 うちね、母が、保険いっぱいかけてま

したの。父にも、兄にも、弟にも。でも、戦後の特別措置とかで、たしか、一世帯五百円か五千円かで、それ以上は仕払い打ちりでしょう。それに、あのインフレ……貰わないのと同じでしたの。

奈美子 ……

電話のベルがなる。

綾子 一寸失礼……（電話に出る）ああ、中

野君、え？ あの子たちと一緒に、これから……ええ、いいのは、いいけど……でも、あのつっぱり屋さん、一緒に来るかしら。

……そう、来るといってるの。御苦労様ね、少しは反省したってわけね。……ええ、今、お客様なの。でも、中野君としては、気の變らないうちに連れて来たいんでしょう……ええ……

奈美子、手早く、帰り仕度をして、電話の近くに来る。

奈美子 あのうち、私、又……

綾子、奈美子にうなづいてみせる。

綾子 じゃ、いいわ、お待ちします。……え、そう、大好物よ。悪いわねえ。……ええ、大丈夫、むしろ返したりはしませんよ。犬が吠えるかもしれないけど、つないでありますから。……え？ そうそう、前に一度ね。じゃ、わかってるわね。ハイ。

受話器をおいて

綾子 ごめん遊ばせ、折角きて下さったのに。奈美子 いいえ、とんでもございせんわ、お忙しいところを失礼いたしました。又、あらためてお伺いさせて頂きますので……。

綾子 ええ、お近くに、いらっしゃる事だし、たまには顔をみせて下さいよ。……（送って行き乍ら）私、保険、入ることは入ってますの。経営者保険と云うのかしら、学校、銀行からお金を借りてますでしょう、若し、私が死んで、学校の経営が思わしくなくなつても、貸金がちゃんと回収できるようなつて……そうしないとお金を貸してくれませんの。勿論契約者も、受取人も、保険料仕払うのも学校ですけど。五億だから、保険料だけでも大変ですのよ。

奈美子 ……では、どうも、お忙しいところをお邪魔いたしました。

綾子 お母様によりしくお伝え下さい。では、ごきげんよう。御免遊ばせ……。

帰っていく奈美子。綾子は、そこらを片づけながら、テレビのスイッチをいれる。途端に、外で、クラクション。

綾子 あらいけない、忘れてたわ。

「ごめんなさい、今います」等と云いながら勝手口の方へ。やがてガレージをあけ、車を動かす音など。その間、テレビは子供の時間の「戦争アニメ」を流している。再び戻ってくる綾子。上衣をとり、エプロンをかけながら入ってくるが、つかつかとテレビのそばによって荒っぽくスイッチを切る。どうも、この手の番組はお気に召さないらしい。玄関のブザーがなり、下手の、庭の方で又犬が吠える。綾子、いそいで、玄関のドアをあけに行く。

坂本 先生、わたし、立誠で、国語を教えてくださいました。

綾子 え？ 卒業生なのあなた、何回？

坂本 年がわかつてしまってますけど、高等部二三生です。卒業してもう一〇年になります。旧姓、高山と申しました。

綾子 思いだした、高山芳子さんね、あなた剣道部だったでしょう。なつかしいわあ。

坂本 今は、坂本と申します。

綾子 そう、久しぶりねえ。あなた警察におつとめなの。旦那さん、何してらっしゃる方、お子さんは？ ホホホホ、ごめんなさい。こちらばかり……。何か御用がおありなんでしょう。

坂本 申しわけございません、突然、お伺いして。こちらの方を御案内して参りました。

瀬尾 実は、私……（名刺を出そうとする）綾子 小西でございます。どうぞおかけになつて……。

瀬尾 はっ……。

二人は恐縮しながらも、奥にすすむ。

坂本 大きなお邸ですわねえ……。

綾子 大きいばかり、庭の手入もゆきとど

かずに、お化屋敷なんていわれるのよ。

坂本 は、庭のたたづまいを、男は、壁の三つの写真を、眺めている。

坂本 大きすぎて不要心じゃありません。

綾子 犬がいるのよ、シェパードの大きいのが。ほら、さっき吠えてたでしょう。……夜はクサリをはずすの。でも、もうすっかりモウロクして、泥棒よけになるのかしらね。(犬が吠えはじめる) あら、吠えてる、噂してるのきこえたみたいね。(写真をみている男の方へ) 亡くなった父が可愛がっておりましたので、死水とらなきやなりませんの。(坂本に) 父なきあとのわが家のボケ老人なの。

男 このお写真が……。

綾子 ええ、父です。

二人 ……

綾子 どうかおかけになって。今、お湯をわかして参りますわ。高山さん、お相手して。

瀬尾 いえ、どうぞおかまいなく、あの……。

止めようとする前に、さっさとキッ

チンの方へひっこんでしまいう綾子。

坂本 立誠学園の副校長さん、実力者だそうですわ。

瀬尾 苦手ですねえ、こういうお宅は。どうお話したらいいか。

坂本 正直にお話するほかはないと思いますわ。

瀬尾 くどくどとお話するよりも、手紙をおみせした方が……。

坂本 ええ。……でも私、少し、腑におちまさんの。どうして小西先生今まで気がつかれなかったのか。

綾子、盆に紅茶のセットと果物を乗せて運んでくる。手伝う坂本。

綾子 今すぐわきますわ。

瀬尾 御挨拶がおくれて恐縮でございます。

私は、こういうもので。(名刺を出す)

綾子 小西でございます。さ、どうか、おかけになって。(老眼鏡をかけて名刺をみる) ……奥多摩医療少年院？

瀬尾 主任教官の瀬尾と申します。実は、その、突然のことで、驚かれますと思いますが

……やはりこれは正直にお話する他はないと。

綾子 ……

瀬尾 小西アヤ子さん……。

綾子 私でございます。

瀬尾 小西アコとおっしゃるのは……。

綾子 (笑って) ああ、姪の阿矢子のことですか。よく間違われますの。私のアヤ子は、糸偏の、綾とりの綾です。アコはコザト偏に、可、不可の可。矢は弓矢の矢です。昔は、私も、アコちゃんと呼ばれた頃がございましたけど。

瀬尾 失礼いたしました。

綾子 弟の一人娘なんですの。今年のはじめから私が引きとって、うちの高等部に通わせております。弟が、是非とも医学部に入らせて跡をつがせたいと、そう申すものですから。弟は千葉の田舎で小さな病院を……。

坂本 立誠学園も格が上りましたわね。私たちの頃からみると信じられない位。小西先生のお力だって、みんないってます。

綾子 そんなことございませんけど……。

坂本 去年はたしか東大に……。

綾子 十五年よ。まだまだだわ。

瀬尾 で、お嬢さん、今日は。

綾子 明日がお休みなので、久しぶりで親元に帰っております。

瀬尾 そうですか。それで少しは安心致しました。

綾子 安心？

瀬尾 は、書類鞆から、手紙の束を取り出し机の上におく。

瀬尾 これをおよみ下さい。

綾子 (一通を手にとって) アコの字ですね。(宛名をよむ) 奥多摩市大山八ノハノ一〇。猪口三郎様方、佐藤和夫様。

台所の方で、湯わかしがたぎったピ——という鋭い音。思わずピクッとする綾子。

坂本 私がやりますわ、どうぞ、続けて下さい。

坂本去る。

瀬尾 ……猪口三郎と申しますのは、私共、奥多摩医療少年院の院長なんです。在院中

の少年に宛てた手紙は、少年の人権を守る意味から、院長の自宅に出して貰うことになっております。少年院から出す場合も同様です。

綾子 じゃ、アコが……。

瀬尾 (うなづいて) 鑑別所のことから文通がはじまり、私共の方に送られて来てから、ずっと続いております。この写真、お嬢さんですね。

うなづく綾子。瀬尾をみつめる。動揺を外に出すまいと懸命に努力しているのだ。それが、瀬尾には自分への批難の眼とみえる。云いよどむ瀬尾。綾子は、不安気に手紙をとり出して読みはじめる。読みながら、時々、眼をあげて瀬尾の話に反応する。

瀬尾 どうか、この手紙のことでお嬢さんをお叱りにならないで頂きたいのです。お読み頂ければおわかりと存じますが、いわば、お互いに同情しあい、はげまし合っているという、まじめな手紙なんです。……文章もしつかりしてるし、今どきの高校生にしては珍らしく字もお上手だし……。

綾子、再び読むのをやめて瀬尾をみる。思いつめた様子である。ドギマギする瀬尾。坂本がポットを持って帰って来る。

瀬尾 驚かれたことと思います。お気持はわかりますが、とにかく正直に経過を申し上げますので、最後まで聞いて頂きたいと思っています。

綾子、又、手紙を読みはじめる。

瀬尾 佐藤の方からも、月に一度位の割で、返事がいつてる筈です。勿論、担当の私と主治医と、院長が眼を通しております……。もし、ごらんになりたいのでしたら、お嬢さんがきつとどこかに……。

綾子 (皮肉に、しかし、にこやかに) ねえ、高山さん、もし貴女がアコの立場だったら、そんなことされて黙ってます？

瀬尾 (あわてて) いえ、その、佐藤からの手紙をお読み頂ければ、文通をはじめるようになったいきさつをお判り頂けるかと……。つい。(汗をぬぐう) ……どこからお話

すれば、いいのか。

坂本 (お茶をいれ乍ら) 先生、おほえていらっしやいせん、一年程前から、受験勉強のやりすぎでノイローゼになった高校生が、トップを争っていた、ライバルの友達をナイフで刺して死亡させた事件。

綾子 ……それが、この？

坂本 はい。鑑別所に入れられた少年に、全国から手紙が殺到したんです。……週刊誌が書きたてましてねえ、「少年はいま、やっと安らぎの日を送っている」とか。「少年は語る——勉強勉強と、時間に追い廻される日々は終わったんだ。いつまでもここにいたい」とか。……同じような悩みを抱えている受験生から同情の手紙がわっと集まったってわけなんです。その中にお嬢さんの手紙もありました。

綾子 じゃ、アコが、その、友達を殺した少年と……。

瀬尾 少年法の場合は、その第一条に「少年の健全な育成を期し」とありますように、罪をおかした少年に罰を与えるというのではなく、ちゃんとした大人に育てるために、もう一度教育をしないかということでございます。少年院は、刑務所と違い、中学や

高校と同じく、人生教育の場なんです。(云いやる)

綾子は、瀬尾の廻りくどい説明におかましくなく手紙をよみつづけている。

綾子 おつづけ下さい。お聞きしております。
瀬尾 ……実は、そのう、私共が、佐藤に文通を許したのは、弁解するつもりはございませんが、一つには、文通は鑑別所のころからはじまっていた、つまり、鑑別所からの引きつぎということ……。

綾子は、ちらりと瀬尾をみる。そして又手紙にもどる。

瀬尾 ……こういうことでございます。鑑別所に入れられた当初は、毎日のように来ていたはずの手紙も、二週間たち、三週間たつころには、ぐんと少なくなって、最後にはお嬢さんからの手紙だけになった。……こういう経過がございまして、佐藤の方からお礼の返事を出したいと云いだしたようです。鑑別所でも、少年院でも、心理テストをかねて、よく日記を書かせたり致し

ます。お嬢さんとの文通を通して、人間の心をとりもどし、自分のやったことを、きちんと反省することができたらと、鑑別所の所長は、こう考えて許可を与えたんだと思います。

綾子は再び、ちらりと瀬尾をみる。
瀬尾、のどがかわいてくる。紅茶を飲む。こぼしてしまふ。

瀬尾 失礼いたしました。つい、その……。

坂本、フキンで、テーブルをふく。

綾子 (冷やかに) 高山さん、ごめんなさい、坂本さんだったわね。紅茶のお代りさしあげて。それからリンゴをむいて……。……おつづけ下さい。

綾子、又、手紙に眼をむける。坂本、リンゴをむきはじめる。

瀬尾 佐藤が、鑑別所から私共の方へ送られて来てからも、この文通を続けさせるかどうかで、相当な論議がございました。医療

少年院と申しますのは、病気の治療と、この場合は心の病気ですが、健全な社会生活を営むための教育と、この両面から子供に

対するわけなんです。主治医は、神経症の治療という面からも続けさせることを強く主張いたしましたし、私も同様でした。

坂本 医療少年院というのは、他の少年院に比べて人数も少く、ほとんどが個室で、院長の判断で、個別的な対応のやれるところです。判断は間違ってたかと私も思います。

綾子 ……。

瀬尾 (立ち上って) でも、私共は、大きな手落ちがございました。保護者の許しをえてやるべきだったということです。担当である、私の責任でございます。……ただ、これは弁解になりますが、鑑別所からの引きつぎということもありまして、つい、そのことがおそろそになりました。おわび申し上げます。

綾子 ……。

瀬尾 どうか、是非とも、お嬢さんをお叱り下さいませように。手紙のことでは、むしろ私共がお礼を申しあげねばと……。

綾子 おやめ下さい。では、どうして今頃こ

うしておいでになったのです。相談するのなら、何故最初から相談して下さらなかったのです。遅すぎます。いっそ、何も知らないままでした方が、まだましでしたわ。

長い間。

瀬尾 申しわけありません。実は、佐藤が逃走いたしました。

綾子 逃走……。

瀬尾 屋外作業の途中からいなくなったのです。計画的なものとは思えませんが、お嬢さんに会いたければかりに、いてもたってもおれなくなつたんだと思います。

綾子 じゃあ、その子、ここを訪ねて……。
瀬尾 はい。

ジェット機が通りすぎる。

坂本 (瀬尾に) このすぐ向うが厚田基地です。

瀬尾 そこに逃げこむと一寸厄介ですねえ……。坂本 (綾子の不安な様子を見て) 御心配いりませんわ、先生。自分の苦しみを理解してくる、たった一人の味方だ、佐藤は、

こう思っやってくるんです。お宅に迷惑をかける気づかいはありませんわ。

瀬尾 神経症のことを御懸念かも知れませんが、主治医の診断では、いわば一過性のもので、殆ど完治している。その点でも心配は全くありません。私共はむしろ……。

綾子 むしろ？

瀬尾 佐藤のことを心配しております。近く仮退院の予定でしたが、この事件で又延びるでしょうし、ひょっとして、少年院の服を着がえようとして窃盗を働くとか、自動車を乗り逃げするとか……。

綾子 ……。

坂本 それに、四十八時間をすぎると、又、いろいろと手続きが面倒になりますので……。

瀬尾 私共は、むしろ早く佐藤がここに現われてくれることを願っております。

坂本 大丈夫です先生。万全の態勢をとっておりますので、ここに来るまでに必ず捕まると思っています。

瀬尾 ……でも、もし万一、何かの手違いで、家の中まで入りこんで来ることがございまして、勿論、万々が一ということですが、決して騒ぎたてないで、お嬢さんに連絡をとるとか何とかいって、電話をして頂きた

いのです。すみません、何かメモ用紙を……

綾子、机の引出しから、便箋をとり出して渡す。

瀬尾 あ、これはお嬢さんの便箋ですね、いつも使ってたっしやる。

番号を記入して綾子にわたす。

瀬尾 一分以内に必ず誰かがかけつけます。綾子 はい……。

攻守ところをかえ、逃走の一件以来、とたんに神妙になった綾子である。「戸締りをしっかり」「犬も、いつものように放しておいた方が」など、注意を与えた上で、二人は帰りかける。

坂本 ……お嬢さんがお留守で幸いでしたわ。綾子 ……。

坂本 私共としましては、この事件が片づいても、お嬢さんに出頭して頂いて、感じやすい心を傷つけたりするつもりはございません。

せん。できたら、そっとしときたいと思っています。

綾子 (心から) お願い致します。

瀬尾 先生も、もしお叱りになるにしても、できるだけお手柔らかにねがいたいと思っております。

綾子 はい。

瀬尾 お嬢さんの手紙のコピー、おいて参ります。特に、一番最近の、この一通には眼を通し頂きたいと……。私共も、佐藤に見せたものかどうか迷った手紙です。こういうことになってみると、やはりみせなかった方がと……。

綾子 ……。

坂本 先生、もし御心配でしたら、私、ここに泊めて頂いても……。

瀬尾 (坂本に) そうして頂けると……。

綾子 お気持はありがたいけど、大丈夫。私も教師のはしぐれよ。家の中まで入ってきたら何とか説得して自首させるぐらいのつもりでありますわ。むしろ、なにかの手連いで入ってきてくれた方が……。外で、大騒ぎになるよりはずっと……。

瀬尾 ……そうですか、それをお聞きして安心いたしました。先生のお立場はよく

わかっております。御迷惑は決して……。いやあ、私も軍隊経験がありますもんで、小西中将閣下のお嬢さんだと思うと、うしろから閣下に睨まれているようで、(直立不動の姿勢をとる) こうなってしまうとした。とにかく、御協力頂けてホッとしました。

挨拶をして二人かえって行く。綾子は、張りつめていた気持がゆるんで、しばらくはソファに坐りこんでしまふ。ジェット機が通りすぎる。気をとり直した綾子は、庭におりて、犬のくさりをはずしに行く。犬の吠える声があちこちを駆け廻る。応接間にもどってきた綾子は再びソファに坐りこむ。もう、外はとっぷり暮れている。瀬尾のおいていった手紙のコピーを手にとる。玄関のベルがそっと鳴る。一度、二度、三度。凍りつくおもしろい綾子。やっとの思いでインター・ホンを押す。

綾子 どなたでしょうか。

声 (インター・ホンを通して) 中野です。

遅くなりました。

はっとする綾子。この瞬間まで中野たちのことはすっかり忘れていたのだ。でも、困ったことになったという思いである。

綾子 (インター・ホンに) いま、あけます。

玄関の扉をあける綾子。入ってくる中野と女生徒二人。山本洋子と、島田かおる。

中野 (呑気に) 今晚は、お邪魔します。い月ですよ外は。「いざよい」かなあ。

山本と島田、かたくなって黙って頭をさげる。中野ずかずかと部屋に入ってくる。

中野 犬、吠えませんでしたねえ、前きた時は吠えたんだけど。吠えたり吠えなかったりじゃ、たよりないなあ。おい、お前たちもぐずぐずしないで。

綾子 (冷やかに) 一寸失礼。

綾子は、テーブルの上のものを台所へ運ぶ。生徒たちは、敏感に歓迎されてない空気を感じとり、いよいよかたくなっている。

中野 おい、ちょっときてみる、こっちに。な、先生のお父さん。有名な、何とか航空隊の司令官だ……。こちらが先生のお兄さん、特攻隊でお亡くなりになった。

二人 かいこい。

島田 何だこれ？

中野 これか、これは電蓄だ。

山本 電蓄？

中野 昔はこれでレコードをかけたんだ。

島田 こんなのであるの？

中野は、何とか二人の気持をほぐそうと、懸命である。綾子、もどってくる。

綾子 (冷やかに) どうぞ、お坐り下さい。

四人、ソファに相対して坐るが、ぎこちない沈黙が流れる。長い間。

生徒たち、反抗の態度を示しはじめる。

中野 (何とかこの場の空気をかえようとして、立上る) 本当に御迷惑をおかけしました。本人たちも深く反省して、こうやってお詫びにうかがっておりますので……。おい、君たちからもお詫びするんだ。山本、島田。

二人、立ち上って形式的に頭をさげる。反省している態度ではない。

中野 おい、何だ、その態度は。口はないのか口は。

山本 すみません。

島田 ごめんなさい。

中野 申しわけありません。でも、この子たちにしてみればこれでも精一杯なんです。綾子 わかりました。今日のところは、どうかお引きとり下さい。

中野 はあ？

綾子 おひきとり下さいと申しあげております。

中野 でも、さっきは食事でも一緒にしてと

……。
綾子 (ポツンと) 時間がなくなりました。

少しの間。沈黙。

中野 いやあ、手をやいたんですよ、この二人には。行くといってみたり、行かないといってみたり、ひっぱってくるの大変だったんです。遅くなって申しわけありません。

綾子 来たくなければ来なくて結構でした。

中野 先生、

山本 帰ろうよ、島田。

島田 だから、いやだと云ったのね。

綾子 中野先生、この子たち本当に反省してるとお思いですか。この子たち何やったのか御存知でしょう。(メモをとり出す) こんなメモを、私の眼を盗んで授業中に廻したんです。倫理の時間ですよ、

中野 先生、約束でしょう、むしかえしたりはしませんと……。

綾子 これが、女の子のやることですか、

中野 そのことは先生、一応、結着がついてるはずですよ。この子たちには厳重に注意を与え、反省させた上で……。

綾子 反省なんかしていません、君たち、

自分のやった事がわかってるの。このメモよんでごらんさない。

反抗的にメモをとりあげて、声を出してよみはじめる二人。

山本 アンケート。「避妊用具は誰が買うものか」次の各項の正しいと思うところに、名前を記入せよ。

中野 おい、洋子、かおる、

島田 問題A。コンドームは。(1)男が買う。

(2)女が買う。(3)一緒に買う。

中野、メモをとりあげようとするが、逃げ廻るようにしてよみつづける二人。

綾子 (叫ぶ) おやめなさい!

二人は、してやったりと、満足気にソファに坐る。

綾子 (いつになく興奮して) 中野先生、これでも、反省すると云えますか。このメモ、私が気づかなければ、クラス中に廻さ

れてたんですよ。しかも……職員会議では申しませんでしたけど、注意した私に向って、この子たちは云ったのよ(くやしさがこみあげてくる)……おぼん、あんたやいてんのね。経験がないから、わからない……。(興奮してくる)セ、生徒が、教師に向って言う言葉ですか、

中野 先生……。

息をのむ思いの洋子とかおる。二人とも、こんな興奮した小西先生をみたのは初めてのことである。
犬が吠え、台所のベルが鳴る。はじかれたように立ち上る綾子。その余りの激しさに茫然とする三人。丁度、綾子が三人に対して対峙した形になる。

中野 申しわけありません。(深々と頭をさげる)

二人 ごめんなさい。(はじめて、形式だけでない頭の下げ方)

ベル、もう一度なる。立ちすくむ綾子。勝手口で、大きな声。「おまち

どおさま。二葉寿司です。出前とどけにきました」。放心したように、坐りこむ綾子。

中野 私が注文したんです。さっき電話でお話し致しましたように、皆で一緒にと思ひまして……。

声 二葉寿司ですがあ。

中野 はい。

綾子 (やつのことで、声になる) ごめんなさい。実はあれから、急に大切なお客様がみえることになって……。少しこみいった問題なので、つい、その事ばかり気になって。ごめんなさい。

中野 わかりました。じゃ、又、出なおしてくるか。

声 二葉寿司ですが。

中野 はい。今いきます。

中野、台所の方へいく

中野 ……(大きな声で) 悪いけど、そのお寿司もって帰ってくれないか。僕等、お宅にいったべるよ。

洋子、ドアのところから台所へ声を

かける。

山本 先生、小西先生の分。

中野 ちょっと待って、一つだけおいていて……。

山本 お客様。小西先生のお客様。

中野 いや、ちょっと待って……(ドアのところまで戻って) 先生、お客様は一人ですか。

綾子 え? はあ。

中野 (又、台所へ) じゃ、二つおいていて……。いまあけるから。

中野、やがて寿司を二人前もって帰ってくる。

綾子 (素直に) ありがとう。

中野 じゃあ、又、参ります。

二人 さようなら。

綾子 折角来てくれたのに、ごめんなさいね。今度は私が御馳走するわ。君たち、うちの高等部が第一志望だったわね。でもトコロテンというわけにはいかないのよ。しっかり勉強してよ。……(メモを示して) 避妊の紙の字は、人偏じゃなく女偏よ。はずか

しいわねえ。

メモを破り、丸める綾子。

中野 先生……。

綾子 じゃ又ね。

綾子、先に中野を玄関に送り出す。一足あとに残る二人。

島田 山本。今日のおぼん、何だか変ねえ。

山本 調子狂っちゃうよなア。

三人を送りだして、又、玄関の扉を嚴重にロックする。心痛の余り、コメカミの辺りが痛む。頭をおさえてソファに坐りこむ綾子。瀬尾のおいていった手紙を読む。

綾子 : 勉強、勉強。受験、受験の時間きざみの毎日、それしか私たちのとる道がないのなら、悩んだって仕方ありません。我慢するしかないのです。そう思っ、これ迄我慢してきました。でも私、もう耐えられそうにもありません。もうだめです……。

深いため息。犬が吠える。吠えつづける。……そと、カーテンをあけて庭の方をのぞく。犬の声少しおさまる。別に怪しい気配もない。ガラス戸をあけて、外に出て犬に話しかける。犬が近づいてくる感じ。

綾子 太郎、あんまりおどかさないでよ。……どうしたの、さっき、食べさせて貰ったばかりでしょう。ポケちゃったのねえ、人間とおんなじ。

別の方向から、別の犬の声。それに合せて又、太郎が吠えはじめる。

綾子 (笑って) なあんだ、太郎は、お向いのメリーちゃんのことを気になるのね。でも可哀そうだからだめよ。太郎は、人間でいったらもう六〇よ。太郎の青春はもう終わったの、誰も相手にしてくれないの。……おやすみよ、ハウス！

綾子カーテンをしめる。太郎の声、まだつづいている。暖炉の前になつ

て三枚の写真をじつと眺める。そして暖炉の上から、古い箱をもってくる。中から使い古した昔のレコードと手紙をとりだす。そしてレコードをかける。「庭の千草」である。綾子は、レコードと一緒にとりだした古い手紙の中の一通を手にとり、読みはじめる。ジェット機が通りすぎる。

綾子の中で、ジェット機の音が、プロペラ機の急降下の音。そして戦斗音にかわっていく。綾子だけがスポーツの輪の中に浮んでいる。そして、壁にかかっている兄と、親友の緒方の姿にもスポット。

兄一郎の声 ……綾子、書きたいことは一杯あるがもう時間がない。全機特攻の命が下った。緒方は第一陣で、既に、出撃した。お前あての走り書きを預ったので同封する。思えば不思議な因縁だ。中学、高校、大学とずっと親友だった緒方と一緒に出撃とは思いのこすことは何もない。天皇陛下の御為に喜んで死ぬだけだ。父上、一足先に参ります。父上もきっと私たちにつかれる

ことでしよう。母上、先だつ不孝をお許し下さい。くれぐれもお身体を大切に。……綾子、母上や、哲郎をたのむ。奈美子さんにもよろしく。

綾子 ……一郎兄さん。

嗚咽する綾子。緒方の声がきこえてくる。

緒方の声 綾子さん、これから出かけます。今、僕の耳には、貴女の好きだった「庭の千草」の曲がきこえています。幸せをいります。振武特攻隊海軍予備少尉緒方公一。特攻機をつっこむ音。やがて、ぶつんと途切れる。全くの静寂。照明、もとにもどる。じつと動かない綾子。レコードつづいている。

庭の千草も 虫の音も
絶えて久しくなりにけり
おお、白菊 おお、白菊よ
ひとり遅れて咲きにけり

— 幕 —

第二幕

じつと動かない綾子。レコードの音楽が静かに流れている。
長い、長い間。

コツ、コツと、ガラスをたたく音。一度止って、又、コツ、コツとたたく音。太郎のうなり声。吠える声。これまでとは違い、襲いかかる気配である。今度こそ間違いない。とっさに、レコードをとめ、部屋の明りを消す。月の光りで、うすいカーテンを通して、シルエットが写る。ガラス戸をたたく音、激しくなる。「小西さん、小西さん」の切迫した声も。太郎が襲いかかる。低い、悲鳴。犬と人間との格闘。ガラス戸をたたく音、いっそう激しくなる。立ちつくす綾子。だが、男の、助けを求める声に、決断する綾子。

綾子 (犬の訓練用語で、叫ぶ) ストップ、太郎、ストップ。……ストップ！

綾子は、叫びながら、急いで、ガラス戸をあける。

綾子 太郎、伏せ！

太郎は、うなり声を残しながら、指示に忠実に従う。作業衣姿で、懐中電燈を手に帽子をかぶった若い男が立っている。男は、犬との格闘で、息をはずませている。すぐには声も出せない位である。間。太郎はいつでも襲う体勢でうなりつづけている。

綾子 あなたは……。

川村 ……犬を、犬をつないで下さい。大丈夫です。よく訓練されています。……あなたは……。

太郎うなる。男、思わず、又、身がまえる。太郎、いっそう激しくうなる。

綾子 太郎、待て！ 待てよ。……

対峙する格好の二人。

川村 ……私、少年院の……(と近づこうとする)

綾子 よらないで！ ……太郎、待てよ……！
伏せ！

川村 少年院の……瀬尾さんの部下です。これが身分証です。

綾子 身分証と、そのライトをそこにおいて。私に近よると太郎がとびかかります。

男は、こわごわと指示に従う。綾子は、身分証を点検する。ふと思いついて……

綾子 帽子をとって……。

川村 あ、はい。

綾子、懐中電燈で、男の顔をてらす。黒々とした髪。坊主頭ではない。

綾子 ごめんなさい。(部屋の明りをつける) 太郎、ハウス！ あっちへいくの。ハウス！

犬、吠えながら遠ざかる。「小西さん、何かありましたか」などの言葉

と一緒に駆けつける瀬尾。「どうした川村」など。

綾子、いそいで太郎をつなぎにいく。

川村 いやあ、もう少しで、ガブリとやられるとでしたよ。主任、ボケ犬だなんて、とんでもないですよ。

綾子 ごめんなさい。今、つなぎましたわ。どこか怪我は。

川村 (腕や足をみながら) いや、大丈夫です。ところで、腰をうったくらいで……。

何ともありません。……小西さんのお蔭で命拾いました。いやあ、よく訓練されていますねえ。(帽子で泥を払う)

綾子 坊主頭をかくすために、わざわざそんな帽子かぶってるとばっかり……でも、太郎とめてよかったわ。

瀬尾 災難だったな。オイボレだから大丈夫だって、オレが云ったのが悪かったかな。……いいよ、車で待機しといてくれ、又、何か情報が入るかもしれん。小西さんへは、僕から話す。

川村 ハッ。

綾子 本当にごめんなさい。

川村 去る。綾子、部屋にあがる。

綾子 さあ、どうぞ。

瀬尾 (靴を脱いで部屋に入ってくる)

ちょっとした情報が入ったので、川村君をしらせにやっただけです。……これでは、部屋の中までは、絶対に入ってはこれませんが、説得して自首させるとおっしゃいましたが、無理のようですねえ。

綾子 さっきは、そんな偉そうなこと申しましたけど、足がふるえました。

瀬尾 やっぱり、入ってこない方がいい、ですか。(笑う)……でも、有難うございました。

綾子 え？

瀬尾 佐藤にちがいないと思いながら、助けて下さった。

綾子 ……わたくし、とっさのことで、自分でもよくわかりませんが、どうして、太郎をとめたのか。(話題をかえて)あおう、情報とおっしゃいましたが。

瀬尾 ええ、この辺に立廻ってるのは確実なようです。立誠学園にもいつてるようです。

綾子 え、うちの学校に。

瀬尾 それらしき少年をみかけたという情報

があります。もっとも、坊主頭の少年は、佐藤だけではありませんけど。

綾子 ……

瀬尾 とにかく充分気をつけて下さい。庭の方は、ワンちゃんにまかせて大丈夫のようですから、……又、放しておいて下さい。私どもは、外の方の張込みに専念します。おまかせ下さい、貴方のお立場は充分心得ておりますから。

綾子 くれぐれも、よろしくお願い致します。(深々と頭をさげる)

瀬尾 ひょっとすると今夜はこないかもしれないよ、近くまで来たにしても、警戒が厳重なのであきらめる。……あきらめて自首してくるというケースもあるんですけどね。

綾子 ……

瀬尾 (時計をみて)お、もうこんな時間だ。ワンちゃんにまかせて、その、ソファでもおやすみになった方が……。

綾子 とても、横になる心境ではございませんわ。……久しぶりで、戦死した兄の手紙でもと思って、読みだしたところですの。……私が寝こんで、その子が、太郎にガブリというのも可哀想ですし。

瀬尾 (頭を下げる)

綾子 アコの手紙、よみました。……ああは云ったものの、佐藤君からの手紙よっぽどさがしだしてと、正直いって思いました。でも、やめにしました。読まなくなっちゃ、どんなこと書いてよこしたのか、アコの手紙から大体、想像つきますもの。……私も勉強勉強と云いすぎたのかも、しれせんわ。少し反省しております。

瀬尾 ……

綾子 教師って、つらい仕事ですわ。それに学校の経営も考える立場もありますので……。

瀬尾 ……

綾子 アコは頭っから、もし手紙が伯母さんにみつかったらと、私のこと、きめつけてるようですけど、どうでしょうかねえ、もし最初から御相談をうけてれば、御協力したのかもしれせんよ。

瀬尾 申しわけございません。

綾子 ただし、秘密を守って下さるというのが条件ですけど……。

瀬尾 それは、勿論。今後とも、そう致すつもりであります。……どのような決着がつこうとも、お約束は必ず守ります。先生や、

お嬢さんには決して御迷惑は……。

綾子 よろしくお願い致します。

瀬尾 じゃ、私はこれで。太郎、吠えませぬえ。私のこと覚えてくれたようですね。ボケ犬なんてとんでもない。(笑う)

瀬尾 去る。綾子は、再び戸じまりをし、カーテンを二重にしめる。やっとな、少し、落着いてきた感じである。ソファに坐る。もう一度、兄からの手紙を手にとる。長い間。

テレビ台のすぐうしろから、そーとと、佐藤和夫が立ち上る。いつの間にか、そこに隠れていたのだ。どこで手にいれたのか、トレ・パン姿。足音をしのばせて綾子の前に廻りこむ。テーブルの上の、果物ナイフを手にする。犬が吠える。顔をあげる。綾子。

綾子 あ……。 (と思わず立ちあがる)

和夫 静かにして下さい。声さえたてなければ何もありません。綾子は、はい。

和夫 坐って下さい。……さっきから、聞いていました。

少年の指からは、血が流れている。顔も、血と油で汚れている。

綾子 どうして、家の中に……。その手は。

和夫 説明してる暇はないんです。お願いです、アコに会わせて下さい。

綾子 ……

和夫 会わせてさえくれれば、すぐに出ていきます。自首します。

犬がはげしく吠える。インター・ホンのブザーが鳴る。はっとする二人。川村の声 (インター・ホンを通して) 小西さん、さっきの川村です。

少年は、ナイフを綾子につきつけ、インター・ホンに出ると指示する。

綾子 ごめんなさい、今、ちょっと……着がえを……。

川村の声 あ、どうも……。いや、そのまま、

きいて下されば結構です。

綾子 何か……、ございましたの。

川村の声 立誠学園の用務員さんの話では、洗濯して、ほしておいたトレ・パンがなくなっただけで生徒が云ってたそうです。ひょっとすると、佐藤がそれに着替えたのかも知れません。

綾子 ……わかりました。

川村の声 一応、お耳に入れます。じゃ、気をつけて下さい。

川村、去った様子。太郎、静かになる。間。和夫のナイフをもつ手がふるえている。反対に、綾子は、冷静である。

綾子 わかったでしょう、私は、君の味方よ。

さあ、坐りましょう。

和夫 おばさん、時間がないんだ。アコに、会わせて下さい、お願いします。（立って、歩きだす綾子に）どこにいくんだ！

綾子 救急箱もってくるの。……疑うのだったら一緒に来て……。

キッチンの方へいく綾子。あわてて、

後を追う和夫。やがて、救急箱をもつて帰ってくる。

和夫 おばさん、時間が……。

綾子 時間は充分あります。誰も、この部屋には入ってきません。……ほら、そんな顔で、アコに会うつもりなの。さあ、そこに坐って。

綾子は、アルコールで顔をふき、手の傷を消毒する。

和夫 あっ……

綾子 何です生爪はがしたくらい。男でしう、しっかりするの。

和夫 はい。（我慢する）

綾子は、手早く、傷の手当をする。その間、和夫は部屋のあちこちを見廻している。

和夫 ……アコの手紙の通りだ。あれが、アコのお祖父さんとお祖母さんで、あれが、戦死した伯父さんと、それから伯母さんの……。（綾子の方をみる）そうでしょう。

綾子かまわずに手当をつづける。

和夫 （部屋を見廻しつつ）あの机が、伯母さんの机で、あのドアの向うが……。

綾子 そう、アコの部屋よ。私の本もおいであるけど……。よし、これで大丈夫。

和夫 お願いします。会わせて下さい。会って一言云いたいんです。一言だけ。……会わせて下さい。……そうすれば、おとなしく自首します。

綾子 ごめんなさい。私も、会わせてあげたいの。でも、本当のこのうと、アコは留守なんです。

和夫 留守？

綾子 あの子……友達のところへ遊びにいます。明日は、お休みでしょう。

和夫 遊びに？ 伯母さんが、アコを遊びに行かせるなんて、そんなこと信じられるもんか、ウソだ！

綾子 静かにして下さい。外にきこえます。

和夫 （急に弱々しく）伯母さん、僕は、本当にアコが心配なんです。僕と同じようになりはしないかって。悪いことなんか、何もしやしません。一眼だけ会いたいんです。

ち上る）……ついてきてもいいのよ。

和夫、首をふる。シャッキリが出る。

綾子 じゃあ、そろそろたべててよ。

和夫、今度はゆっくりとたべる。たべながらも、警戒はゆるめない。少しの物音にも神経をビクビクさせている。犬が吠える。あわてて外をのぞく和夫。綾子、お茶をもって帰ってくる。お茶をいれる。

綾子 さあ、少し、ぬるめにしといたわ。

和夫、一息にのむ。シャッキリ止まる。思わず、微笑み会う二人。

綾子 （もう一杯お茶を入れ乍ら）よく、ここまで入ってこれたわねえ……

和夫 ……一晩中、歩きづめに歩いて、くらいうちに、学校について……

喋りながらも、たべたり、お茶をのんだりする和夫。

綾子 そこで、このトレパンにはきかえたとわけね。

和夫 （うなづく）……アコちゃんの手紙の通りでした。朝早く、一番最初に学校にきたのは、伯母さんです。トヨベツト・クラウン、すぐにわかりました。

綾子 さあ、こつちもたべていいのよ。

和夫 ハイ……。僕、思いついたんです。車のトランクに隠れていようって。

綾子 トランク？

和夫 みつかったらそれまでだけど、もしみつからなかったら、僕をアコのところまで運んでくれるって。

綾子 じゃ、ずっと、あの中に……

和夫 息だけはできるように、薄いボロ切れをはさんでおいたんです。……この家についてたって思った時はうれしかった……これでアコに会えるって。でも、出れないんです。もがいても、もがいても、フタがしつかりとしまっただけで、あかないんです。

綾子 じゃ、そのときにこの手を……

和夫 そのうちに、息がくるしくなってもうだめだと思いました。やっとの思いでこ

こまできてと、トランクをかきむしって、大声で叫びました。でも、外にはきこえないですよね。あきらめました。

綾子 ……

和夫 でも、どうしてだかわかりません、めちゃめちゃにかきむしっているうちにトランクがあいたんです。外の空気がすうーっと流れてきて……助かったと思った途端、しばらく、気を失ったようです。

綾子 よかったわねえ……（涙ぐむ）

和夫 （哀願する）お願いします。会わせて下さい。こうやって、やっとたどりついたんです。

床に両手をつく和夫。綾子は、思わず、和夫を抱きしめようとする。が、かううじて思いとどまる。そして、気をとり直す。

綾子 （冷やかに）私、何処にいったか知らないんです。いいえ、知っていたって、教えることはできません。……お願いします。帰して下さい。

和夫は、ナイフを握って立ち上る。

綾子と向い合う。みじろぎもしない綾子。かううじて自制する和夫。和夫は、身をひるがえして、「アコ」と叫びながら、アコの部屋にとびこんでいく。押入れをあける音など。いない。勝手口の方へも走っていく。やがて力なく帰ってくる。アコの写真をみつただけである。

和夫 そうか、本当にいないのか……。

手にしたアコの写真を静かにみつめる。

和夫 アコ……。

綾子 （冷やかに）やめて下さい。その子は、君とは、何の関係もありません。早く、出ていって……。

和夫 （綾子をにらみつけて）僕は、こわいんだ。思いつめると何をするかわからない……この手が、ひとりでに動きだして、

綾子 おねがい……でいて……。
和夫 この手で、人を殺したんだ。何故、そんなことになったか、あんたにはわかるまい。

綾子 ……（かすれ声で）わかります……。和夫 あんたは、おやじやおふくろが、おれにしたのと同じことを、アコにしているんだ。わかってたまるもんか！（弱々しく）アコだけだ、本当にわかってくれたのは、アコ一人だけなんだ……。

和夫は床に坐りこんでしまふ。最後の決意を固める綾子。

綾子 ……さ、立って。（肩をやさしく抱いて）今、電話で、アコを呼んであげます。

和夫 え？

綾子 但し、条件があります。

和夫 ……

綾子 アコとの交際は、これっきりにして下さること、それが条件ですわ。

和夫 （弱々しく）伯母さん……。

綾子 いやだとおっしゃるなら、私も、呼ぶのよしにします。

和夫 ……

綾子 いずれにしても、こうなった以上、私はアコに手紙を出すの止めさせます。それから、もう手紙を出すことを許しては頂けないでしょう。

和夫 （泣き伏しながら）会わせて下さい！

ん。わたしの力では……

和夫 ……

綾子 早く、逃げて……。 （庭に面したガラス戸の鍵をはずす）

和夫 じゃ、やっぱり。畜生っ！

ナイフをふりあげる和夫。逃げる綾子。

追いつめられる綾子。太郎が、はげしく吠えはじめる。

綾子 やめて！ 逃げて、早く……
和夫 ……（叫ぶ）くそっ！

綾子、緊張の余り、軽いメマイを起してふらっとする。かううじて、壁に手をついて支える。

和夫 チクったな！

綾子 ……

和夫 はい、承知しました、大丈夫です。引

きとめておけとでも頼まれたのか。

綾子 いえ、わたしは……（じりじりと後にさがりながら）……どうぞ、帰して下さい。私、もう、どうしてあげることもできません

叫びながら、襲いかかる和夫。綾子は、無意識に、傍の花瓶に手がいく、襲いかかる和夫をなぐりつける。悲鳴をあげて、床に倒れる和夫。茫然と立ちつくす綾子。庭で、「どうかしましたか、小西さん」「小西さん、小西さん」の声。鎖につながれたままの太郎が、狂ったように吠える。

川村 おい立て！ 一体、どこから入りこんだんだ。

瀬尾 危いところでした。事情はほほわかり

ます、今夜は、お疲れのようですから、明日にでも、又、いろいろうかがいます。

おい、川村君。

川村 さあ、いくんだ。

連行される佐藤。二、三步いってふ

りかえる。

和夫 アコに代って、あんたを殺してやりたかったんだ！

綾子 ……

連れ去られる和夫。立ちつくす綾子。

瀬尾

ちょっと電話を拝借します。(ダイヤルを廻す)……小西先生、お約束は守ります。お宅には決して御迷惑は……ですからお嬢さんには余り……あ、院長、瀬尾です。佐藤を捕えました。これから、連れて帰ります。はい、そうです。予想通りでした。……奥多摩署の方には院長から……くわしい事は戻りましてから……はい。よろしくお願います。

……(電話を切って)では、いろいろと、御協力有難うございました。

瀬尾出ていく。自動車の走りさる音。

綾子、そこらを片づけはじめる。……

そして、気を落ちつけようとしてか、「庭の千草」のレコードをかける。

そして、アコの部屋から、和夫の手

紙の入った箱と、ブランデーを持ってくる。注いで飲む。手紙をとり出して、じっとみつめるが、そのままたして、グラスをもって机の方に行く。引出しから、便箋をとり出して、手紙をかきはじめる。

綾子

……悲しい出来事を、今、伯母の口からさかされたところです。伯母は、あまり叱りませんでした。傷は如何ですか、伯母にかわってお詫びします。でも、私は……

じっと、考えてむ綾子。

そして、照明、しずかにかわって、綾子の想像の世界になっていく。

エ ピ ロ ー ゲ

綾子の頭にうかぶイメージの世界。

舞台、下手に、少年院の一室。手紙をよんでいる和夫。

和夫

……傷は如何ですか、伯母にかわって

お詫びします。でも私は……

綾子

(手紙をかきながら)でも、私は、和夫さんが、そんなにも私のことを心配して下さったことに感激しています。トランクの中にかくれていた和夫さんのことを考えると、こうして書いていても、涙があとからふきでくるのです。アコは本当に幸です。

和夫

アコちゃん……

この辺りから二人の架空の対話になっていく。

綾子

お礼をいうわ、この一年、どんなに私、たのしかったことか……。でも、私、決心したので、これを、最後の手紙にしようって。

和夫

アコ……

綾子

違うの、伯母は叱らなかったわ。……伯母の云いつけで、そうするんじゃないの。アコが自分で決めたの。和夫さんのためにも、アコのためにも、その方がいいって、そう思ったの。

和夫

……

綾子

大丈夫よアコ。あんな思いをして、会いに来てくれた和夫さんのことを思ったら、

どんなことだって我慢できるわ。……でも、

つらいときには、和夫さんからの手紙、よむことにするの。和夫さんだって、時々、

アコの手紙よんでくれるでしょう。

和夫

あ、勿論だよ。

綾子

そうすれば、いつだって、私たちは、話し合うことができるの。私たちの、美しい夢の世界ね。……そこじゃ、私たち……どこえでも、二人の好きなところへ、自由にゆくことができるのよ。海へでも、山へでも、川へでも……どこえでも……

ジェット機が通りすぎる。それが戦

斗音へとかわっていく。……その中で、和夫の姿がいつのまにか、海軍士官緒方公一にかわる。そして、綾子の若き日の思い出がよみがえってくる……。

音楽、明るいトーンになって。客席にアコ(若き日の綾子)登場。

アコ

和夫さん。(手をふる)

和夫

アコちゃん。(手をふってこたえる)

呼び会う声のエコーの中で、舞台へ

走りよるアコ。突然、アコが、止まる。小川である。

アコ

……きれいな流れ、あつ、魚がおよいでる。(靴をいそいで脱ぐ)でも、何だか冷たそうねえ。

緒方

ようし、待ってろ。

緒方

は、ズボンをまくりあげて、ジャブ、ジャブと川の中へ。そして、アコに背中を向ける。

緒方

さあ、……何をしてる。早くおぶさるんだ！ 早く！

緒方

尻ごみをしつつ、おぶさるアコ。

緒方

しっかり掴まってろ。

緒方

ジャブ、ジャブと川をわたる。

緒方

はれ、着いたぞ。……何してるんだ。早くおろよ。ほら！

アコ

ケチンボ！

アコ、公一をつきとばして逃げる。

緒方

やったな、この野郎！

笑いながら逃げるアコ。追う公一。

アコ又、止まる。吊橋だ。

アコ

何だか、こわい、この吊り橋。

緒方

よし、僕の手、しっかり握ってろよ。

二人、手をつないで、そーっとわたる。途中でぐらりとゆれて、悲鳴をあげて、しがみつくアコ。

緒方

しがみつくと危いんだ。……身体の緊張を抜く。(号令風に)

アコ

はいっ。

渡り終る。

アコ

やっとついたわ。(見廻して)きれいだわあ。あ、みえるわ、あれが富士山……。

緒方

あれが……。

アコ

鈴虫よ。……(足元に眼をやって)きれいなお花ね。あつ、この花、家の庭に咲

いてたわ、あ、これも、これも……（歌
いはじめる）庭の千草も、虫の音も……

二人、いつの間にか、並んで腰をお
ろしている。歌いつづけるアコ。
音楽……
再び、手紙を書いている綾子にもど
る。庭の千草のレコードつついてい
る。

綾子（書き下ら）では、さようなら。これ
でお別れです。いつまでもお幸せに……。
ひとりぼっちでないアコより、ひとりぼっ
ちでない和夫さんへ。

レコードつづく。太郎が吠える。そ
れに呼応するかのようにメリーの声
も。じっときいている綾子、再び、
七、八通の和夫からの手紙を手にす
る。

綾子 ごめんなさい、和夫君。私のほかには、
アコはいないのよ。

思いきって破りする。二度、三度、

四度と。そして、奈美子の名刺をと
り出し、ダイヤルを廻す。

綾子 もし、もし、大橋さんのお宅ですか、
奈美子さんいらっしゃいますか……ああ、
奈美子さん、綾子です。……いいえ、とん
でもない。……ねえ、貴女、明日、何か御
予定おありなの……そう、でしたら、おヒ
ルでも御一緒しません。何でしたら小母様
も。私の、お料理の腕、おみせしますわ。
保険の方も、考えてみます。何が起るかし
れないがっそうな世の中ですものね。それ
に、案外、私、長生きするかもしれません
しね。（笑う）

ジェット機、通りすぎていく。その
音に、綾子の笑い、たち切られる。
ストップ・モーションのまま……。

—幕—

五三号後記

◇先ず本号で掲載できなかった劇評二篇について。ひとつは、劇団
大阪の「大枝の鬼」でしたが、筆者から連絡をいただいたのは、締
切を十日近くも過ぎていて手の打ちようがなく、もう一つは、こじ
か座の「捨へんど寒葉」を論じられた野村秀夫氏のプリントでした。
野村氏は観劇された舞台と戯曲にそくして克明に論評されています
が、舞台も戯曲も知らぬものにとっては、難解で、何よりも四百字
詰原稿用紙で五〇枚を越えると思われる大作です。再三、抄約を試
みましたが、無理とわかりました。もちろん、これは、野村氏が「演
劇会議」誌などを考慮に入れて、ものされたものではありません。
掲載不能は別として劇団こじか座にとっては貴重な劇評に思えま
した。

◇黒沢参吉劇作集が、二月十一日の「演劇大学」に、分納でしたが
間に合いました。黒沢議長と「演劇大学」のえにしを感じます。

この著作には、黒さんの全貌がコンパクトされていて、何よりも
それが有難かったという声がたくさんときました。しかし、読了
するには時間がかかるようです。これは田畑実戯曲集にも言えて、
どちらも、本誌での、まとまった「読後評」にはしばらく、時間を下
さい。その中へ、いち早く完読されて、テアトロ四月号に紹介し、
下さった、テアトロ編集長野村喬氏に感謝申し上げたいと思います。
有難うございました。

△おことわり▽

このドラマはフィクションであり、実在の
事件、人物、団体名、地名等は一切関係あり
ません。

なお、上演ご希望などの場合は左記にご連
絡下さい。

151 東京都渋谷区千駄谷五―三三―六
青年劇場

電話 〇三―三五二―六九二二

151 東京都渋谷区笹塚二―四―一 1401
瓜生正美

電話 〇三―三七四―六六二七

◇次の五四号は、東・西リ演史と全リ演加盟劇団の詳細な名簿で特
集を企画しております。東リ演史はすでにこばやしひろしさんによ
って完成されており、西リ演史は、土屋清さんが鋭意執筆中です。
加盟劇団は、万ヶ一にも、全リ演名簿から洩れることのないよう、
近くおねがいするアンケートに必ずお答え下さい。
◇統一地方選挙戦たけなわです。校正の出る頃には、東京、大阪、
福岡などの知事選の結果もわかるでしょう。投票の仕方に、出ても
いたくない人に×印をつけて、マイナスに作用する投票もあって
もいいのではないかと考えたりしています。

（もも）

演劇会議 五三号 一九八三年四月三〇日発行

定価 五〇〇円（送料二〇〇円）

編集委員

萩坂桃彦・こばやしひろし

発行所

丸子礼二・仲 武司・藤沢 薫

森本景文

演劇会議 発行所

〒210 川崎市川崎区渡田四―一―三

はき書房内

電話（四四）（33）（七七五

誌代振込は

川崎信用金庫小田支店 一三三二七へ
または郵便振替 横浜〇―一七二二七へ

労働者演劇から生活者の演劇へ
不屈50年の業績——ここに全1冊として登場

黒沢参吉劇作集

好評発売中 ¥4,000 (〒350)

◆収録作品

雷神長者	歌えわかもの	真土村一揆
ふかい疵	生まれた家	夜
日鋼室蘭	巣ばなれ	金魚修羅記
光江帰る	告 発	ただ海燕だけが
教育を!	俺たちの夜	とろいめらい
炉あかり	傷だらけの天使	海の墓
サチの暦	〈回想的解説〉萩坂桃彦	

黒沢参吉劇作集刊行委員会

団のぼる／萩坂桃彦／中沢研郎
関 昭三／須田輪太郎／和田能久

〒210 川崎市川崎区渡田4-11-3
はぎ書房内

「演劇会議」発行所

TEL 044 (333) 0775
振替 横浜0-17227